
鋼鉄のネフィリム

一城一樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鋼鉄のネフイリム

【NZコード】

N9714V

【作者名】

一城一樹

【あらすじ】

人ならぬ怪物、グレムリン 金屬を喰らい、文明を破壊する異形の生物との戦いが続く中、一人の新人兵士が特機小隊に配属される。

人型をした異端の兵器に訳有りの同僚達。

抗いがたい歴史のうねりに巻き込まれながら、青年は己の成すべきことを見出していく。

(第一章 了。この小説は外部サイト「Arcadia」との二重

投稿
です
(

第一話 少女との出会い

一一〇一 一年 九月三十日 鳥取県岩美郡岩美町小尾羽

海沿いを走るローカル線に揺られながら、怜次は窓の外に目をやつた。右側の窓には青々とした日本海が広がり、左側の窓には紅葉を間近に控えた山々が並んでいる。聞いた話によれば近くに温泉も湧いているそうなので、骨休めの為に訪れるなら絶好の環境だろう。だが、至極残念なことに、怜次がこうして鉄道に乗っている理由は別にある。

「……明らかに浮いてるよなあ、俺」

怜次は窓から視線を外した。吊り下げ広告の田立つ車内には、およそ二十人程度の乗客が座っている。思い思いの普段着や学校の制服、着こなされたスーツ姿など、格好も年齢もバラバラだ。

その中でただ一人、怜次だけが濃緑色の軍服を身に纏っていた。厳密には日本陸上自衛軍の夏用制服。白いシャツに長袖の上着といつ、見るからに軍人の制服といった雰囲気の装束だ。

襟に指を引っ掛け、形を整える真似事をしてみる。怜次は今年の四月に入隊し、半年間の教育期間を終えたばかりの正真正銘の新兵である。十九歳まであと半年近くもある怜次にとつて、似合わない軍服で人前に出るのは妙な恥ずかしさがあった。

『次は、岩美。岩美に停車します』

車内アナウンスが響き渡る。乗客達の雰囲気と同じく、妙に呑気な語調をしていた。

「やっぱり、この辺りはまだ平和なんだな……」

四半世紀前 つまり一十五年前に、世界の歴史は大きな曲がり角を迎えた。

それまでの常識では考えられない奇妙な戦争の発生。いや、果たしてそれを『戦争』と呼んでいいものなのかも定かではない。ともかく、人類は現在に至るまで理不尽な戦いを強いられ続けていた。

戦いがこんなにも長引いている原因は、たった一つの理由に集約される。

これは『人ならぬモノ』との戦いなのだ。

しかし、世界の隅々まで戦争一色というわけでもなく、ここのように平穏この上ない空気が漂っている場所もある。喻えるなら砂漠のオアシスといったところか。

『当車両は緊急停車致します。周囲の物にしつかり掴まり、身の安全を確保してくださいよ』つお願い致します』

唐突な警報の直後、車両が急激に減速。車内の人間が慣性で押し流されていく。怜次はあちこちから上がる悲鳴を聞きながら、座席にしがみついて衝撃に抵抗した。

「な、何だよ、おい!」

平穏から一転。車体が完全に停車した頃には、車内は混乱と喧騒の坩堝と化していた。大声や怒号に混ざって子供の泣き声まで聞こえてくる。

車両の最後部から車掌が飛び出してきた。そして、落ち着いて避難するよう呼びかけ始めた瞬間、まるで落石でも直撃したかのよくな凄まじい衝撃が車体を揺るがした。

「うわあああつ！」

「さやあああつ！」

ついに乗客達の混乱が頂点に達する。車掌の必死の呼びかけも悲鳴にかき消され、非難経路の説明すら満足に行き届いていない。

「くそつ！ 今の衝撃……落石か？」

そんな状況下でも、怜次は不思議と冷静さを保つことができていた。半年間とはいえ軍人としての教育を受けたおかげか、それとも混乱が一巡して冷静さに変わってしまったのか。どちらにせよパニックを起こすよりは遙かにいい。

怜次は上下スライド式の窓を開け放ち、数十センチ四方の窓枠に上体を捻じ込んだ。

潮の匂いを帯びた風が吹き抜ける。その香りを堪能する暇もなく、金属の塊を押し潰す不快な音が怜次の鼓膜に襲い掛かった。

「あれは……」

先頭車両の車体側面が内向きに潰れ、大きな穴を潮風に晒している。

そして、車体に覆い被さる巨大な影 ワイヤーを束ねたような筋肉。それに覆われた六本の脚と、身体全体を包む金属質の装甲。鉤爪を車体に食い込ませ、長い首をうねらせてプレス機のような顎で車両を喰いちぎるその姿は、この世の生物とは思えない有様だ。

大きさは六肢を伸ばして車体を包み込むほど。一階建ての建物くらいはあるだろうか。水牛の死体を喰らうハイエナのよつて、金属製の車体を咀嚼し飲み込んでいる。

「グレムリン！」

怜次は思わず叫んだ。

鉄を喰らい、鋼を喰らい、遍く金属を喰らひつ金属の怪物。それこそが世界に蔓延る人類の敵。

「どうしてこんなところに……！」

車内の騒がしさが一段を増していく。他の乗客達も怪物グレムリンの存在に気が付いたようだ。このままではすぐに壮絶なパニックが起こってしまうだろう。怜次は歯噛みした。どうにかしなければならないと分かっていても、どうすればいいのか分からない。上半身を車内に引き戻すと、中年の乗客が非常用ドアロックを捻つて扉を開けようとしているところだった。

「馬鹿、止める！」

「つるせえー！このまま食われろっていつののかよー！」

止める間もなく、無謀な乗客は車外に飛び出した。

その瞬間、グレムリンが長い首を回して乗客を視界に納めた。歪な歯の生えた顎を極限まで開き、鼓膜をつんざく金切り声を上げる。共鳴によって窓ガラスが一斉に震動し、バリバリと落雷のような音を響かせた。

グレムリンが六本の脚で跳躍する。踏み切りの反動で車体が傾き、危うく脱輪する直前で線路に戻る。車内の乗客は立っていることすらできずに倒れ、床を転がった。

怜次は悲鳴に埋め尽くされた車内を後に、開けっ放しの扉から無謀な乗客の後を追つた。

「早く隠れろ！ グレムリンは人間も襲うんだ！」

数十メートル先の車道に男の背中が見える。脇目も振らずに必死に走り続いているようだが、人間の足でグレムリンから逃れられるはずがない。

巨大な影が男の周囲に生じたかと思うと、先ほど跳躍したグレムリンが地響きを立てて着地した。アスファルトに亀裂が走り、弾けるようにめぐれ上がる。

重機よりも強靭な六本の脚が「うごめき」、長く柔軟な首が哀れな男へ近付いていく。無機質な顔面の中央で、不気味なまでに有機的な眼球がぎょろりと動いた。

男は地響きに足を取られて転倒した拳銃、腰を抜かして立ち上がりなくなっていた。

「くそつ……」

怜次は考えるより先に走り出した。

車道を走る自動車が次々に急停止する。ある者は車線を無視して引き返し、またある者は車を乗り捨てて逃げ出していく。

怜次は扉を開け放しで乗り捨てられた車に駆け寄り、助手席に腕を突っ込んで緊急時用の発炎筒を掴み出した。そして即座に着火し、グレムリンの頭部を飛び越すように投擲する。

眩いオレンジ色の炎が氣を惹いたのか、グレムリンは男から目を外して首を上げた。

その隙に怜次はグレムリンの足元まで走り、腰を抜かしていた男を助け起こした。

「あわ、わわ……」

「落ち着け！ 立ち上がって、列車の陰まで隠れる。そうすれば見つからないはずだ」

強い口調で言い含める。怜次よりも男の方が明らかに年上だが、今はそんなことを気にしている状況ではなかつた。

男が転びそうになりながら走り出したのを見届けて、怜次もこの場を離れようとする。

その刹那、一瞬前まで怜次がいた場所にグレムリンの鉤爪が振り下ろされた。

「うわっ！」

砕けたアスファルトが降りかかる。

顔を振り上げると、金属と生物の肉体が複雑に絡み合つた異形の姿が視界を埋め尽くしていた。これがグレムリンと名付けられた怪物。金属臭と獣臭が混ざつた臭いを放ち、生臭い体液が巡る金属繊維の筋肉を軋ませる、生命と言えるのかすら判然としない構造物。金属喰らい。機械喰らい。文明喰らい。異星生物グレムリン。

「ミイラ取りが何とやらだ……」

怜次は悪態を吐きながら走り出す。人間の脚ではグレムリンから逃れられないのは承知の上だ。だが乗り捨てられた自動車に気を向けさせながら走れば、どうにか安全なところに隠れられるかもしれない。

背後でグレムリンが甲高く吼えた。怜次の淡い期待を踏みにじるよう、長い首が空気を裂いて襲い掛かる。怜次が本能的に振り向いたときには、ギロチンよりも残忍な牙が目と鼻の先にまで迫つていた。

『伏せろー。』

拡声器を通した声が響き渡る。怜次は条件反射的に反応し、アスファルトに身を投げた。

グレムリンの胴体に穴が穿たれ、爆風と破片が肉体を内側から破壊する。数瞬遅れて、高速の物体が大気を引き裂いた衝撃波が、路面に伏せた怜次を打ち据えた。

耳が痛くなるような静寂の後、グレムリンの巨体が道路に倒れる音がした。

怜次は耳鳴りを堪えながら後方に眼をやつた。

「痛つ……！ 今のは……？」

胴体を無残に破壊されたグレムリンは、半透明の体液を撒き散らしながら、荒れたアスファルトに崩れ落ちていた。六本の脚と首は力なく投げ出され、瞳孔の開き切った眼球が虚空を見上げている。誰が見ても死んでいる。機械じみた肉体を持つグレムリンといえど、活動に必要な箇所さえ破壊すれば、あのように行動停止 通の生物でいう死亡状態に追い込めるのだ。

『こちらは第三特機群第一中隊の特機だ。今からそちらに向かう』

先ほどと同じ声が道路の向こうから聞こえてきた。相変わらず拡声器特有の音質だが、よく聞くと女の声のようだ。それもかなり若々しい印象を受ける。

『緊急事態のため退避を確認せずに砲撃した。負傷状況を確認したい』

怜次は身を起こし、声が聞こえる方向へ向き直った。

不自然に大きな人影が近付いて来ている。背丈は付近に放置された自動車の倍以上はある。数値にして三メートルから四メートルと

いつたところか。道路に掛かる電線を立つたまま潜れる程度の大きさだ。

全体的に人間そのままの形とはいえない歪さで、特に肩関節と股関節の形状は人間と大きく異なる。背中には特大のドラム缶に似た弾装を背負い、右腕を大口径の機関砲と保護のための追加装甲がすっぽりと覆っている。

前後に張り出した胸部に、左右から腕を、下方から腰と脚を後付けで組み合わせたような、そんな印象を受けるシリエットだった。表現を変えれば、人間の姿を真似たグレムリンのようだと言えなくもない。

「大丈夫だ。怪我はしていない」

金属の巨人が目の前に立ち止まつたところで、怜次は声を張り上げた。

巨人は足元から股関節までの高さだけで怜次の身長と同じくらいのサイズをしている。股関節から頭頂部までは、それより少し短い程度の高さだろう。

アニメや漫画に登場する巨大ロボットよりは格段に小さいはずだが、実際に間近で見ると不気味すぎるほどの威圧感がある。怜次はそんな感想を抱いていた。これでも数値の上では戦車の車高よりも一メートル少々高いだけというから驚きである。

センサー類やカメラを搭載した頭部が動き、足元の怜次を捉える。

『分かつた。少し待ってくれ』

拡声器から音量を絞つた少女の声がした。さつきまでは女の声だと思っていたが、こちらの方が正確な表現だと怜次は考えていた。自分と同じ新兵か、一年早く入隊した一等兵といったところだろう。年齢にすると、若くて十八歳から二十歳の範囲に収まるくらいだ。

兵隊としては相当若いが、この金属の巨人　特殊駆動機械、通称『特機』の操縦者は、比較的若手の軍人に任せられる傾向が強い。

かくいう怜次もその一人であり、列車に乗っていたのは配属先へ移動するためであつた。

胸部の前面装甲が下半身に近い側を軸として開いていく。

完全に開き切つた装甲を足場にして、特機の操縦者が姿を現した。

「こちらは中部方面軍隸下、第三特機群所属の黒河内一等兵。 そちらの所属部隊と階級は」

怜次は咄嗟に返事ことができなかつた。

特機の操縦席からこちらを見下ろす少女の姿は、怜次が想像していたよりも遙かに若々しい。年下であるのは間違いない。恐らくは高校生、下手をすれば中学校を卒業しているかどうかも怪しいくらいだ。

それなのに、迷彩服と航空機のパイロットの対G装備を組み合わせたような見栄えの無骨な装備が不思議と似合つていった。きっと、切れ長でりながら大きく見える特徴的な目が、可愛いといつより美人だといふ印象を与えているからだろう。

「……って、んなわけないだろ」

怜次は頭を振つて、自分のおかしな考え方を否定した。

自衛軍の志願者は高校生を除く十八歳以上に限ると法律で定められている。彼女は単に若く見られる外見をしているだけに決まっている。

「どうかしたか？」

「いや、何でもない。こちらは久我一等兵。明日付けて第三特機群に配属される予定だ」

それを聞いて、黒河内と名乗る少女はきゅっと目を細めた。

怜次は睨まれたかと思つて身構えてしまつたが、別に睨まるようなことをした覚えはない。となると、恐らくは 微笑んでいるのだろう。だとすれば相当不器用な笑い方といつゝことになるが。

「それは奇遇だな」

黒河内は胸部装甲から飛び降りて、柔軟に膝を曲げて着地した。気軽にそうな態度でやつてゐるが、実態は高さ一メートル以上はある場所からの飛び降りだ。上手く着地しなければ脚を痛めてしまう。逆に言えば、黒河内がそれほど特機に慣れてゐることの証明でもあつた。

「配属先の中隊と小隊はどこだ？ もう分かっているんだろ？」

中性的な口調で質問を重ねられ、怜次は問われるままに答えるしかできなかつた。

「第一中隊の第三小隊だけど、それが何か」

「いや、ただの私的な好奇心だよ」

黒河内は悪びれる様子もなく言い切つた。つくづく掴みどころのない少女だ。短く切られた艶やかな黒髪や眼差しの力強さから受ける印象とは違ひ、実態のない陽炎と話してゐるような感覚に陥つてしまつ。

上下共に長袖の戦闘服を着込んでゐる上に、両手にも皮製の手袋を嵌めているので、首から下には肌の露出がない。そのせいか、戦闘服を脱いだら氣体になつて消えてしまつのではないか、なんていうおかしな想像まで浮かんでくる。

怜次が黙り込んでゐると、黒河内はくるつと踵を返して歩き出した。

「お、おい。どこ行くんだ」

「中隊長に戦果を報告するだけだよ。私達の任務は、さつきの奴を山狩りで追い立てて仕留めることだつたからね」

「さつきの奴つて……」

怜次は死んだばかりのグレムリンの亡骸を見やつた。通常、グレムリンは蟻や蜂に似た群れを形成して活動している。単体で活動しているとすれば斥候の線が強いが、この近辺にグレムリンの巣があるなんて聞いたことがない。

「ああ、たまにいるんだよ。巣を潰された後も生き残つて『はぐれ』になる奴が。こんなところまで逃げてくるケースは珍しいけどね」

黒河内は怜次の考えを読んだように解説を入れた。その間も、振り返ることなく淡々と歩き続けている。

そうかと思うと唐突に振り返り、返怪訝そうな眼差しを怜次へ送つてきた。

「ついて来ないのか？」

「先を急ぐに決まつてゐるだろ。俺は偶然居合せただけなんだから」「ふうん。この様子じや鉄道は当分運休だらうし、ここから第三特機群の駐屯地まで一・二十四、五キロはあるけど、歩いて行くのか。そうか凄いな」

「…………」

またも怜次は返答に詰まつてしまつた。

破壊された車両の周りでは、迷彩服姿の男達が乗客を外に避難させている。あの車両をどうにかした後でレールの損傷の有無を確かめなければ、鉄道の運行は再開させられないだらう。鉄道の代わり

にバスを使いたくても、土地勘がなければどうしようもない。

「君が良ければ、撤収するときに送つてこいつと思つていたんだけど」

「分かつた……頼んだ」

怜次が降参すると、黒河内は再び目を細めた。口の端も上向きに動いているように見えたので、やはり微笑んでいるつもりらしい。正直なところ、覇廻目に見ても『不敵な笑い』か『皮肉げな笑い』としか思えない表情だ。もしかしたら本当にやうじう意味合いを込めた表情なのかもしれないが、怜次はわざわざ確認するような度胸を持ち合わせてはいなかつた。

だが、さつきからいい様にあしらわれているのも気に食わない。怜次は黒河内の後ろを歩きながら呼びかけた。

「俺からも一つ、私的な好奇心の質問していいか？」

「どうぞ。答えられる範囲なら答えるよ」

「それじゃ遠慮なく。……あんた幾つなんだ？ 見たところ子供っぽく見えるんだけど」

怜次は冗談めかした口調でそう言つた。怒らせるかもしれない質問のは承知している。それでも黒河内の感情的な表情を引き出せるなら悪くない、なんて失礼な考えが、怜次の行動を後押ししていた。ところが、黒河内の反応は至つて平然としたものだつた。

「ああ、そうか。自己紹介が中途半端だつたね」

黒河内は相変わらずの不敵な笑み といつことにしておいつで振り返り、怜次の目をまっすぐ見据えた。薦色よりも深く黒いその瞳は、見つめられているだけで吸い込まれてしまいそうだった。

「私は第三特機群第一中隊第三小隊、特機三号機操縦士の黒河内月子。年齢は今年で十六歳になる。君とは同じ小隊の同僚だよ」

「えつ……？ も、おい……」

怜次の思考回路は、一気になだれ込んできた情報を処理しきれずフリーズ寸前になった。

同じ隊の所属だというのはともかく、十六歳の軍人なんて現代日本に存在するわけがない。

「十六つてどうことだ？ そんなの有り得ねえだろ」

「今はまだ十五歳だつて。それに、ありえないなら私が今ここにいるがわけないじやないか。常識的にものを考えてくれないかな」

やれやれとばかりに肩を竦める黒河内月子。怜次はその態度に軽い苛立ちを覚えたが、表に出すのは全力で堪えた。怒らせて構わないという意図で投げかけた質問なだけに、一いちらから怒りを露わにするなんて大人気ないことこの上ない。

それに同じ部隊に配属されることになるなら、下らないことで不和を生じさせても損をするだけだ。

「十五も十六も大して変わらないだろ。……つたぐ、何がどうなつてるんだか」

「さあね。ひとまづ「いじめ」、コンハイトモコロシクとでも言つべきかな」

月子は左手の手袋を外すと、色白の掌を上にして怜次に差し向けていた。

「……何？」

「握手だよ。ほら」

「ああ……なるほどね」

本人から説明されて、怜次はようやく月子の意図を把握した。握手は右手でやるのが普通だと思っていたので、咄嗟に理解することができなかつたのだ。

左利きだからつい左手を出してしまったのだろうか。そう考えてもみたが、よく見ると左の手首に自衛軍推奨モデルの腕時計が巻かれていた。普通、これは右利きの付け方だ。

「……ようしー、黒河内」

「ひがいりや。久我さん」

怜次は月子と左手での握手を交わした。少女らしい滑らかな肌触りで、華奢な骨格をした小さな手だ。

互いの手が離れた直後、月子はあつさりと踵を返して歩き出した。よく分からぬ子だ。ここにでさり気ない笑顔の一つでも浮かべれてくれたら、これまでとのギャップもあつて、好感度が跳ね上がっていたかもしね。

ストイックな性格のせいで、そういう仕草が嫌いなのか。それとも不器用な性格のせいで、そういう表情が苦手なのか。出会ったばかりだから当然なのだが、久我怜次という男は黒河内月子という少女のことをあまり理解できていなーらしい。

「私は中隊長に報告を入れてくるから。君、特機の操縦は出来るだろ? 三号機をトレーラーに乗せておいてくれないかな」

「それが年上にものを頼む態度かよ。そりゃ階級は同じだけな……つて、おい! 聞いてんのか? ていうか、俺はまだ正式配属されてねえんだぞ」

悠然と歩き去る円子に文句をぶつけつつ、怜次は三号機の胸部装甲に手をかけた。

装甲の出っ張りを足場にして機体をよじ登りながら、今後のことを思い浮かべてみる。あんな変わり者が同僚にいるのだ。少なくとも退屈だけはしない筈だ。

もつとも、怜次は退屈しない生活なんて望んでいるわけではないのだが。

望む望まざるに関わらず歴史は動いていく。

この瞬間の出会いも、きっと小さなターニングポイントになるのだろう

一〇一年 九月三十日 鳥取県鳥取市 津ノ井駐屯地 第一中
隊将校室

「失礼します」

律儀に扉をノックして、曹長の階級章を付けた男が将校室に上がり入室した。

新築の趣きを色濃く残す将校室には、執務用の事務机が六つほど並べられている。卓上の様子は様々で、書類が積み重なっているもの

もあれば、最近置かれたばかりのようすっきりとしているものもある。

机は片手に余るほどの数が置いてあるが、室内にいる人間はそれよりずつと少なかつた。士官の制服を着た男が一人座つていてる以外は空席だ。曹長はそのうちの一人のところまで大股で歩いていった。

「中尉殿。四号機の帰還を確認しました。残る三号機は現在トレー ラーにて移送中です。それと、最後の新入隊員も県内に到着した模様です」

よく通る低い声が将校室に響く。

本人としては普通に言葉を発したつもりなのだろう。しかし無人に近い将校室では音が必要以上に反響し、曹長自身の肺活量の大きさも合わさつて、部屋いっぱいに響き渡る大声となつていた。

中尉が事務用の椅子を回して曹長に向き直る。手にしているファイルの表紙には『機密 新設特機小隊編成報告書』と印刷されていた。

「どうか。部隊での訓練は予定通り十月から始められそうだな」

若々しい声で言いながら、中尉は白髪頭を搔いた。

二十代半ばという実年齢とは裏腹に、この青年将校の頭髪は大量の白髪に占拠されていた。黒髪の中に白髪が混ざつてゐるというよりも、白髪に黒髪が溶け込んでゐると表現すべきだろう。見方によつては白と黒の虎縞模様といえるかもしねり。

「はい。特機は搭乗員になれる人間が限られていますから、頭数が足りなくて編成中止なんてことにならなくて良かつたですよ」

そう言つて曹長は生まれつき薄い眉を僅かに寄せた。何気ない仕

草であるはずなのに、曹長の強面が更に威圧感を増したように思われた。

曹長と中尉、一人の年齢を比べれば明らかに曹長の方が年上である。だが実際は、曹長の方が年下の相手に敬語を使っている。軍隊とはそういう組織なのだ。少なくとも表向きの態度では、年齢よりも階級の方が優先される。中尉は曹長よりも三つほど上の階級だ。

「確かに。特機が兵器として実用化されて僅か数年。今年に入つてようやく配備数が大幅増になつたけど、人材育成の制度はさっぱり整備されてないからな。……それはそつと」

白髪頭の中尉は、自宅のソファーで寛いでいるかのように緩慢な動作で、椅子の背もたれを軋ませた。ゆっくりと体重をかけて背を反らし、曹長の顔を仰ぐように見上げる。上官の唐突な奇行に対して、曹長は困惑した様子で一步退いた。

「何ですか、いきなり」

「猪熊。新兵のことが気になるのか？」

中尉は不真面目な姿勢のまま、真剣な口振りで問いかけた。

曹長こと猪熊竜馬は思わず口籠つた。しばしそのまま押し黙り、やがて観念したように短く息を吐く。

「やはり……分かりますか。今回の新兵どもには心の底から同情します。まさか上層部が『あの制度』をこいつ風に利用するとは思つてもみませんでしたよ。理解に苦しむと言わざるを得ません」

竜馬の言葉には明らかに怒気が含まれていた。放つておいたら小一時間は熱弁を振るつていそうな勢いだ。

中尉はまだまだ語り足りない様子の竜馬を制し、軽い口調で嗜めた。

「確かに『あの制度』は兵隊集めなんかに使っていいものじゃない。文句を言いたくなる気持ちも分かる。気持ちは分かるんだが、今の発言は軽率だな。悪い奴が聞き耳を立ててるかもしれないぞ」

そう言いながら、白髪頭の中尉は斜め向かいの席をちらりと見た。眼鏡を掛けた士官が仕事の手を止めて冗談交じりの苦情を返す。

「おい、悪い奴って俺のことか

「違うのか？ そりゃ失礼」

士官同士が笑い合っている間、龍馬は神妙な面持ちで直立不動の体勢を維持していた。傍から見る限りでは、不相応な発言をしたこと自戒しているようにも、真面目な話を冗談で誤魔化された憤りを我慢しているようにも見える。あるいは、この態度こそが彼にとっての自然体なのかもしれない。

中尉はおもむろに立ち上がり、機密書類のファイルで龍馬の肩を軽く叩いた。腑抜けた笑い顔は完全に影を潜め、真剣な面持ちで龍馬に声を掛ける。

「変えられないことに文句を言つても仕方がない。俺達は俺達にできることをするだけだ。そうだろ、猪熊」

「ハツ！」

龍馬は返答として背筋を完璧に正した。

「よろしく。頼りにしているぞ、猪熊曹長

そして中尉はひらひらと手を振りながら、将校室から出て行こうとする。

「……どちらに行かれるのですか？」

「格納庫。そろそろ指揮官用の『特機』が到着するんだが、車庫入
れは自分達でやつてくれって言われてるんだ。輸送部隊にはアレを
動かせる奴がいないんだと。まったく、人材不足は辛いよな」

白髪だらけの後頭部を見やりながら、竜馬は訝しげに首を傾げた。
強面の竜馬には妙に似合わない仕草だった。

「自分も『特機』が到着することは知っていますが、それ以外は初
耳です」

「俺もさつき電話で聞いて初めて知った。連絡が遅いっての」

中尉は振り向きざまに機密書類のファイルを竜馬へ放り投げた。
突然の行為に竜馬は目を丸く剥いて、書類が折れ曲がらないようこ
両腕でファイルを受け止めた。

「新人が集まり次第、顔見せと部隊説明を始めておいてくれ。納車
が間に合つたら俺も後から行く。相手は餓鬼なんだから、あまりビ
ビらせるなよ」

「……善処します」

そう答える竜馬の顔は、既に相当な威圧感と圧迫感に満ちていた。
これでも、自分の顔の怖さをどう抑えるべきか真剣に悩んでいる表
情なのだから困つたものである。

中尉は苦笑しながら士官室を後にした。

第一話『救済』

金属食性異星生物関連年表 陸上自衛軍教育用資料より抜粋

一九八〇年

新たに発見された超巨大彗星に『シュレット彗星』という名称が与えられる。

この名称は発見者のゲオルグ・シュレットから取られたものである。

同年年末、シュレット彗星の地球最接近が来年八月であると予測される。

一九八一年

八月、シュレット彗星が地球と月の中間点を通過。

その後、原因不明の爆発現象を起こし、地表に大量の破片が落下する。

これにより世界六十以上の国と地域で多大な被害が発生。

人類は前代未聞の天体災害への対応と復興に追われることになる。

全世界の合計死傷者数は現在も明らかになっていない。

ただし、最も被害を多く見積もる説でも死傷者数は一億人を下回っている。

破片の落下による被害は、むしろ経済的なものが大きいというのが定説である。

彗星破片の調査は暫く放置され、本格調査の開始は災害から一

年後であった。

一九八三年
破片落下地点において未確認生物を発見。機械類に攻撃的な反応を示す。

この性質から『グレムリン』との通称が付けられる。
グレムリンとは、飛行機などの機械に悪戯をすると伝えられる妖精である。

同年、機械への攻撃的反応は捕食行動であることが判明。
調査中の生物に『金属食性異星生物』という正式名称が与えられる。

一九八五年

世界各地の破片落下地点を中心に、金属食性異星生物が大量発生。

それらは無数の群れを構成し、近隣の都市や鉱床に攻撃を開始した。

同年、異星生物の活発な行動には生物由来の栄養が必要となることが判明。

これにより、金属食性異星生物によつて人間が捕食される原因が解明された。

一一〇一一年 九月三十日 鳥取県鳥取市 国道二十九号線

郊外の静かな街並みがゆっくりと流れ去っていく。

怜次は輸送トレーラーの荷台の隅に座つたまま、目の前の巨大な積荷を見上げた。荷台の大半を占める人型の巨体 三式特機。二〇〇三年に制式採用されたことから『三式』と名付けられたこの機体は、世界で初めて実用化された『人間の形をした兵器』である。本当にこんなものを造つてしまつ辺りが日本らしい。怜次は三式を見るたびにそんなことを考えてしまう。

戦車と同じ迷彩塗装の装甲。その奥に潜む、灰色の保護皮膜に包まれた金属質の人工筋肉。右肩から手先にかけてを覆う増加装甲と、それに護られるよつにして搭載された三五ミリ口径機関砲。

陸戦兵器としては、いや、史上全ての兵器と比較しても異端。グレムリンという怪物が出現しなければ、この兵器も永久に現れることはなかつただろう。

赤信号でトレーラーが停車する。エンジン音が静かになつたせいか、他の音が聞こえやすくなつた気がした。

「おーい、久我さん」

不意に名前を呼ばれ、怜次は顔を上げた。

開け放たれた三式の胸部装甲から、月子がひょこつと顔を覗かせている。戦闘服は脱いでしまつたらしく、白いシャツを着た肩も見える。

怜次が何事か思つていると、月子は躊躇うことなく荷台へと飛

び降りてきた。

「よつとー。」

「うわつー……黒河内、お前いつか大怪我するぞ」

月子は怜次の苦言を聞き流して、荷台の後方中央に座り込んだ。皮手袋を嵌めたままの左手に銀色で直方体の機械らしき物が握られている。

「何だ、それ」

そう訊ねてしまつてから、怜次はもつと疑問に思つべきものを曰にしてしまい、そちらに意識を奪られた。

月子は戦闘服を完全には脱いでいなかつた。上下でひとつなぎになつた戦闘服の上だけを脱ぎ、袖を腰元で括つて固定している。白い半袖シャツは戦闘服のアンダーウェアとして着ていた服らしい。だが、服装自体は別にどうでもいい。怜次の意識を惹き付けたもの。それは、月子の右腕を完全に包み隠す真つ白な包帯だつた。手首から先は皮手袋のせいで確認できないが、少なくとも肩口まではしっかりと巻きつけられている。まさか、左手で握手をしようとしたのはこれのせいだつたのか。

「ただのラジオだよ。ニュースでも聞く?」

そう言つて、月子は右手でラジオのチューニングをし始めた。器用で淀みのない動きだ。右腕に大怪我をしているのではないかそんな怜次の考えはあつさりと否定された。

右腕が使えないわけではないようだが、それでも腕全体を包帯で隠しているというのは尋常ではない。しかし、怜次はその理由を訊ねるタイミングを完全に逸してしまつっていた。身体的な特徴に関する

る話題は往々にしてデリケートな問題だ。出合つたばかりの現状では、勢いに任せなければ訊けたものではない。

『次のニュースです。日本時間の本日未明、ロシアの首都モスクワで都市奪還の記念式典が開催されました。この式典は、ロシア西部の都市エカテリンブルグの支配権完全奪還を記念したもので』

』

そこまで聞こえたところで信号機が青に変わり、トレーラーが動き出した。ラジオの音声がエンジン音に書き消され、怜次のところまで届かなくなる。

「ふうん。そんな都市が奪われてたんだね」

ラジオから流れる国営放送のニュースに対し、月子は冷ややかな反応を見せた。ニュースが伝えている内容は、人類がグレムリンから生活圏を奪い返したことを伝えるものであり、本来なら喜ぶべき報道のはずだ。

しかし、これに関しては怜次も月子と同じ感想を抱いていた。

「俺も初耳。負けたときは申し訳程度に報道して、勝ったときは大々的にアピールしまくるんだから現金だよな。エスカルゴなんとか何て聞いたこともないっての」「エカテリンブルグだよ」

月子はちらりと怜次に視線を送り、ラジオの音量を調節する。

『ロシア政府は今回の都市奪還成功を、ウラル山脈権益とシベリア鉄道運行の復活の足がかりとする考えを表明し、更なる攻勢を強める意向を明らかにしました』

「都市を取り返しても、金属という金属を食べられて廃墟になつてゐるだらうね。シベリア鉄道もレールは壊滅状態じゃないかな」

「黒河内……お前、ニコースに突つ込みいれながら聞くタイプか」

たまにそういうタイプの人間がいるとは聞いていたが、よもやこんなところで出会うとは。それも妙に筋の通つた突つ込みだ。これでは聞かされている方も反応に困つてしまつ。

このままだと、また月子の独壇場になりそうだ。怜次は疲労を溜息と共に吐き出した。

「そういうや、さつき鉄道を襲つた奴はレールじゃなくて車両を食べてたよな。あいつらにも好みとかあるのかね」

「え？ ……ああ、まだあの報告を聞いてないのか」

何気ない一言に月子が食いついてきた。月子はラジオの音量を大幅に絞ると、怜次に面と向かう形で体勢を変えた。

「あのグレムリンは最初レールを齧つていたんだ。それで警報装置が作動して鉄道が緊急停止したんだが、その後に捕食の標的が切り替わつたらしい」

そういうことだったのかと、怜次は内心で納得した。月子の説明は怜次が体験した一部始終と合致している。唐突な急停車と、直後のグレムリンの強襲。月子達の部隊がタイミングよく到着したのも、レールが破損した際の警報を受けて即座に駆けつけたからだらう。

「てことは、グレムリンも選り好みはするんだな」

「酸化物よりも精製された金属を好む傾向があるそうだ。だから錆びだらけのレールよりも、メンテナンスの行き届いた車体の方が美味しそうに見えたのかもね」

滑稽な表現だが、それを語る月子は苦笑すら浮かべていない。

とりとめのない会話をしているうちに、周囲の街並みは見晴らしのいい田園風景に取つて代わられていた。トレーラーの後方、つまり北側にはそれなりに広い町が広がり、トレーラーの前方にはまた別の集落が見える。そのまた向こうには、秋の装いを整えつつある里山が軒を並べている。

「駐屯地はあの町の向こうだ」

月子は遠くを眺める眼差しでトレーラーの進行方向を見やつた。三号機と二人を乗せたトレーラーは、月子が示した町を左手に南下を続けていく。遠目に見る限りでは、生活に必要そうな設備が一通り揃つていそうな雰囲気の町だ。

「特機群の他に輸送隊や整備隊なんかも駐留しているから、他の小規模な駐屯地と同じくらいの規模はあると想うよ。後は特機の修理用パーツを加工する工場も併設されているね」

地図の上では、あれが駐屯地に最も近い町である。南にも別の町もあるのだが、そこへ行くには山を一つ越えなければならない。恐らく駐屯地の兵士や工場の職員はあの町を活動の拠点として暮らしているのだろう。

国道と県道の合流点の付近で、トレーラーは国道を降りて国有地へと入つていった。厳重なゲートを通り過ぎたところで、月子が例の不器用な笑みを浮かべる。

「よつこいよ。私達の津ノ井駐屯地へ」

「…………」

怜次は少々緊張した面持ちで辺りを見渡した。

ちょっとした住宅地ほどの広さがある敷地内に、大小様々な施設が立ち並んでいる。新築同然の新しいものから、築十数年くらいかと思われるものまであるが、極端に古びた建物は見当たらない。建物の集まっている場所から少し離れたところには、平らに整地された広い空き地がある。運動場というには広すぎるので、恐らく特機の操縦訓練に使われる場所なのだろう。

駐屯地の一角、倉庫群の手前でトレーーラーが停車する。運転席から輸送隊の兵士が身を乗り出して声を上げた。

「着いたぞ、デカブツ」

デカブツとは特機のことだろ？ 確かに戦車の車高と比べると、特機は一回り背が高い。だが奥行きは戦車の方がずっと大きいのだ。特機と関わりの薄い人間は、この辺をよく勘違いしている。

月子は立ち上がってから軽く伸びをして、包帯に覆われた右手で装甲の出っ張りを掴んだ。

「私は三号機を格納庫に入れてくる。後は一人でよろしく。迷子になるなよ？」

「誰がなるか」

挑発に悪態を返し、怜次はトレーーラーの荷台から飛び降りた。

三号機が曲げていた脚を伸ばして立ち上がる。怜次は降車の邪魔にならないように、足早にトレーーラーから距離を置いた。

駐屯地の空気は街中とはまるで異質なものであった。

軍用車両が敷地内を行き交い、道行く人は軍服や作業服姿の軍人ばかり。喧騒も街の騒がしさとは全く違う。

怜次は半年間の訓練期間を通じて軍の雰囲気に慣れたつもりだったが、こうして実際に活動している駐屯地を訪れると、自分が駆け

出しの新兵に過ぎないことを改めて実感をせりあれてしまつ。

「えつと、まずは小隊本部に行かないと……」

怜次は忙しなく辺りを見渡した。

予め駐屯地の地図を用意してはいたが、初めて訪れる場所では、今いる場所が地図のどこに相当するのか調べるだけでも一苦労だ。

「えつと、久我怜次君だよね」

何の前触れもなく、そんな言葉が耳に飛び込んできた。軽い口調の女の声だ。誰かが出迎えに来てくれたのだろうか。怜次は安堵して振り返り 盛大に硬直した。

原因是女の容貌だ。スカートタイプの白い夏服に身を包み、律儀に制帽まで被つた姿は、あまりにも幼すぎた。月子と出会ったときも似たような感想を抱いたが、それとはまた性質が違う違和感だ。第一に、背丈が小さい。小学校高学年の女子の平均身長といい勝負だ。自衛軍の採用基準は女性の場合で身長一五〇センチ以上だが、それを満たしているかすら際どいほどである。その上、瘦せ気味で身体の線もかなり細く、化粧も質素に留めているものだから、余計に若々しさが増している。

怜次は念のため制服左腕の階級章を確認した。桜の刺繡の下に、矢印の先端のように折れ曲がった直線が三つ。兵長の階級章であつた。一等兵である怜次よりも階級が一つ上だ。怜次は慌てて姿勢を正そうとしたが、女にそのままでいるよつ制されてしまった。

「まあまあ。そんなに気張らないの」

女は怜次のことを頭から爪先までじっくり眺めていたかと思つと、一人で勝手に満足したらしく、大袈裟な素振りで頷いた。

「うん、理想的な体格ね。背は高過ぎないけど、しっかり鍛えてある。頼りになりそう」

「……それは褒め言葉なんでしょうか」

「特機は操縦席が狭いからね。大柄だと色々苦労するんだよ」

「うやうやしく褒め言葉ではあつたらしい。男としては背が高くないことを褒められてもあまり嬉しくはないが、相手が上官なだけに、それを素直に表すのは憚られる。怜次は戸惑いを愛想笑いで誤魔化して、説明を理解できることと伝えようとした。そこでよつやか、女の名前を聞いていないことに気がついた。

「えつと……」

「あ、名前教えてなかつたか」

女は怜次の様子を察したらしく、質問に先回りして答えを返した。

「岸田佐代子。私の名前ね。君と同じ第三小隊に配属されてるわけだけど、岸田兵長とか兵長殿とか、堅つ苦しい呼び方は嫌いだから……そうだね、佐代子ちゃんとかどうかな」

「……よろしくお願ひします、岸田さん」

怜次は本能的に無難な呼称を選択した。女 岸田兵長はわざとらしく顔をしかめた。どうやら怜次の呼び方がお気に召さなかつたらしい。

怜次は凄まじい勢いで精神的な疲労が蓄積していくのを感じていた。早く話題を変えなければ、小隊長に顔見せをする前に力尽きてしまいますだ。

「素直じゃないな。上官命令はちゃんと聞かないと」

あんな命令は軍規に違反していないんですか、と言い返す気力はとっくに失せていた。

恐ろしい想像が脳裏を過ぎる。よもや、この小隊には変な奴しか早くいのではないか。特機の操縦士の数が足りていないと、のは、訓練生時代に何度も聞かされている。その穴を埋めるために、多少問題のある人材でも配属しているのでは

「あつ！ お帰りなさい、佐代子さん」

突然、背後から少女の声が飛んできた。振り返ると、真新しい制服に身を包んだ見知らぬ少女が、元気に手を振りながら駆け寄ってくるところだった。

「玲奈ちゃんもお帰り。今日の戦果はどうだった？」
「それが……私は歩き回ってるだけで終わっちゃいました」

岸田兵長は自分より背の高い少女の肩を両手で叩いた。着ているのが軍服でなかつたら、女子校生同士のじゃれあいとしか思えない光景だ。

怜次は少女のことを知らなかつたが、岸田兵長は顔見知りのようだ。兵長に敬語を使つていて、新品の制服を着ている辺り、怜次と同じく新兵なのだろう。だとすると、年齢は十八かそこいらに違いない。……それにしては、妙に体付きが幼い気がしたが。

「おや、もうマークしちゃつたんですか？ れーじ君？」

岸田兵長が、顔面に下世話な感情を満遍なく貼り付けて、からかうように怜次を見上げた。怜次は口元を歪めて顔を背ける。少女をあからさまに觀察しきっていたらしい。愉快犯に犯行の動機を与える

てしまつた。

兵長は当然のようになつて玲次の反応を無視し、一人で楽しそうに笑つてゐる。彼女のことを軍人だと信じられる人間が、果たしてこの世に何人いるのだろう。怜次は、仮に物好きな民間人のコスプレだつたと聞かされても驚く気がしなかつた。むしろ軍人だといつて実にひどく驚いているくらいだ。

兵長のペースについて来られないのか、玲奈は怜次と兵長を交互に見つめていた。

「えつと……この人が久我怜次さんですか？」

「うん、そうだよ」

玲奈は兵長にそんなことを尋ね、兵長はさうりとそれに答えた。会話の内容から察するに、玲奈は『久我怜次という人間がいる』という事前情報を与えられていたらしい。そして兵長の横にいる男がそうだと思い、確認を取つたのだろう。

そこまで分かれば、この少女と岸田兵長の関係を推測するのは簡単だ。

「岸田さん、もしかして自分と同じ小隊の……？」

「察しがいいね。玲奈ちゃんも新人さんだよ。可愛いでしょ」

最後の一言は無視することにした。

怜次は改めて玲奈を観察する。岸田兵長ほどではないが、小柄な部類に入る体格である。清潔なショートカットの頭髪は、茶髪どころか赤毛と呼べるほどに淡い色合いで。これが生まれ持つた髪色なのだろ。一重瞼の目は綺麗な鳶色で、顔の輪郭に骨ばつた感じがない。確かに可愛らしいという印象を受ける外見だ。

玲奈は怜次と目があつたことに気付くと、ペコリと丁寧なお辞儀をした。

「榎玲奈です。よろしくお願ひします」

「あ、ああ、いらっしゃるよろしく」

内心、怜次は戸惑っていた。同輩にしては仕草や外見が幼すぎる。外見については、岸田兵長という極端な例が目の前に存在しているが、態度の違和感は拭えない。まるで、年の離れた後輩とでも話しているような雰囲気だ。

いや、明らかにおかしい。岸田兵長のせいで感覚が麻痺しかけていたが、玲奈を見たときの違和感は月子と初めて出合ったときのそれとよく似ている。

つまり、この少女も。

「私、隊長に報告しに行かないといけないので。失礼します」

玲奈は丁寧に一礼して立ち去つていった。月子とは人当たりの良さがまるで違い、岸田兵長とは常識の度合いがまるで違う。怜次は荒んだ心が癒えていく感覚を覚えた。

岸田兵長は笑顔で玲奈を見送ると、くるりと怜次に向き直つた。

「ねえ、怜次君。あの子何歳だと思つ？」

兵長の唐突な質問に、怜次はびくっと身体を震わせた。突然話しかけられて吃驚したのもあるが、それ以上に、今まで考えていた疑問をまるで心を読まれたかのようなタイミングで訊ねられたことが驚きだった。

岸田兵長は怜次の反応をけらけらと笑うと、同じ質問を繰り返した。

「玲奈ちゃんって何歳くらいに見える？」

口元は悪童のように笑みを作っていたが、眼差しは笑つていなかつた。嫌な予感が怜次の胸中を駆け巡る。どうしてそんな質問をするんだ？ 分かりきつたことじゃないか。……そう笑い飛ばすことができればどんなによかつたか。

「……ひょっとして兵長の同類なんですか？」

怜次は精一杯の冗談を返した。想像してしまったコトよりも、見かけ以上の年齢だと言われたほうがマシだった。

「同類って何さ。珍獣扱い？ 私はこれでも立派な成人女性なんだけど。……やっぱり答えにくい質問だったかな。ごめんね」

岸本兵長は声のトーンを落とす。快活そのものだった声色が影を潜めると、雰囲気が急激に深刻さを帯びてしまつ。
更に悪いことに、兵長が話そうとしている内容は、相応に深刻なことに違ひないのだ。

「あの子はまだ十五歳なんだ。三月に中学校を卒業したばかりの」

怜次は無言で兵長の言葉を受け止めた。想像した通りだった。月子と同じだ。

あれだけ幼い容姿と人格で十八歳というのはありえない。大人と子供のメンタリティには著しい違いがある。岸田兵長でさえ、内面的には年齢相応の年長者であるはずなのだ。容姿が同じ年くらいに見えたとしても、玲奈の言動は明らかに子供のそれだった。

果たして、十五歳の兵士は存在しうるのか。無論、怜次が知る限りの常識では絶対にありえないことである。

自衛軍の兵員募集年齢は前身である自衛隊の募集規定を踏襲して、

十八歳が下限とされている。六十五年以上前の旧軍ですら、戦争末期になるまでは、そんな年齢の子供を引っ張り出したりはしなかつた。

「そんなの有り得ないでしょう。完全に違法行為ですよ！」

怜次は語氣を荒げた。それに対しても、岸田兵長は諦観の表情を浮かべ、首を左右に振るだけだった。

「君、戦災者救済法っていう法律は知ってるよね」

「当たり前じゃないですか。グレムリンとの戦闘で受けた被害を補償する包括的な法律ですよね。それがどうかしたんですか」

二十年以上の長きに渡る戦いは、人類に多くの被害と犠牲をもたらした。

それは日本も例外ではなく、際限なく増え続ける被害者に対応するため、今から十五年ほど前に『戦災者救済法』という法律が施行されていた。この法律は人々の生活にも深く浸透しており、先の鉄道襲撃で生じた被害も、この法律を根拠に保証されるはずである。

戦災者救済法の存在は、今や日本人の常識になっていると言つても過言ではあるまい。

「この法律は、親を亡くした子供や経済的に追い詰められた家庭の子供を支えることも目的にしてるの。家計の状況によつては、十八歳未満の戦災児童を公的機関で雇用して、職業訓練と収入確保を同時に進めるとか、とにかく色々な方法でね」

岸田兵長の語る内容は怜次も聞いたことがあった。

通常は学費免除や生活費支援などで対応するのだが、それでも不足を補いきれない場合は、公的機関で収入を得つつ、学費免除の通

信制高校に通うという援助方法を選択することもできるのだ。

この方針 자체は、働き口に困った子供が悪条件で労働せざるを得なくなる悲劇を防ぐことにも繋がり、国民の好評を得て現在に至るまで継続している。

「けど、その公的機関に自衛軍は含まれていないはずでしょう。そんなの聞いたこともない」

「実は含まれてるのよ。救済法が施行された当時からずっと。単にこれまで軍の判断で雇用を見送っていただけなの。子供を受け入れる制度が整っていないっていう理由でね」

兵長の言葉には明らかに怒気が含まれている。怜次はさつきまで語気を荒げていたことも忘れて、兵長の外見に似合わない気迫に飲まれてしまっていた。

「公的機関といつても雇用できる人数や職場の種類には限りがある。その点、自衛軍は色々な職種があるし、人材は慢性的に足りていないくらい。だからあちこちから催促され続けてたのよ。早く戦災児童を受け入れろって。……本末転倒よね」

最後の一言は、まるで吐き捨てるような言い方だった。岸田兵長は現状に彼女なりの憤りを感じているのだろう。

怜次が黙り込んでいたことに気が付くと、兵長は表情を和らげた。
「ごめんね、愚痴っぽくなっちゃって。とにかく、自衛軍は各所からの要請を無視しきれなくなつて、今年から『自衛軍特別年少採用制度』っていう制度を開始したの。読んで字の如く、戦災者救済法の一環として戦災児童を雇用する制度ね」

岸田兵長はここで一息言葉を切り、怜次の反応を確かめるような

視線を送ってきた。

「IJの制度で採用された兵士は、原則的に戦闘部隊には回されない。通信とか輸送とか、後は整備とか。要するに後方の裏方ばかり」「じゃあどうして…」

怜次は思わず大きな声で口を挟んだ。まるで理屈に合わない。岸田兵長の言つとおりなら、これまで会つてきた彼女達がここにいるはずがない。

「話は最後まで聞きなさい。原則的ということは例外も有り得るつてことでしょ。どういうつもりかしらないけど、自衛軍は戦闘部隊の中でも特機部隊だけは例外扱いにしたのよ。本当、何を考えているんだが」

「…………」

「じゃ、行こつか。隊舎はこちやよ」

兵長は建物が建ち並んでいる方へ向き直ると、ついて来るよう手振りで示した。

もはや、怜次の中に岸田兵長を子供と看做す価値観は存在しなくなっていた。年長の上官に向けるに相応しい態度で、どうしても気になつていていたことを口にする。

「黒河内……つと、黒河内一等兵と榎一等兵のような特例の兵士は、他の隊にも配属されているんですか？」

「第一中隊ではうちの小隊だけだったと思うけど、他の中隊がどうかは知らないなあ。小隊長なら知つてるんじゃないかな。……そうだ、大事なことを伝え忘れてた」

「まだ何かあるんですか」

怜次の問いに岸田兵長は頷きを返した。嫌な予感は今もフル稼働だ。どんなことを言われるのか見当が付いてしまう。それだけに、怜次の気分は重くなる一方だった。

「うちの隊……第一中隊の第三小隊は、君を含めて五人の新人が配属されることになつてゐる。そのうち、正規兵は君だけなんだ。他の四人は特別採用制度で入隊した……子供なの」

兵長は『子供』という表現を使うとき、微笑を浮かべながら悲しそうに肩を竦めた。その仕草だけで、怜次は彼女がこの事態に納得できていないと理解できる。この人は子供みたいな外見とは裏腹に、本物の子供達のことをひどく気にかけているのだ。

重苦しい雰囲気を払拭したいのか、岸田兵長は明るい声で前向きな情報を付け加えた。

「でも、小隊長と曹長はベテラン中のベテランだから。曹長はこの分野じや指折りの古参兵だし、小隊長は伝説の特機兵つて呼ばれるくらいの凄腕なんだよ。怜次君みたいに頼りになりそうな新人も来てくれたことだし、きっと大丈夫だつて」

岸田兵長の口調には気楽さが戻つてきていた。

怜次は力なく顔を上げた。何が大丈夫なのかは分からなかつたが、兵長が自分を元気付けようとしていることは分かつた。

「さつき言つてた『頼りになりそう』つて、こういうことですか」「うん。君ならあの子達の良い先輩になつてくれそうだと思つて」

兵長はあつけらかんと言い切つた。早くも信頼されたことを喜ぶべきか、大役を押し付けられそうなどを嘆くべきか悩みどころだ。怜次はしばらく考え込んでいたが、やがて意を決して宣言する。

「分かりましたよ。頼られたらいんでしょう、頼られたら」

半ば自棄になつて言い放つ。どうせ一介の兵士に拒否権などないのだ。思い悩むだけ無駄というものである。

岸田兵長は満面の笑みを浮かべ、ぱちぱちと拍手をした。

「流石はお兄ちゃん。そういう、新入生は女の子が多いんだけど、

みんなレベルが

「そういうのは訊いてないです」

からかい文句をぱつさりと切り捨てる。

このとき、怜次は確信した。今後の軍生活で最も頭を悩ませることになるであろう要因は、中学校を出たばかりの同僚などではなく、雲のように掴みどころのない彼女であると。いくら根は眞面目なのだと分かっていても、言動がとにかく予測不可能で、まともに受け止めるのは難易度が高過ぎる。

願わくば、小隊長と曹長が眞面目な人であつて欲しい。怜次は心の底からそう思った。

第二話 第三小隊結成

一一〇一一年 九月三十日 津ノ井駐屯地 第一會議室

学校の教室の倍ほどの広さがある會議室に、簡素な長机とパイプ椅子が規則正しく並べられている。本来は一個中隊に所属する兵を全て収容できる広さの部屋なのだが、今は片手で数えられるだけの人数が、互いに距離を取つてまばらに座つているだけだった。

會議室に集まっているのは怜次を除いて四人。内訳は少年が一人に少女が三人。その誰もが真新しい陸軍の制服を着用している。

「それじゃ、私は隊長達を呼んでくるから。ちょっと中で待つてて」「分かりました。また後で」

岸田兵長は怜次を會議室に残し、廊下の向こうへ歩き去つていった。

「あ、怜次さん」

笑顔を向ける怜奈に、怜次は軽く手を振つて応えた。相変わらず人好きのする笑顔だ。

何気なく周囲を見渡すと、初めて見る顔の少年と少女が、怜次に対して好奇の眼差しを向けていた。

一人はよく日に焼けた少年だ。かつては体育系の部活に所属していたのだろう。運動しなれているのが分かる体形をしている。少女背丈は低めだが、平均身長に少し届かないくらいという程度で、小柄というほどではない。

もう一人は、見るからに生真面目な雰囲気を湛えた少女だつた。制服をきつちりと着込み、髪型も規則通りに整えてある。表情にも

緊張感が満ちているが、顔のところどころに幼さが垣間見え、それが少女に愛嬌を与えていた。

この一人に玲奈を加えて三人。残りの一人は、他のみんなから離れた窓際の席に座り、無言で外を眺めている。怜次からは身体の右側と綺麗な短めの黒髪しか見えず、表情を伺うことすらできない。

それが誰であるかは、わざわざ顔を見なくとも分かる。黒河内月子だ。出会ったときは戦闘服姿だったので、軍服を着た姿を見るのは初めてだ。右手には相変わらず皮手袋を嵌めていたが、左手には何も付けていない。やはり、あの包帯を隠すためなのだろうか。岸田兵長が言っていた通り、怜次と比べて一回りも年下の子供ばかりだ。

自衛軍の駐屯地にいるという実感は全く感じない。軍服を着用しているという点に目を瞑れば、部活動のミーティングのために集まつた面々といった雰囲気である。

怜次が適当な席に腰を下ろすと、日焼けした少年が近くの席に移動してきた。

「こんちわ。えっと……レイジさんでしたっけ」

外見から年上だと見定めたのだろう。少年は敬語で怜次に話しかけてきた。

「久我怜次だ、よろしく」

「よろしくつす、久我さん。俺、長谷川翔也つてています」

少年は歳相応に碎けた敬語で自己紹介をする。話し方が軍隊的といつより運動部のようで、怜次は少しだけ懐かしい気持ちになつた。高校生だった頃、入学したばかりの後輩と話しているときの気分とよく似ている。

「さつだ。さつきたばかりなら、俺が他の連中を紹介しますよ」

少年 翔也はやけに嬉しそうな態度で怜次に接している。まるで他人との会話に餓えていたかのようだ。

特に断る理由もないのに、怜次は翔也の提案を受けることにした。

「それじゃあ頼めるか？」

「了解です。まずは、一番前の奴から……」

そう言って、翔也は赤毛の後頭部を見やつた。怜次は既に玲奈のことを知っているが、とりあえず翔也の紹介を聞いてみることにした。

「あのやたら目立つ頭をしてるのが、榎玲奈っていう奴っす。さつき一度だけ話したけど、とにかくテンションの高い奴でしたね」
おまえも相当テンション高いけどな、といつ突っ込みは心の奥に秘めておいた。

翔也は湧き上がる高揚感を抑え切れていらない様子だつた。楽しみにしているイベントを目前に控え、我慢できなくなっている状態と表現すれば近いだろうか。不安で饒舌になつてているわけではないようだ。

生真面目そうな雰囲気の少女が立ち上がり、こちらに向かって近付いてきた。

「長谷川君、さつきも注意したでしょ。遊びに来たわけじゃないんだから、大きな声で騒ぐのは止めなさいって」

少女は腰に両手を当てて翔也を注意した。強気な口調と表情が実際によく似合っている。

さつきというのは、恐らく玲奈と翔也が話したときのことだろう。怜次はそのときの光景を想像してみた。二人が元気に会話を交わし

てこるとこから、この少女が注意をしげてくるところまでが、
容易に脳内に浮かび上がる。

一応、声が大きくなっていた自覚はあったのか、翔也は声量を絞
つて話を続けた。

「はいはー。それで、こいつが……あー、えっと……」

田の前の少女を紹介しようとして、急に翔也は言葉を濁す。
何があつたのかは考えるまでもあるまい。単に彼女の名前を思
い出せないのだろう。

「すんません。委員長っぽい奴だから、頭の中で『委員長』って呼
んでたら、名前の方を忘れしちゃいました」

本人を前にして、翔也は包み隠すことなく正直に言い切つ
た。

委員長という表現に、怜次は思わず吹き出してしまった。彼女の
第一印象をこれほど的確に表す単語は他に思いつかない。委員長の
ステレオタイプにありがちな、眼鏡に三三つ編みといつ姿をしていな
いのが不思議なくらいだ。

少女は頭痛を堪えるように額を押された。

「ド忘れも何も、あなたに名前を教えた覚えはないんだけど

「あれ？ そうだけ」

首を傾げる翔也。

少女はその抜けつぱりに呆れ返り、怒る気力すら削がれたようだ
った。

「はあ……先が思いやられるわ」

溜息を吐き、少女は翔也から怜次へと向き直った。

「上原亜由美と申します。若輩者ですが、全靈を尽くして職務を全うする所存です。久我一等兵、「指導」に鞭撻のほど宜しくお願ひ致します」

少女こと亜由美は、しゃんと背筋を伸ばして口上を述べた。社会人の挨拶の指南書を丸暗記してきたような型通りの内容だ。

あまりにも丁寧すぎる物言いに、逆に怜次の方が怯んでしまった。一等兵は軍隊における最下位の階級だ。指導だの鞭撻だのを乞われる立場ではない。そもそも怜次と亜由美はどちらも同じ階級なのだ。確かに怜次は亜由美よりも年上ではあるが、それでも高校を卒業して半年程度しか経っていない。プロの軍人と比べれば、若輩者という点ではどちらもどちらだ。こんな台詞はベテランだという小隊長達に向けるべきだ。

「大袈裟だな……。もう知ってるみたいだけど、俺は久我怜次。よろしくな、上原」

「はいっ。この単細胞よりは役に立つてみせます」

亜由美は妙に毒のある表現で翔也を引き合ひに出した。どうもこの二人は波長が合わないようだ。体育会系と学級委員長の関係を想像すれば、不思議と納得のいく相性ではある。

机の陰で足を蹴りあう二人を横目に、怜次は月子の方を見やつた。自衛軍特別年少採用制度　このとんでもない制度を知つてからというもの、月子に対する印象がもやもやとしたものに変わつていた。

あの制度は戦災によつて真つ当な生活を送ることが難しくなつた児童　法的には高校生以下の子供を指すらしい　を対象としたものだ。それを思つと、月子の右腕を覆う包帯にも重大な意味があ

るよつに思えてくる。

印象が変わつてしまつのは、月子だけに限つた話ではない。ここにいる年少兵は例外なく特別採用で軍に入つたはずである。各々が、それ相応の理由を背負つた上で。

「なあ、長谷川。あと一人は……」

怜次が翔也に紹介の続きを頼もうとした矢先、会議室の前側の扉が勢いよく開かれた。

そして、もう聞き慣れてきた感のある岸田兵長の声が響き渡る。

「集まつたな野郎ども！ それじゃマーティング始めるべー」

この場の誰よりも小さな身体がホワイトボードの前に立つ。

上高がやつてきたにも関わらず、会議室の空気は引き締まるどころか、逆に弛緩すらしたよつに思えた。だが、それも次の瞬間までだった。

「全員揃つてゐるな。よろしい」

岸田兵長の後に続いて、屈強な体格の男が論壇に立つ。その途端、会議室は水を打つたように静まり返つた。

一目で歴戦の兵士だと分かる。年季の入つた軍服を着こなし、鋭い眼光で新兵達を睥睨する様は、まさに軍人と呼ぶにふさわしい。年齢は三十に達したくらいだろうか。短めの髪を後ろに撫で付けた髪型が、その強面ぶりを遺憾なく強調している。

言葉を失つた怜次達を、どういうわけか男はじつと見据え続けていた。彫りの深い三白眼といつものゝは、黙つてゐるだけでも相当な威圧感があつた。

「怯えてますよ、曹長」

岸田兵長が男の脇腹をからかつように肘で突く。男は気難しそうに表情を崩した。

「む、むう……」

大きな咳払いをして、男は改めて話を切り出した。

「まずは自己紹介から始めておこう。小隊付き下士官と諸君らの訓練教官を兼務する、猪熊竜馬曹長だ。そこにいるのは岸田佐代子兵長。もう会つた奴もいるはずだな。こんななりだが、訓練教官補佐を務める予定だ。見かけに騙されるなよ」

「曹長、一言くらい多いです」

岸田兵長は素敵なスマイルのままで毒づいた。曹長とは兵長よりも格段に上の階級だ。それなのにここまで碎けた態度を取る岸田兵長に、怜次は何とも言いがたい感情を抱いていた。物怖じしない態度への尊敬が三割と、こんな大人にはなるまいという反面教師的な思いが六割。残り一割は、この人は本当に軍人なのだろうかという純粹な疑問だった。

子供の雇用に苦言を呈したときはまるで別人のようだ。もしかしたら、本当に同じ顔の人間が入れ替わって登場しているだけなのかもしれない。怜次はその光景を想像し、表情に出さず密かに笑つた。

猪熊曹長は何事もなかつたかのよつて、岸田兵長の苦情を無視して話を続行する。

「諸君らが配属されたこの部隊は、中部方面隊隸下第三特機隊第一中隊所属第三小隊、いわゆる『特機小隊』の一つだ。諸君ら五名と

我々一一名、それとこ」にはおられない小隊長を加えた八名で部隊が発足することになる

一田言葉を切り、新兵達を一通り見渡してから言葉を継ぐ。

「とはいへ、黒河内一等兵と榎一等兵は一週間早く着任していたから、実質的には新たに三人が着任して小隊が完成した形になるな」

なるほどそういうことか、と怜次は納得した。

月子が実戦参加しているのはこの目で見ており、玲奈も実戦に関わっていたことを匂わせる発言をしていた。怜次と同期の隊員になることを考えると不自然だが、一足先に配属させていたなら話は別だ。

「い」今まで、何か発言しておきたいことはあるか

そう言われて、翔也が遠慮がちに手を挙げた。

「質問、いいですか

「許可しよう。言ってみろ」

「えっと、八人って少なすぎじゃないですか？」

翔也の疑問は、特機部隊の内情を知った者が必ず一度は思うことだ。

軍隊において最もメジャーな兵科である歩兵部隊の場合、一個小隊はおよそ四十人で構成される。八人というのは、そのたつたの五分の一でしかない。小隊を幾つかに分割して行動するときは分隊という小集団を構成するのだが、それですら十人前後が一般的だ。

「長谷川一等兵か。お前がいた教育隊では一隊二十人編成だつたな。

それなら少なく感じるのも止むを得まい」「

猪熊曹長はその質問を予想していたらしく、淀みなく回答を返した。

「確かに歩兵小隊なら四十人前後が定数だ。だが他の部隊には、それぞれに適した人数というものがある。例えば戦車小隊は十六人から十一人で構成されている。上原一等兵、理由が分かるか?」

猪熊曹長は亜由美に話の矛先を向けた。

亜由美は驚いて目を瞬かせていたが、すぐに気を取り直して立ち上がった。

「はい。戦車小隊は戦車四輜で一個小隊を構成するからです。四人乗りの戦車なら十六人、三人乗りの場合は十一人が小隊の人数となります」

まるで教師に問題を解くよう命じられた優等生のような語り口で、亜由美は答えた。曹長は別に起立しろとは言っていないのだが、学生だった頃の癖が残っていたのだろう。彼女が送ってきた学園生活を想像させるには充分な態度である。

「模範的な回答だな。特機小隊もこれと同じだ。一個小隊の配備数は四機で、一機あたりの乗員数は最大二人。一人で操縦することも不可能ではないが、身体的な負担を考慮して長時間の単独操縦は非推奨とされている」

鉄道が襲撃されたとき、月子は単独で特機を動かしていた。非推奨といつても禁則事項というほど厳しい制限ではなく、できれば二人で動かしたほうが良いという程度なのだろう。

実際、教育隊のカリキュラムにも単独操縦の訓練が組み込まれている。絶対に行つてはならない事柄なら、わざわざ時間を割いてまで習得させたりしないはずだ。

「そういうわけで、合計八人が特機小隊の標準的な員数となる。これくらいは事前に知つておいて欲しかつたが……戦線に投入されて十年も経つていかない兵器だからな、仕方がないか」

曹長は会議室を端から端まで見渡して、ふむと頷いた。

「そろそろ小隊長に同席して頂いた方がいいな。よし、総員起立。これから特機の格納庫へ移動する。そこで小隊長と特機に挨拶だ」「やつた！」

先に部屋を出た猪熊曹長と岸田兵長の後を、翔也が嬉しそうに追つていった。感情が顔に出ないよう気をつけてはいるらしいが、誰が見ても喜んでいるのは明らかだ。怜次は他の隊員達から少し遅れて、猪熊曹長に置いていかれない程度の速さで歩いていく。

「久我二等兵、ご存知ですか」

亜由美が怜次に身を寄せて、小声で囁く。

「長谷川君……長谷川二等兵のことですけど、特機のことをヒーローが乗るものか何かだと勘違いしているみたいなんです。年甲斐もなくはしゃいでいて……」

怜次は内心で首を捻つた。これは世に言ひ告げ口といつものか？不満を述べる亜由美の顔は、言つことを聞かない悪餓鬼に手を焼いているまとめ役の生徒といった雰囲気だ。ここまで見事に委員長

気質の性格だと、彼女を頭の中で『委員長』と呼んでいた翔也の気持ちも分かつてしまう。

それはそうと、彼女の発言にどんな答えを返せばいいのだろう。適当に同意するべきか、反対意見でも考えてみるべきか。どちらを選んでも角が立つ気がした。

「まあ、確かに特機は凄い外見してるから、分からんでもないが……」

そこまで言つて隣に視線を移す。亜由美は不服そうに眉をひそめていた。

「……見かけが良くても兵器は兵器だからな。眞面目に取り組んでもらわないと」

「当然です」

結局、怜次はどうちつかずの返答をするに留まった。

亜由美は線の細い肩を怒らせて、曹長達のすぐ後ろまで早足で掛けている。本当に、亜由美と翔也達は相性が良くないらしい。

怜次は大雑把な仕草で後頭部を搔いた。当面の間、小隊はこの面子で運営していくことになる。いわば一蓮托生の共同体なのだ。初日からこんな様子では、これから先を不安に思わないほうが難しい。

格納庫は、会議室のある建物から少し離れたところに建てられていた。

高さ十メートル強、奥行き三十メートル以上はある、白いプレハブ造りの建造物。それが十五棟ほど規則正しく並び建っている。まるで工場地域の一画を切り出して、駐屯地の敷地まで持つてきたかのような風景だ。

隊員達は猪熊曹長を先頭にして、格納庫の間を歩いていく。路面

は土で薄汚れ、ところどころが浅く陥没していた。

やがて、曹長は真新しいプレハブの前で立ち止った。

「（二）が我々の小隊の格納庫だ。他はよその小隊の格納庫だからな。間違えるなよ」

プレハブの外見 자체は、他の格納庫と全く同じものだ。同一規格のプレハブを建てているのだろう。しかし外壁の汚れは他より格段に少なく、最近になつて新築した建物だということが見て取れる。屋根の真下まで届く大きなシャッターが、鈍い金属音を立てながらゆっくり上がっていく。地面から一メートル程度の高さまで上昇したところで、一人の男がシャッターを潜つてひょっこりと姿を現した。

「ん、全員揃つたのか？」

男は気さくな態度で笑つた。

最初に目に付いたのは、豊かな白髪に黒い毛髪がまだらに混ざつた模様の頭髪だった。顔付きや身体はかなり若々しいのに、髪のせいで実年齢が分かりにくくなつてている。一見すると、男はスラックスにワイシャツという極めてラフな服装をしているようにも見える。だがよく見れば、男が肩に掛けている上着は陸軍士官の軍服であつた。

猪熊曹長がお手本のような敬礼をして、白髪頭の士官に現状を報告する。

「中尉。猪熊竜馬以下七名、全員集合致しました」
「（二）苦労さん」

白髪頭の中尉は猪熊曹長を労うと、新人達の方を向いた。

その間にも格納庫のシャッターは少しづつ開き続けている。

「俺が第三小隊の小隊長、日向虎彦だ。正式な隊の発足は明日付けどが、顔と名前くらいは今のうちに覚えといてくれ」

日向中尉は、猪熊曹長とは正反対の飄々とした態度で、格納庫の前に並んだ新人達に名前と肩書きを名乗った。

そのタイミングを狙っていたかのように、岸田兵長が茶々を入れる。

「顔より頭の方が覚えやすいと思しますよ?」

「ははは、違いない」

小隊長に対する新人達の反応は十人十色であった。

亜由美は不真面目な態度に閉口している。

翔也は今までの騒々しさがすっかり影を潜め、がちがちに緊張して立ち尽くしている。

そして、月子は今まで見たことがないくらいに真剣な顔つきで、小隊長のことをまっすぐ見据えている。

ふと、怜次は岸田兵長と交わした会話を思い出す。確か兵長は『小隊長は伝説の特機兵って呼ばれるくらいの凄腕』だと言っていた。それが誇張でないとしたら、この気さくな青年が『伝説の特機兵』なのだろうか。

確かに日向中尉の肉体は無駄なく引き締まっている。しかし、まさしく歴戦の兵士といった風体の猪熊曹長とは違い、優男という表現がしつくりくる容姿である。

巨大なシャツァーが全開になる。がしゃんという音を立て、シャツァーの巻き上げが停止する。日向中尉は不敵な笑みを浮かべて、格納庫の照明スイッチに手を掛けた。

「さて、せっかくここまで来たんだ。自分達が乗る機体くらい確認

しておきたいだろ?」

スイッチが入り、格納庫の照明が一斉に点灯した。

殺風景な格納庫の内装が次々と照らされていく。巨大なクレーン。二階通路を繋ぐ空中の渡り廊下。唸りを上げる発電機。山と詰まれた大型コンテナの数々。

それらに囲まれて、人造の巨兵が静かに立っていた。

頭までの高さは三メートルから四メートル。脚の付け根までの高さだけで人間の身長に匹敵する。胸部は前後に張り出し、強靭な足腰と上半身を柔軟な腰部が連結している。金属纖維で編まれた筋肉を合成皮膜で包み、グレーの外装で装甲した巨大なヒトガタ。

月子が乗っていた機体と同型だが、まだ迷彩塗装を施されておらず、武装も未搭載だ。他に違いがあるとすれば、頭部周辺のアンテナ類が大幅に増設されているくらいだろうか。

「正式名称、三式特殊駆動機械。通称『三式特機』　当分の間、お前達が世話になる機体だ。しつかり挨拶しておけ」

日向中尉は特機の爪先に腰を下ろしてそう言った。先ほど、顔と名前くらいは覚えてくれと言っていたが、別にそんな心配をする必要はないだろう。

こんなに印象の強い人なのだ。覚えないほうが難しいに決まっている。

一一〇一一年 十月一日 津ノ井駐屯地 司令官執務室

第三特機群群長、天野大佐はデスクの椅子に深々と腰を降ろし、四十歳という年齢を感じさせない眼光で、整列した若い部下達を見渡した。駐屯地の司令官は、その駐屯地に配備されている部隊の隊長の中で最も階級の高い者が兼任する。津ノ井駐屯地の場合は第三特機群の群長がこれに該当していた。

「予定通り、特機群隸下の五個中隊に小隊を一個ずつ新設することができた。これも諸君らの尽力があつてこそだ」

天野大佐は型通りの言葉で部下を労つた。

司令室に集まっているのは、七月一日付けで新設された特機小隊の小隊長達だ。階級は少尉か中尉のどちらかで、五人全員が二十代前半から二十分代半ばまでの年齢層に収まっている。軍人としては若手と呼ばれる年齢の者ばかりである。

「諸君らには、これから小隊長として新設小隊を率いてもらうことになる」

大佐は椅子から立ち上がると、壁に貼り付けられた東アジア地区の地図を示した。敵勢力地域を示す赤いマーカーが、大陸沿岸部を中心に、陸地の一割から三割の面積を制圧している。その一方で、日本列島を始めとした島嶼地域には殆ど赤マーカーが乗っていない。天野大佐は地図の枠外に除けられていた赤マーカーを一つ取ると、マレー半島の南端に配置した。

「五時間前に入った情報だ。シンガポールにまとまつた戦力を持つた敵勢力が上陸した。即座に排除したものの、軍事関連の港湾施設が多大な損害を被つたらしい。」の結果、諸君はどう見る？」

小隊長達は僅かにざわついたが、すぐに冷静な分析を開始した。

「マラッカ海峡を守る戦力が一次的に低下して、石油タンカーの運行が滞る危険が考えられますね。日本が輸入している原油の殆どはあそこを通りますから、海上交通の停滞は大きな打撃になります」

「そこを通っているのは石油タンカーだけではない。他の物資にも影響がある」

「金属資源の輸入が途絶えれば大変なことになるな」

天野大佐は小隊長達の議論に耳を傾け、大きく頷いた。大佐が何かを話そうとしていると察し、小隊長達はすぐに静かになった。

「金属食性異星生物　いわゆるグレムリンとの戦いは今も世界規模で続いている。今日、我が国に資源を輸出している国が、明日も同じように輸出を存続しているという保証はどこにもない。そうでなくとも、他国への輸出に回す余裕がなくなるかも知れん」

一回そこで言葉を切る。天野大佐は小隊長の顔をひとりひとり順番に見据え、充分な間を置いてから改めて口を開いた。

「故に、今後の戦いでは特機が重要なのだ。諸君らが育てる新設部隊もまた、将来の防衛戦線を支える大切な柱となることだろう。そのことを肝に銘じて、部隊運営に臨んでもらいたい。私からは以上だ」

そして、天野大佐は解散を命じた。小隊長達は頭を軽く下げ、順

番に退室していく。

自衛隊とその後継組織たる自衛軍では、額に手をかざす形の敬礼は帽子を被っているときに行わない。脱帽時の敬礼は文字通り『礼』となる。

「ああ、日向中尉は残つてくれ」

天野大佐に呼び止められ、虎彦は足を止めた。他の四人が執務室を出ていったのを見届けてから、執務用のデスクの前へ戻る。

「君の小隊には、特別採用の年少兵が割り当てられていたな」「はい。それが何か」

虎彦は無感情な声で答えた。

割り当てられているというよりは、それしか割り当てられないという方が正確である。配属された新兵五人のうち実に四人が年少兵なのだから、普通の新兵こそが少数派だ。それどころか小隊の半分が年少兵という勘定になる。

こんな異様極まりない編成の部隊は、新設された五個小隊の中でも虎彦の隊だけである。

天野大佐は蛇のような眼差しで虎彦を見据えている。痩せ氣味の顔の中で、無機質で切れ長の眼球だけが爛々としている様は、まるで人の形をした爬虫類と向かい合っているかのような感想を抱かせる。

「第三小隊に配属された黒河内一等兵……決して彼女を戦死させではない」

「それは命令でありますか」

努めて無表情を維持したまま、虎彦は問い返す。

「厳命だと書いてある。私よりも上の権限からの要請だ」

大佐も無機質な表情を崩そうとしない。表情筋がこれ以外の形を作れないのではと思つてしまつほどだ。

「拝命します」

虎彦は素直に要請を受け入れた。ここで問答をしたところで何の意味もない。天野大佐は上からの要請を伝えたに過ぎず、また大佐自身にも拒否権などなかつたに違いない。

どこからの要請なのかは凡そ検討がつくが、つくづく無意味な要請をしたものだ。部下を死なせたがる上官などいるわけがなく、そう願つていても死んでしまうときには死んでしまう。配属された後になつて、戦死させるなという圧力をかけるくらいなら、最初から特機部隊に配属させない方向で圧力を掛ければよかつたのだ。

更に言えば、自衛軍に入隊させたこと自体が理屈に合っていない。天野大佐は一冊の書類を虎彦の方へと滑らせた。

「君の部隊に配備される予定の新型特機、一〇式の仕様書だ。後で目を通しておきたまえ。現在、追加改良のため製造に遅れがみられるが、半年以内には定数を揃えられるだろう。それまでは三式を継続して運用するように」

虎彦は書類を受け取り、一枚目をめくつてみた。そこには、三式よりも洗練されたフォルムの設計図が描かれていた。新型機の配備が半年以内。その間に何も起こらなければいいが　虎彦は内心の不安を隠したまま、新型機の仕様書を受け取った。

そのとき、執務室の扉が軽くノックされた。

「空木です」

「おお、君か。入りたまえ」

現れたのはスカートスーツに身を包んだ妙齢の女だつた。軍人と
いう雰囲気ではないが、化粧が薄くやたらと愛想のないその表情は、
軍需製品を売り込みにきたセールスレディとも思えない。

女は無関心に虎彦を一瞥したが、すぐにもう一度顔を向け、目を
丸くした。

「驚いた。まさか、あの日向少尉か？」

「今は中尉だ、空木技官」

天野大佐が訂正を入れる。

「なるほど、昇進されたのか。大佐殿、彼と少々話がしたいのですが、お借りしてもよろしいでしょうか」

「構わんよ。こちらの話は済んだばかりだ」

どうやら本人の意思が介在する余地はないようだ。虎彦は大佐に
屋内式の敬礼をし、空木という技官の後に続いて廊下へ出た。

司令官執務室から少し離れたところで、空木は虎彦に向き直つた。

「私は技術研究本部、陸上装備研究所の空木都子。お会いできて光
栄だ、日向中尉。神奈川へ帰る前に大佐殿に挨拶をしようと思つた
ら、とんだ有名人に会えたものだ」

そう言って、空木は握手を求めてきた。虎彦はそれに応じながら
も、空木のことをさりげなく観察した。

技術研究本部 通称『技本』は防衛省の下部組織で、自衛軍の
装備品全般の研究開発を行う組織である。単に『技官』と呼ばれて

いたので、軍人ではないらしい。軍人と技官を兼務している場合は特別な階級名で呼ばれるのだ。

技本の職員が一地方の駐屯地を直接訪れるのはかなり珍しい。それこそ珍客の部類に入るくらいだろう。

「はじめまして、でいいのかな。空木技官」

「ああ。私が一方的に知っているだけだからな。というより、私の同業者で『日向少尉』のことを知らない者はまずいないよ」

昇進前の階級をあえて使うのは、虎彦が少尉だった頃の行為が有名なのだという意味を込めているのだろう。となると、理由は一つしか思い浮かばない。

空木は虎彦が手にしている書類に目を落とした。冷徹な美貌に喜色が浮かぶ。

「中尉に昇進したということは、一〇式の小隊を指揮するのか？」

「予定上では。今のところは、練習用の三式しか届いていないけどな」

それを聞いて、空木は自嘲気味に髪を搔き揚げる。

「とんだじ迷惑をおかけしているようだ。メーカーには性能に妥協しない方針で生産させていたのだが、現場に行き渡るのが遅れては元も子もない。開発メンバーの一員として切にお詫び申し上げる」

なるほど、と虎彦は内心で納得した。空木技官は一〇式開発のプロジェクトチームの構成員で、一〇式に関する用件で駐屯地に来訪していたということだ。そんな相手と遭遇できたのは随分と気前いい偶然だといえるだろつ。

「お詫びといつてはなんだが、一個小隊分計四機、耳を揃えて五週間後にはお届けできることを約束しよう。十一月第一週には新たな特機への移行訓練を始められるはずだ」

「そいつは有り難いが、こんなところで安請け合いしてもいいのか？」

「なあに、うちの業界には君のファンが多いんだ。なにせ上海から特機を連れ帰ってきたのは君だけだからな。多少の贔屓くらいできるさ」

やはりあのことか。虎彦は押し黙り、睨むように目を細めた。忘れたくとも忘れられない出来事。地獄の縁を覗いた瞬間。あれを評価し、あまつさえ感謝するできるのは、最前線と無縁に生きてきた人間に違はあるまい。

「怖い顔だ。しかし我々が君に感謝しているのは本当だよ」

薄い口紅で彩られた唇が、にやりと歪む。

「地獄の上海戦役。自衛軍結成以来、空前絶後の大敗。君があの戦地から持ち帰った機体は、我々にとって何物にも代えがたい貴重なサンプルだったよ。おかげで一〇式に更なる改良を加えることができたんだからね」

そして、空木は笑つた。

第四話 ハーストミッション

一一〇一一年 十月六日 島根県奥出雲町 猿政山周辺部

まさしく日本の山といつべき風景を眺めながら、怜次は嘆息した。山脈に沿つて続く日当たりの良い林道からは、中国山地を構成する山々をぐるりと一望することができた。十月の彩りに染まつた木々と青空のコントラストは、まさに絶景と呼ぶに相応しい。

大きく息を吸い込むと、冷たく澄んだ空気が胸を満たしていく。空気が美味しいという表現は、決して比喩ではなかつたらしい。都会では決して体験できない贅沢な味わいだ。

見事な展望に澄み渡つた空気。休暇で訪れるには最高の環境に違いない。

惜しむべくは、怜次がここを訪れた理由が休暇ではないことである。

「久我さん。小休止はそろそろ切り上げよう」

月子が相変わらずの口調で呼びかけてきた。

怜次は溜息を吐いた。今度は感動を込めた嘆息ではなく、疲労感がたっぷりと詰まつた溜息である。

「……そんなに急がなくてもいいだろ。時間はたっぷり余裕があるぞ」

愚痴りながらも、声のした方へ向き直る。

登山客の団体が余裕を持つて通過できる道幅の林道に、迷彩塗装の特機がしゃがみこんでいる。第三小隊の三号機だ。張り出した胸部を下に、箱を背負つたような背部を上に傾けているので、窮屈な

体勢で片膝を抱えているようにも見える。

右腕には三五ミリ機関砲を装備し、背部左寄りには機関砲の弾装を背負っている。いわゆる標準戦闘装備という兵装である。

月子はその足元に座って地図を広げていた。

近くへ来いと手振りで示されたので、怜次は月子の正面に腰を下ろした。

「にしても、まさかこんなに早く出撃させられるなんてな。小隊の編成が一日で、今日が六日だから、まだ五日しか経ってないってのに」

怜次と月子は揃いの戦闘服に身を包んでいる。一人が初めて出会ったときに月子が着ていた装備と同じものだ。どちらの戦闘服も陸戦用の迷彩服と対G装備を組み合わせたようなデザインで、それぞれにサイズ以外の違いはない。

それに加え、月子は例の皮手袋を両手に嵌めていた。

「特機兵は常に不足しているそうだ。私なんか小隊発足より前から駆り出されたくらいだよ。考えようによつては、気軽な実地訓練と言えなくもないさ」

「……確かに、下手すりや待機してゐる間に作戦終了つてことも有り得るしな」

怜次達が猿政山を訪れた理由。それは、第三小隊に下された任務のためである。

特機部隊は各方面隊に一個もしくは二個ずつ配置されており、中部方面隊の場合は第一特機群と第三特機群が該当する。

中部方面隊の管轄は岐阜・富山・愛知の三県から山口までの西日本と四国であり、第一特機群は中部地方西部と近畿地方を、第二特機群は中国地方と四国をそれぞれ担当している。

つまり、島根県と広島県の県境で特機部隊が必要となつた場合、怜次達の所属する第三特機群から部隊が派遣されることになるのだ。

「再出発の前に、今後の行動指針を確認しておこうか」

月子は膝の上に地図を広げた。地図上には、猿政山の周りの計八箇所に赤インクで印が付けられている。

「私達の待機地点はここだ。現在位置はそこだから、林道をもう少し登れば到着する」

「それで、歩兵大隊からの連絡を受け次第、攻撃に移る。だろ？」
田向中尉と岸田兵長の一一番機の待機地点はその赤丸で、向こうの四つは第二小隊の場所、と

任務の内容自体は出撃前に何度も確認している。しかし、いざというときに思い出せなければ何の意味もない。だからこそ、こうして何度も確認することが大切なのだ。

怜次は自分が新兵に過ぎないことを自覚している。それ故に、当たり前としか思えないことでも繰り返し確認するようにしていた。きつと月子も同じ考えなのだろう。

例えば地図に記された印の意味。月子が指で示した待機地点には、赤い丸印と、算用数字で一 三 三 三という書き込みが記されている。これは第一中隊第三小隊三番機の待機場所を示す印という意味だ。この任務には第一中隊第一小隊も参加しているので、印は全部で八つ記入されている。

いざ戦闘となつたときに、この読み方を間違えれば悲惨な事態になる。馬鹿らしいと思われるかもしれないが、混乱した人間は馬鹿らしい間違いを平氣で犯してしまつ。それが新兵であれば尚更だ。

「私が先週参加した任務と似たようなものだな。巣を潰されて『は

ぐれ』になつたグレムリンを歩兵部隊が追い立て、先回りした特機でトドメを刺す。典型的な山狩りだよ」

「あのときは先回りできずに列車がお釈迦になつてたぞ？」

「それは……歩兵部隊が追い込みに失敗したからであつてだな。私は精一杯やつたんだ」

怜次が茶々を入れると、月子は不愉快そうに眉をひそめた。これ以上からかうと本氣で反論してきそうだったので、怜次は話題を戻すこととした。

「それはそつと、この山の近くで田撃されたつていうグレムリンは、二ヶ月前に壊滅に成功したつていう巣の生き残りで間違いないのか？」

「恐らくはそつだろ」と推測されている。巣のあつた赤名峠からここまで一十キロ程度しか離れていない。それに、中国地方で他の巣が発見されたという報告もない。この前みたいに単独で百六十キロも逃走するのは珍しい事例だ」

先週グレムリンが鉄道を襲つた場所は、鳥取県の北東の隅に位置する。一方、そのグレムリンの巣があつたとされる赤名峠は、島根県中部の県境にある。

首都圏を例に挙げれば、東京都の都心から静岡県静岡市までの距離に近い。

下つ端のグレムリンが単独でこんなに移動するのはかなりのレアケースである。

「例外的に『女王』が群れを率いて移動する場合は、何千キロだろうと平気で移動するらしいけど、赤名峠の巣穴は『女王』も仕留められてるから……いや、これは関係ないか」

月子は地図を折り畳んで立ち上がった。ついでにズボンの砂を払つてから、しゃがんだままの三号機の胸部装甲に手を掛ける。

外部からのレバー操作で内蔵モーターが作動し、張り出した胸部の前面装甲が開いていく。開閉時には下半身に近い側が軸となるので、必然的に装甲の一部が地面と接触して、地表を浅く掘り返す。開閉する側の装甲の内側にはちょっとしたステップが設けられており、通常はこれを使って乗り降りすることになっている。月子のように平然と飛び降りるほうが少数派なのだ。

「ここまでは久我さんが操縦だったから、今度は私が動かすよ」

そう言つて、月子は怜次に手招きをした。

「……お言葉に甘えるかな。操縦頼んだ」

先ほど、怜次が疲労感の籠つた溜息を吐いていた理由がそれだ。特機の操縦は見た目以上に心身の疲労を招く。まして不整地を行軍するとなれば、単に平地を移動するよりも何割増も疲れてしまう。まず怜次は上半身を操縦席の乗降口に入れて、前部座席の背もたれを手前に倒した。次に、両手と膝を使って後部座席のところまで移動する。そして、座席の上で身を捩つて着席し、ベルトで身体を固定する。これが特機の後部座席への搭乗手順だ。

「搭乗完了。黒河内、もういいぞ」

「了解」

月子は倒された背もたれを元に戻し、そこに腰を下ろした。前部座席は後部座席よりも乗りやすくなっている。それでも天井が低く幅が狭いことに変わりはなく、月子が簡単に乗り込めるのは、歳相応の少女らしい小柄な体格のお陰である。

「閉めるよ」

内部からのレバー操作によって、開放されていた胸部装甲がゆっくり閉まっていく。それが完全に閉じきつた頃には、操縦席を深い暗闇が覆い尽くしていた。

特機の操縦席は凄まじく狭い。文字通り、座った状態の人間が辛うじて納まるくらいの高さしかなく、奥行きも座席二つ分しかない。積載機器も必要最小限に留まっており、操縦席の左右に通信機や各種計器が取り付けられている程度だ。

月子は薄手のベルトを首に巻いて、手元のボタンを押した。そのベルトは細い配線の束で操縦席と連結していた。まるで月子と機体を繋ぐ神経節のようだ。

「つ 神経系インターフェース、接続完了」

狭い操縦席に搭載可能な機器で、人型という複雑な機構を制御する手段。それがこの神経系インターフェースという技術だ。

この技術は、医療方面でも頭で思い浮かべた通りに動く義手などの研究に用いられている。これにより、特機の操縦士は肉体の延長のように特機の四肢を動かすことができるようになるのである。

月子が始動ボタンを押しながら足元のペダルを踏み込む。まもなく充電器が動き始め、操縦席のコンソールが次々と起動していく。機体の下部で燃料槽のポンプが作動し、鈍い鼓動を立てながら、金属製の筋肉纖維に動力溶液を行き渡らせる。

「筋動力安定。平衡調整完了。……三式、起動確認」

機動シークエンスを済ませてから、月子は座席越しに振り返った。後部座席の方が僅かに高い位置にあるため、軽く見上げるような眼

差しになつてゐる。

「久我さんもインターフェースを付けておいてくれ。何かあつたらいいけないから」「ん、分かった」

怜次は座席の脇から神経系インターフェースのベルトを引っ張り出し、月子と同じように首に巻いて手元の接続ボタンを押した。バン、というスイッチが入るような幻聴の後で、身体の感覚が延長された錯覚が訪れる。

事故などで四肢を失つたとき、稀に失くした手足の感覚が残り続ける『幻肢痛』という症状が起つてゐるという話を聞く。この場合は、最初からありもしない手足の感覚が新たに生じるようなものだ。

今は機体全てのコントロールを前部座席に預けているので、その錯覚も大して強くはない。だが、前部座席に座つていたときは身体が一つあるように思えて仕方がなかつた。

「これつて便利だけど、色々疲れるんだよなあ……」
「そうか？ 私はあまり気にならないけど」
「……慣れるの早いな、おい」

雑談をしている間にも、月子は手早く準備を整えていた。操縦席の左側に折り畳まれていた一本のアームとその先に取り付けられた液晶ディスプレイを正面まで引っ張り出して、右側のもう一対のアームと連結させ、前部座席の正面にしつかりと固定する。

電源を入れると、画面上に外の風景が映し出された。頭部カメラが撮影している映像だ。

三式特機は胸部装甲を開閉させて乗り込む構造のため、前部座席の正面にディスプレイを配置することができない。そのため、わざわざこんな回りくどい手順を踏んでセッティングする設計になつて

しまつたらしい。

「立ち上がるぞ」

計器の淡い光に照らされた前部座席で、月子が独り言のようになじみを宣ふる。

三号機が曲げていた脚部をゆづくと伸ばす。

ゆり籠のように傾く操縦席の中、怜次は通信機のスイッチを入れた。

「ひちりー三二。小休止を終了。これより待機地点へ向かいます」

少しばかりの間を置いて、耳に馴染んだ感のある岸田兵長の声が返ってくる。

『りょーかい。変に緊張しちゃダメだからね。隊長機はすぐ近くにいるから、何かあつたら頼りなさいよ』

「何も無いことを祈ります」

通信を終え、怜次は深く息を吐いた。どうにも気分が重たい。胸の奥に鉛の塊が入っているかのようだ。

認めたくないことが、自分は緊張しているのだろう。

三号機が歩き出す。機体の幅よりも多少広い程度の林道を、一歩ずつ前へ進んでいく。すぐ左手は崖に近い角度の急斜面になつていい。自分の足で立っているときは風光明媚な絶景ポイントでも、特機に乗つている状態では恐怖の対象にしか感じられない。

もし月子が操作を誤れば、三号機はたゞどろに斜面を転げ落ちて無残な残骸に成り果ててしまつだらう。

怜次は心臓の高鳴りを押さえよう。もう一度息を吐き出す。

「……ふう

「何だ、初めての実戦で緊張してるのでか」

前部座席から、からかうような声が投げかけられる。怜次はむつとした表情を浮かべた。確かに図星ではある。しかし、それを三つも年下の少女に指摘されるのはどうしても腹が立つてしまつ。

「そんなわけないだろ。教育隊の訓練でも実戦には参加してるんだからな」

「訓練課程の実戦参加なんてエキストラみたいなものじゃないか。ちなみに私は、これで三回目の中出撃だぞ」

月子はどこか自慢げにそう言った。

これで三回目ということは、先週の鉄道襲撃事件より以前に初陣を終えていたということになる。

「どうせ最初の出撃は見学同然だつたんだろ?」

怜次は妙な対抗意識を覚えてしまつていた。これでは売り言葉に買ひ言葉だ。もしかしたらすぐにでも戦闘が起こるかもしけないのに、操縦席の中で不和を生じさせるなんて論外もいいところだ。

しかし、月子の反応は以外と素直なものだつた。

「……まあね。実は、私も少し緊張してる。一こんなに狭い山道を歩くなんて初めてだからね。足を踏み外したらどうなるか、正直想像もしたくないよ」

軽い感じで笑いながらも、月子はディスプレイから顔を離していな。

正面ディスプレイの四分の三には機体前方の風景が映し出され、左下の四分の一には機体左側の足元の様子が表示されている。特機には頭部のカメラ以外にも幾つかのサブカメラが搭載されており、必要に応じてディスプレイの表示を切り替えられるようになっている。

怜次は、ばつの悪さを誤魔化すように頭を搔いた。これでは自分が子供みたいではないか。

「こいつの任務が多いのは仕方がないと思ったほうがいいな。不整地や山道でも移動できるのが特機の強みなんだから」

もつともらしいことを言いながら、怜次は後部座席のディスプレイを準備した。表示するのは機体左側の風景。急斜面の向こうに広がる山々である。

こうして複数の方向を同時に確認できるのも、操縦士が一人いることのメリットだ。

やがて林道は斜面から離れ、機体の両側を木立が取り囲んだ。当分は見通しの悪い状態が続くが、また暫く進めば別の斜面に行き当たるはずだ。

「それにしても、まさか黒河内とペアを組まされるとは」「……不満なのか？」

円子は低い声で言い返してきた。

「いいや。小隊の男女比が一対一なのに、わざわざ男女で組ませる意味があるのかなって思つただけだよ」

今回の第三小隊の編成は次のような内訳だ。

一号機、つまり小隊長機に日向虎彦中尉と岸田佐代子兵長。

一〇号機に猪熊竜馬曹長と長谷川翔一等兵。

四号機に上原亞由美二等兵と榎玲奈一等兵。

そして、一〇の二〇号機には怜次と月子が乗っている。

「どうなんだろ？ もしかしたら、くじ引きで決めただけとか」「流石にそこまでいい加減じやないだろ。岸田兵長ならやりかねないけど、曹長あたりが止めてくれるばっさだ」

「ああ、それは確かにありそうだね」

任務と関係ない雑談を繰り返す。作戦中に不真面目だと叱られるかもしれないが、こうでもしなければ緊張が解れそうになかった。少なくとも月子と離している間は、胸の奥に掛かる重みを忘れられる。それだけでも、作戦遂行上の利点があるとは言えないだろうか。

木立を抜け、再び見晴らしが良くなる。

後部座席のディスプレイに紅葉した山々が映し出される。少し前まで見えていた山とは違つ風景だ。

「久我さん。そろそろ待機地点だから、隊長機に連絡を

」

その瞬間、斜面を挟んだ向かい側の山肌で何かが動いた。

木々の梢が局所的に震動し、不可思議な形の物体が飛び出してくる。

「黒河内！ 左から来る！」

「えつ きやあー！」

『それ』は瞬く間に谷を飛び越え、三号機に激突した。

左側面から凄まじい衝撃が襲い掛かる。

三号機は成す術もなく山肌に叩きつけられた。

「ぐう……」

月子が苦悶の声を漏らす。二号機の右半身は山肌の柔らかな土にめり込み、立ち上がることを困難にしていた。機体の四肢に搭載された金属製筋肉が唸りを上げる。それでも三号機が起き上がる気配はない。

「どうした、黒河内！ 立てないのか？」

ディスプレイから得られる外の情報はまるで役に立っていない。幾らカメラを切り替えるも土や空しか映し出されていない。ガリガリと金属の削れるような音が響く。あまりにも耳障りな雜音で、思わず耳を塞ぎたくなってしまう。どこから聞こえてくるのか分からぬが、まさか四肢に故障でも発生したのだろうか。

「違う！ 何かに押さえつけられてるんだ！」
「何かだつて……？」

怜次は次々とディスプレイの表示を切り替える。やがて、機体左側面のカメラの映像が映し出される。

どういうわけか、ディスプレイは真っ暗なままだった。
明らかにおかしい。三号機は右半身を山肌に押し付ける形で倒れている。ならば、左半身に取り付けられたカメラは向かい側の山々を映していなければならぬはずだ。

故障か、あるいは

「黒河内！ 機体側面に何か張り付いてるー。」「やはりかー！」

月子は右手のレバーの撃鉄を引いた。

機体右腕の三五ミリ機関砲が轟音を鳴らせて回転し、無数の砲弾を吐き散らす。山肌に押し付けられた状態での砲撃だつたため、激しい震動と砲弾の衝撃波が山肌の土砂を吹き飛ばして土煙を巻き起こす。

粉塵に追いやられるように、三号機を押さえ込んでいた『何か』が飛び退いた。それと同時に、金属を削る不快な音も消え失せた。怜次のディスプレイに光が差す。

後光を背に飛び退き、斜面から突き出した大木にぶら下がつた『何か』は、形容しがたい奇怪な形状をしていた。

「……っ！」

「まさか、あれは……グレムリン？」

怜次は言葉を失い、月子もその正体を断定できないでいる。その生物は、まるでヒトデのような姿をしていた。

いい加減な比喩ではない。星型をした典型的なヒトデではなく、触手に近い柔軟な腕を持つ類のそれだ。金属質の筋肉で構成された六本の触腕をうねらせ、そのうちの一本を大樹の枝に引っ掛けたぶら下がっている。触腕の先端には一本ずつの鉤爪があり、それを用いて重量を支えているらしい。

触腕の付け根は金属の殻のような装甲で覆われている。恐らくはあそこが胴体に相当するのだろう。胴体の底には黒い穴が開いており、その周囲を鋭い牙が覆つていた。

大きさは、胴体の直径が一メートルほどで、触腕の長さはそれぞれ三メートル前後。触腕を伸ばせば特機など容易く包み込めるに違いない。

怜次はディスプレイに映る異形に視線を奪われながら、一号機への通信回線を開いた。

「いやら一三二、グレムリンと遭遇。繰り返す。いやら一三三、グレムリンと遭遇。形状は六本腕のヒトデ型。それ以外の情報はまだ何も分かりません」

自分でも驚くほど淡々と報告することが出来た。決して緊張していないわけではない。むしろ、心臓の鼓動が激しすぎて胸が痛むほどに緊迫している。

『グレムリン？ 嘘でしょ？』

通信越しに聞こえる岸田兵長の声は明らかに動搖していた。

「本当です！ 今、田の前に……」

『そんなはずはないよ！ だって……』

食い違つた。次と岸田兵長の会話に、田向中尉の鋭い言葉が割つて入つた。

『いいか、よく聞け！ 標的のグレムリンは歩兵部隊が追撃している！ お前達の前にいる奴は違つ！』

操縦席の空気が凍りつく。

怜次だけでなく月子までもが言葉を失い、思考をフリーズさせた。

『それは未確認の敵だ！』

海星型グレムリンが五本の触腕を同時に振り抜き、大樹の枝を大きくしならせ、その反動で上方へ吹き飛んでいった。

「逃走……！」

月子が機体の頭部を動かし、天を仰がせる。誰が見ても逃亡とか思えない行動だ。

メインカメラに映るグレムリンの影はだんだん小さくなり

「違うつー！ 黒河内、避けろ！」

直滑降で三号機へ襲い掛かつた。

六本の触腕を振り乱して風車のように高速回転しながら、真下に位置する三号機目掛けて急降下。強靭な触腕が大気を掻き乱し、操縦席まで響く轟音を撒き散らす。

咄嗟に飛び退こうとする三号機だったが、左脚の反応が僅かに鈍い。

「脚がつ……！」

高速で唸る触腕が三号機の左脚を打ち据える。衝撃でバランスを崩され、三号機は林道に膝を突いた。

地面上に落丁したグレムリンは手近な木に触腕を絡め、瞬く間に梢の間へ姿を消した。

「どうしたんだ。やつぱり脚に故障が……」

「……今確かめる」

メインカメラが機体の左脚を映し出す。それを見て月子は絶句した。

先ほどの攻撃で刻まれた爪痕の他に、膝関節の付近に刃物で削り取ったような跡が残されている。不調の原因は間違いないこれだった。

怜次の脳裏に、金属を削る耳障りなガリガリという音と、グレム

リンの鋭い牙が重なつて浮かび上がる。

「喰われてたのか……」

怜次の咳きを聞いて、月子が操縦席の壁を殴りつけた。座席越しにも苛立ち焦つていることが見て取れる。これは不味い状況だ。焦燥感に任せて戦つても、碌なことにならないのは明白である。

冷静になるよう注意しようとした矢先、ディスプレイの隅をグレムリンの陰が過ぎつた。

六本の触腕と鉤爪を使って木の幹や枝を掴み、木々の間を滑るよう移動していく。

「一〇の一…」

月子は三号機の右腕を振り向けて三五ミリ機関砲を乱射した。大口径の機関砲弾が枝を吹き飛ばし、樹木に直撃して幹を抉り取る。だが、身軽に動き続けるグレムリンには一発たりとも当たらない。あのグレムリンにとって、立ち並ぶ樹木は絶え間ない移動のための足場であり、同時に砲弾を防ぐ盾でもあるのだ。

「黒河内！ 落ち着け！ 黒河内ッ！」

操縦席に怜次の叫びが響き渡る。このまま連射し続けても当たるはずがない。一度体勢を整えて、狙いを定められる状況で攻撃しなければ。

海星型のグレムリンは不恰好な車輪のよつと木々の間を走破し、砂埃を上げて山道を横断。勢いのまま斜面へ飛び出した。

滑り落ちる刹那、一本の触腕が三号機の足首に絡み、鉤爪を突き立てる。

「なつ……何！」

三号機が一気に斜面へ引きずり寄せられる。グレムリンが残りの触腕を斜面に突つ張つて支えとし、総身の力で三号機を引き落とそうとしているのだ。

月子は機関砲を足元に向けて撃鉄を引いた。無数の砲弾が地面を吹き飛ばし、そのうち数発が触腕を傷つけ破壊する。

千切れた触腕が体液を撒き散らしながら斜面へ引っ込むと同時に、新たな触腕が機関砲の砲身に爪を立てた。

「くつ……」

触腕を振り解こうとした結果、機関砲の砲口が斜面から逸れる。またにその瞬間、斜面の下からグレムリンが身を躍らせた。

「あ」

回避する猶予すら「えられない。

咄嗟にかざした左腕に、グレムリンの鋭い牙が深々と突き刺さる。そこから先は目にも留まらぬ早業だった。四本の触腕が三号機の左腕を何重にも締め上げ、肩から先の自由を完全に奪い取った。間髪入れず、金属を削り碎く不快音が操縦席に反響する。

喰われている。三号機の左腕が無残に食い散らされていく。

「嫌ああああああああ！」

絶叫が不快音を塗り潰す。

余りに唐突の出来事に、怜次はその悲鳴が月子のものであると、すぐには理解することができなかつた。

「黒河内！ どうした！ おい！」

「嫌ああああ！ あああああ！」

怜次は混乱を抑えることができなかつた。こんなにも取り乱した用子など見たことがない。これはもう混乱といつ域ですらない。

恐慌だ。

左腕に喰らいついたグレムリンの背で眼球が光る。触腕の数と同じ六つの目が、ぎょろりと三号機の頭部を睨みつけている。こんなところに目があつたのか。怜次は不思議なぐらいの冷静さでそんなことを思つた。

「きり、と関節を喰い折る音がした。

次の瞬間、グレムリンと三号機の左腕に大穴が穿たれる。

亡骸と化したグレムリンが腕から滑り落ちた後には、肘から先を失つた左腕が残された。

『黒河内！ 久我！ 無事か！』

通信機から日向中尉の声がしたかと思うと、山道の向こうから一号機が姿を現した。その手には機関砲よりずっと細身の単発砲が握られている。

グレムリンと左腕を穿つたのは、あの火砲から放たれた徹甲弾だつたのだろう。

情けない。怜次は心の中で自嘲した。結局、あれこれ叫ぶだけで何も出来なかつた。奇跡的な発想や技術で窮地を抜けるなんてことは起こらずに、救援に駆けつけた味方の手によつて救われる。泣けてくるほどに現実的な決着だ。

「怪我はありません。けど、黒河内が……」

「……私なら……大丈夫だ」

途切れ途切れの言葉が聞こえてくる。月子は前部座席の背もたれに体重を預け、力なく頃垂れているよに見えた。

「んな」と言われてもな……」

「こちらに意識を向けさせよう」と、怜次は月子の右腕に手をかけた。

「触るなっ！」

悲鳴も同然の叫びと共に、強引に腕を振り解かれる。

月二はハ、としだ彦て拂
り返り、気まずそうに視線を伏せた。

「…………ごめん、久我さん」
「いや、俺こそ悪かつた。驚かせたりして

怒る気にはなれなかつた。理由は分からぬが、あんなに怯えてしまつた直後なのだ。些細なことで過剰に反応しても仕方がない。しかも、こひらを振り返つたときの目は明らかに不安と恐怖に満ちていた。

「それにしても……」

怜次は自分の右手を見下ろした。ほんの一瞬の出来事だったので、单なる勘違いだつたのかもしれない。

だが、これだけは確信できる。

月子の右腕を掴んだときに感じた感触は、当分忘れることができないだろう、と

第五話 死体は語る

一〇一年十月六日 津ノ井駐屯地 特機整備工場

い。
戦闘で損傷した左脚部は依然として動きが悪く、足を引きずる歩き方にならざるを得ない。怜次は前部座席のディスプレイを注視して、前方に立つて誘導を続ける整備員との距離に気をつけながら機体を歩かせた。うつかり蹴飛ばしてしまったなんて笑い話にもならな

一人で乗る特機の操縦席は、心なしか広く感じる。後部座席が空席になつてゐるだけなので物理的には大差ないのだが、どうしても何かが足りないような気がしてしまつ。

テイスフレイ起しに整備員が壁際のクレーンの下を指し示すのが見えた。

「あそこか……」

怜次は指示通りの場所に三号機を移動させ、乗降口の開閉レバーを操作した。内蔵モーターが作動し、胸部装甲がゆっくり開いていく。

『岸田さん。二号機の工場への搬入、そろそろ終わります』
『苦労さま。整備隊に引き継いだら、今日は業務終了です』
いいよ。定時はだいぶ過ぎちゃってるけどね』

胸部装甲が全て開き切る。だが、怜次はすぐに降りようとなかった。

整備手順の都合で、二号機は直立したまま停止している。この状態で機体から降りるため、月子のように飛び降りるしか手段がない。なので、整備員が乗降用の脚立を持ってくれるのを待っているのだ。

「……黒河内はどうしますか」

『月子ちゃん？ もう落ち着いてるよ。隊長の判断で先に宿舎に帰らせたけど』

「そうですか。……それなら、よかつた。通信終わります」

安堵の息を吐き、通信機のスイッチを切る。

怜次は首筋の神経系インタフェースと、身体を座席に固定するためのベルトを手早く外し、脚の方から操縦席を這い出た。月子くらいの体格なら前屈みでも楽に出来ることができるのだろうが、怜次の場合はこつしなければ酷く窮屈になってしまつ。

外へ開いた胸部装甲の上にしゃがみ込み、機体の足元に手をやる。ちょうど第三小隊の機体を担当する整備班の班長が、部下に指示を出して脚立を設置させているところだった。班長の作業着には二等軍曹の階級章が縫い付けられている。

一等軍曹とは、田陸上自衛隊の一等陸曹に相当する階級である。自衛軍の階級は自衛隊の階級をそのまま読み替える形で制定されたため、かつての帝国陸軍の階級とは多少のずれが生じている。

「「ひつや」「ひっぴー」「やられたな」

班長は怜次を見上げて豪快に笑つた。見た目からすると四十代に達しているであろう年齢だが、声の張りはかなり力強い。

「すいません、お手数かけます」

怜次が恐縮すると、班長は腕を組んだまま豪快に笑った。

「なあに。これくらいなら今日中に終わるさ。手足をとつかえるだけで充分だ」

三号機には猿政山での戦闘の痕跡があちこちに残されていた。左腕は肘から先を喪失し、左脚にも齧られた傷と爪痕が刻まれている。機体の表面にこびりついた土の汚れもそのまま。山肌に押し付けられた背部と右腕の機関砲は、汚れ具合が特に酷い。

それでも、班長からすれば致命的な故障に含まれない程度のダメージらしい。

「まあ、生きて帰ったんなら万事オーケーってことだ。機体がぶつ壊れるよりも、動かす奴に死なれるほうが厄介だからな。人間の身体は特機みてーに付け替えできないだろ？」

怜次は脚立を降りながら、三号機の左腕に目をやつた。

恐らく、あれを肩から「つそりと外して予備の腕と取り替えるのだろう。それと同じように人間の腕を付け替える 想像できない光景だ。

「いや。不可能ではないよ」

聞いたことのない女の声がした。

怜次は床に降り立つと同時に、声のした方へ向き直った。

「生身の腕を予備として用意するのは至難の業だが、人工物の腕を

造つて代用とする研究は、既に完成したといつても過言ではない。
普及に何年掛かるかは別としてね」

声の主は、スカートスーツの上から白衣を羽織つた妙齢の女だつた。普通なら整備工場というロケーションにそぐわない服装のはずだが、不思議なことに違和感を殆ど感じない。

何者なのだろうかと訝しがる怜次の横で、班長が気もくな態度で女に話し掛けた。

「おお、あんたか。こんな時間にどうしたんだ」

「今後のサンプルとして、喰いちぎられた腕を見せてもらおうと思つてね。場合によつては装甲配置を再検討する必要もある」

「いやあ、あの齧られ方は防ぎようがねえだろ。装甲だらうと筋肉だらうとガリガリ削られてやがる。素材自体を変えねことにはな「装甲材か。そこは私の専門外だな。破損した装甲を貰えないか司令に掛け合つてみるとしよう。専門部署に送れば研究の一助になるかもしれない」

白衣の女と班長が込み合つた立ち話を交わす横で、怜次はぼつりと立ち廻りしていた。

話の内容からすると、白衣の女は特機に関わる専門的な立場の人間らしい。頑固な職人肌で知られる班長が饒舌になつてゐるのは、単に彼女が美人だからなのか、それとも議論の相手として相応しいと認めたからなのか。ともかく、会話に割り込む余地がまるで見当たらない。

岸田兵長は、整備班への引き継ぎを済ませておくよつて言つていた。しかし、当の整備班のリーダーがこれではどうしようもない。

いつそ三号機を預けた時点で引き継ぎ完了とこゝにしてしまおうか。怜次がそんなことを考え始めたとき、白衣の女が怜次へ視線を向けた。

「君が件の三式の操縦士か？」

「え、あ、はい」

どうして分かつたのか。そう聞こうとして、怜次は今の自分の服装を思い出した。特機の操縦士用の戦闘服を着ているのは、工場の中でも自分だけだ。

ここで初めて、怜次は白衣の女の顔を正面から見た。

怜俐という言葉が良く似合う顔立ちに、冷たさすら感じられる理知的な眼差し。まるで氷のような人だと怜次は思った。単に見ているだけなら綺麗だが、実際に触れてみると身を刺す冷たさに驚かされる。そんな印象だ。

「私は技本の空木都子。この駐屯地には新型機の引渡し準備のためにお邪魔している」

技本　技術研究本部。戦車や特機、または歩兵用の装備など、自衛軍で運用される兵器を研究開発する施設だ。あそこから来た人だというなら、特機について詳しいことも頷ける。

「今日の戦闘について話を聞きたいのだが、構わないかな」

空木は口元だけに笑みを浮かべてそう言った。

怜次が返事をしようとした矢先に、工場内のクレーンが大きな音を立てて動き出す。整備対象の特機を吊り上げて作業をしやすくするためのものだ。特機を整備するためには必要不可欠な設備だが、立ち話をするにはつるむすべになり過ぎる。

「……続きは外で話そつ」

空木はそんな主張の提案をした。クレーンの駆動音に紛れて怜次の耳に届かなかつた単語も多いが、言わんとすることは伝わってきた。怜次は空木の提案を受け、工場の外に出ることにした。

外の風景は既に夜の装いを整えていた。黒く染まつた空にはぽつりぽつりと星が浮かび、基地施設の照明がそこかしこで眩しく輝いている。

涼やかな夜風が、今日一日の疲労を押し流してくれぬよつた気がした。

「それで、三号機の腕を喰いちぎつたというグレムリンは、本当にヒトデのような形で間違いないんだな」

「はい。ヒトデと言つても……」

「星型ではなく長い腕を持つ種類。腕の本数は六本で、それらの付け根は厚い殻状の胴体に繋がつてゐる。胴体の下部に円形の口があり、上部には六つの眼球。移動方法には、腕を周囲の物体に絡めて運動する方法と、勢いをつけて車輪のよつに転がつていく方法がある。……そういう奴だらう?」

「……!」

怜次は驚きに言葉を失つた。空木の発言は、まるで現場を見ていたかのように正確で写実的なものだつた。

「そいつはキリスト教圏ではブエル、中国大陸ではリウワンシンと渾名されているものだ。後者は漢字で六つの腕の星と書く。他にも長腕陸星という呼び名も使われているらしい」

空木は淀みなく語り続けている。

喋る内容を途切れなく考え方なんて凄いな、と怜次は変なところに感心していた。

「ブエル……ですか」

「あくまで非公式の呼称だ」

空木は手近なところにあつた小型コンテナに腰を下ろした。コンテナには中身を記してあると思しきシールが貼られていたが、怜次の位置からは暗くてよく読めなかつた。

「ユーラシア大陸の森林での発見報告が多く、東南アジアでは森に入つた人間が襲われる事例も報告されている。力 자체は貧弱だがやたらと敏捷で、地元では厄介者扱いらしい」

空木の語る知識を聞きながら、怜次は小さく首を傾げた。

話の内容はよく理解できる。しかし、ここでそんな話をする意味が分からなかつた。外国での渾名やら出現場所やら、単に蘊蓄を語りたいだけにしか思えないのだ。

空木は怜次の疑問に気付いたのか、蘊蓄語りを切り上げて本論に入つた。

「実を言つと、このタイプのグレムリンは日本列島では全く確認されていないんだ。サンプルが欲しいのもその為でね。ブエルに破壊された特機の装甲は史上二例目、腕そのものが喰いちぎられたサンプルは初めてだ。……ただし、回収不可能だったものを除いてね」

最後の一言に不穏な空気が感じられた。

まるで、残骸を回収することすらできない状況で、あのグレムリンに食い荒らされた特機が存在したかのようだ。

「さつきの質問は、本当にブエルとかいうグレムリンと戦つたのか確かめるため、ですか」

「察しがいいな。私も海外の論文を読んでいるだけで、実物をみた

「ことはないんだ。確認のためには本人に訊ねるのが一番だろ?」

空木は口元だけを動かして笑みを浮かべた。空木都子という人物は、怜次と異なる価値観に住んでいる人間のようだ。人類全体の敵対者であるグレムリンを知的好奇心の対象とし、獲得した知識を何らかの形で発露することに喜びを覚える。怜次の視点からはそんな人物であるように見えた。

「えつと……確か特機の開発の関係者でしたよね？　どうしてそんなにグレムリンのことに詳しいんですか？」

「特機に関わる技術者はグレムリンの研究者と紙一重なのさ。三人に一人はそっち方面にも興味がある人間だと思つたほうがいい」

そう言って、空木は笑つた。

今度は目元にも笑みを浮かべた、人間味のある笑い方だった。

不意に、大型車のエンジン音とヘッドライトの光が近付いてくる。荷台にクレーンを搭載した特別製のトレーラーだ。

その積荷を見て、怜次は思わず息を呑んだ。

細長い胴体。そこから垂直に生えた六本の脚。金属の怪物　グレムリン。

無論、生きた個体ではない。全身に銃弾を打ち込まれ、砲弾らしきもので顔面を吹き飛ばされたその有様は、一目で生死を理解させるには充分過ぎる。

「あれは大して珍しくないタイプだな」

空木がトレーラーを目で追いながら呟いた。

「資料としての価値もないから、処理工場で特機用の材料に加工するものが関の山だ」

先ほどの熱弁とは打って変わつて、興味の欠片も感じられない態度だ。本当に、あのグレムリンに対して微塵の関心も抱いていないのだろう。

グレムリンの死骸を積んだトレーラーは、徐行速度で整備工場の前を通過すると、少し離れたところにある別の工場の前で停車した。エンジン音が止み、重苦しい空気が辺りを包み込む。

それを吹き飛ばしたのは、空氣を重くした張本人である空木自身だった。

「さて、引き止めてしまつて悪かつた。私はそろそろ帰るとするよ」

空木はコンテナから立ち上がり、軍事施設の明かりが集まつてゐる方へ歩き出した。その途中で唐突に足を止め、怜次に向かつて振り返る。

「私は半月ほどここに滞在する予定だ。また興味深い出来事が起つたら、是非とも教えてくれないか」

予期せぬ要請に、怜次はすぐ口に返答することができなかつた。

「……そんなこと起つませんよ」

「いいや。初陣で国内初の貴重な戦闘を経験したんだろ？ そういう奴のところには、似たような出来事が集まつてくるものだ」

一体何が面白いのか、空木は口元を歪めて笑みを形作つてゐる。怜次は言い返そつと言葉を搜し、やがて諦めた。何を言つても無駄な気がしたのだ。

空木にとつて興味深い出来事が次々と集まつてくる 縁起でもない。まるで呪いのような予言ではないか。

そんなことになつたら、円子まで巻き込まれてしまつといつのこと。

一一〇一一年 十月六日 津ノ井駐屯地 第三小隊格納庫

『岸田さん。三号機の工場への搬入、そろそろ終わります』
『じ』苦労さま。整備隊に引き継いだら、今日は業務終了つてことで
いいよ。『定時はだいぶ過ぎちやつてるけどね』

岸田兵長 岸田佐代子は、一号機の通信機を用いて三号機の久
我一等兵と通信を交わしていた。

とはいへ、操縦席に乗り込んでいるわけではない。一号機は操縦
士の乗降のためにしゃがんでおり、胸部装甲を開放して内側のステ
ップを露わにしている。佐代子はそのステップを椅子代わりにして、
操縦席から引っ張り出したマイクに向かつて喋りかけていた。

『……黒河内はどうしますか』

操縦席の通信機から、久我一等兵の不安そうな声が聞こえてくる。
どうやらパートナーの容態が心配で仕方がないようだ。佐代子は微
笑ましくに頬が緩むのを堪えられなかつた。相手のことを気遣える
のは、ちゃんとした人間関係を築けている証明だ。

「円子ちゃん？ もう落ち着いてるよ。隊長の判断で先に宿舎に帰
らせたけど」

『そうですか。……それなら、よかつた。通信終わります』

雑音を発しつつ通信が途切れる。

佐代子はほつと胸を撫で下ろした。怜次の精神状態は安定しているようだ。

初めての戦いで窮地に追い詰められ、心が折れてはしないかと心配だったが、杞憂に終わって何よりだった。彼にとつては手厳しい初陣だったかもしれないが、長い目で見ればは貴重な経験になるはずである。

「怜次君は大丈夫。用子ちゃんは……仕方がないよね。うん、あれは仕方がない。もう落ち着いてるから平気だとは思つね」

佐代子は「」に言い聞かせるように咳いた。

誰に見せるでもないその表情は、若者 それどころか少年や少女達の生命を預かる立場としての責任感に満ちていた。

「虎彦隊長。二号機が工場に着いたみたいですよ」

ぱつと表情を緩め、通信の終わりを待つているはずの小隊長へ振り返る。

だが、当の虎彦は刷り立ての報告書を睨んで立り去りしていた。

「どうかしたんですか？」

「ん……兵長か。今回の報告で気になるところがあつてね」

虎彦が黒髪交じりの白髪をくしゃりと搔き乱す。これは腑に落ちないことがあるときの、虎彦の癖だった。

佐代子は背伸びをして報告書を覗き込んだ。

「気になるって、用子ちゃん達が戦つたグレムロンのことへ

「ああ……」

報告書の内容は、三号機が戦つた未確認のグレムリンについて記されたものだつた。怜次の証言とカメラの映像記録を元に、詳細な記録が綴られている。報告資料としては充分な出来になつてゐるはずである。

それでも、虎彦は納得できないといつ表情を顔に貼り付けたままだ。

「こいつは日本にいなーばずの種類だ」

佐代子は暫し目を瞬かせ、ああ、と納得した。国内に出現するグレムリンの資料には一通り目を通してゐるが、こんなタイプは見たことがない。

「といつことは、新種？」

「いや、今まで日本で確認されていないだけだ」

虎彦が奥歯を噛み締める音がした。

佐代子は視線をさり気なく虎彦へ移す。困惑、疑念、混乱、そのいずれでもない表情だ。既に虎彦は自分の中で結論を出していて、それを確信しているのだろう。

ただ、その結論がどうしても納得できないだけで。

「岡山の研究所に連絡を取らう。あそこならグレムリンの組成物質の分析ができる」

「研究所で分析すれば、日本のどこにいた奴なのか判別できるかもしけないしね」

二十数年に渡る戦いの間、人類はグレムリンの研究を継続的かつ精力的に行つてきた。その結果、一体のグレムリンの肉体から組成物質を採取し、それらを比較することで、一体が同じ群れに属する

個体か否かを判定することができるようになっていた。

この技術を応用すれば、巣や群れから離れたところで発見されたグレムリンが、どの群れに属する個体なのか判別することも不可能ではない。

「……調査対象は日本のグレムリンじゃない。上海戦役で持ち帰った死骸のサンプルだ」

「上海戦役……！」

佐代子の表情が急激にこわばる。

それと同時に、佐代子もまた、虎彦が導き出した結論に辿り着く。

「出来ることなら外れて欲しい仮説なんだが

虎彦は白髪を搔き揚げた。

地獄の上海戦役

自衛軍最大の敗北

「師団を壊滅させた上海のグレムリン……あんなのが日本に渡つてくるなんてな」

第六話 戰場は遙か

一一〇一一年 十月十一日 津ノ井駐屯地 第一中隊将校室

『 次の一ニュースです。先ほど防衛省において会見が行われ、本日未明に対馬へ上陸した金属食性異星生物の勢力は午前七時を以つて壊滅し、同地における戦闘は終了したとの発表がされました』

虎彦はテレビから流れるニュースの音声を聞き流しながら、ファイル閉じの資料に目を通していった。表題は特機小隊の訓練方針資料。第三特機群司令官の、天野大佐の名義で作成された資料である。斜め向かいの席に座る銀縁眼鏡の士官が、ぼうとした様子でニュースに視線を移した。

「気軽に言つちやつてくれるよな。対馬つたら国内屈指の激戦区じゃねえか。大勢死んだに決まってるのに、どれだけ被害が出たのかはノータッチとはね」

どこか眠たげな目だが、焦点はしっかりとテレビの画面に合わさつている。

画面上の一ニュースキャスターが原稿をめくる。どうやら対馬における戦闘の報道はこれで終わりらしい。

「やっぱり被害甚大みたいだな」
「佐々木。やることは終わつたのか?」

別の士官が銀縁眼鏡の士官に口を挟む。どちらも虎彦と同じ中尉の階級章をつけている。

中尉とは、陸上自衛軍では一般的に小隊長を任せられる階級だ。

佐々木と呼ばれた銀縁眼鏡の中尉は第一小隊の小隊長で、もう一人の硬い雰囲気の中尉は、石川といふ名前の第一小隊の小隊長である。少尉も小隊を率いることのある階級だが、こひらは士官学校を卒業して間もない新入士官という色合いが強い。

「一通り終わつてゐるよ。今は情報収集の時間つてことで」

「情報統制された二コースなど役に立たんだろう。朝鮮半島南端と長江河口付近の都市が奴らの巣窟になつてゐることすら、碌に報じていらないんだからな。後者は東シナ海があるからいといとして、前者は対馬と壱岐に大部隊を配置しなければならないほどの脅威だとうのに」

歴史上、対馬は国外との戦いで重要な役割を担つてきた。それは現代においても変わつていてない。

佐々木中尉は石川中尉の高説に生返事を返し、虎彦の方へ目をやつた。

「日向、何読んでんだ？」

「ん？ 訓練内容の方針資料だよ」

そう言つて、虎彦はファイルを閉じた。

「何せ隊員の半分が子供で、しかもその殆どが女子だからな。きつい訓練なんかさせたら体を壊しちまう。……つたく。俺達は女子高の体育教師じやないんだぞ」

「の日は暑下がりになつても涼しいままだつた。

青空には雲ひとつ浮かんでおらず、気温もそこまで高くない。湿度も高すぎず低すぎず、適切な状態を保ち続けている。そのため、かなり快適な気候だといえるだろ。一月前までの残暑の不快さが嘘のようだ。

しかしそんな涼やかな空の下、第三小隊の面々は地味な色のジャージに白いTシャツという格好で、黙々とランニングを続けていた。

「速度が落ちているぞ！ 歩くな、走れ！」

最後尾を走る猪熊曹長が、走りながらとは思えないほどの大聲を張り上げている。そのすぐ手前を怜次と翔也が走つている。そして前方数メートル先では、女子の集団が一塊になつて脚を動かしていた。

これは怜次と翔也の一人が遅れているためではない。先行しすぎて追い抜いてしまいそこのなのだ。

ランニングは自衛軍の体力トレーニング　軍では体力練成と呼ばれる訓練の中でも一般的な方式だ。もちろん、通常であれば日課としてこなせる程度の距離なのだが、十五やそいらの少女には課題が厳しすぎたようだ。

「ほら、追いつかれちゃうよ。頑張れ」

岸田兵長は集団の一番後ろの位置を維持しながら、遅れ気味になつている玲奈と亜由美を応援していた。同じ距離を走つていても関わらず、玲奈達よりも遙かに余裕を残している。一体あの小さな身体の何処にこれだけの体力を隠しているのだろうか。

「……ハア……亜由美ちゃん……ハア……今何周目……？」「はあ……はあ……話しかけないで……余計に疲れる……」

亜由美は前を向いたまま、玲奈の泣き言に答えていた。横を向く余裕など残つていないうらしい。棒のように硬直した手足の悲鳴と、焼け付くような喉の痛みを堪えるだけで精一杯なのだろう。

「女子はラスト一周！　男子は一週半だ！」

怜次達の背後で猪熊曹長が声を張り上げる。プロの軍人だけあって凄いスタミナ

だと感心してしまう。怜次は前方を走る少女達ほど疲れてはいないが、それでも大声を出すような余力はない。

「久我！　長谷川！　手を抜くんじゃない！」

猪熊曹長にびやかれて、怜次と翔也は慌てて速度を上げた。必然的に、前を走る玲奈と亜由美を追い抜いて、集団の先頭を行く月子の横に差し掛かる。

月子は自衛軍制式のジャージを上下共に着用し、土で汚れたスニーカーを履いていた。

さすがに皮手袋は嵌めていない。必要以上に汗をかいてしまうからだろう。だが、ジャージの袖から覗く右手は白い包帯に覆われたままだつた。

「…………」

隣を通り過ぎる直前、怜次は月子の表情を覗き見た。

粒のような汗が額や首筋を伝い落ち、苦しそうな呼吸を繰り返している。それでも、月子は真剣に前を見据え続けていた。基礎トレ

一ーングだからといつて気を抜くような態度は微塵も感じられない。怜次は月子に掛けようとしていた励ましの言葉を飲み込んだ。下手な励ましは却つて彼女を侮辱してしまう。そんな気がしたのだ。だが、怜次の先を走る翔也は、そういうことを考える性格ではなかつたらしい。

「なんだ、疲れてんのか？ 無茶すんなよ

「……っ！」

翔也としては月子を気遣つての発言だったのかもしれない。しかし、この場に限れば完全に逆効果であった。

月子が急にピッチを上げた。両腕を大きく振つて加速し、翔也との距離を一気に詰める。

「おおつ？」

翔也が驚いて道を開ける。月子はそのまま翔也を追い抜いて、ランニングを完走してしまった。男女双方含めての一一番乗りだ。

その直後、月子は地面に崩れ落ちるように座り込んだ。

「お、おい！」

怜次は慌てて月子のところへ駆け寄った。

「私のことは……いいから……」

俯いたまま肩で息をする月子。長距離を駆け足で走つていた上に、あんな短距離走みたいなダッシュをすれば疲れ果てるのが当然だ。怜次は口ごもり、月子を見下ろしてのことしか出来なかつた。どんな言葉を掛ければいいのか分からぬ。慰めも応援も、この場

では相応しくないように思われた。

「久我あ！ 立ち止まるな！」

猪熊曹長の怒号がグラウンドに響き渡る。

駆けつけてきた岸田兵長が、用子の左肩に手を置いて怜次を見上げた。

「ijiは私に任せと、わざと終わらせやこなさい」「は……はーー！」

怜次は踵を返して駆け出した。

いつの間にか先を走っていた翔也を抜き去り、一一番乗りでランニングを完走する。無茶な走りをした用子を心配しておきながら、自分も似たようなことをしてしまつとは。

「久我さん。あいつ、何で急に走り出しだんですかね」

苦笑しながら足を止めた怜次の後ろで、翔也が小声で疑問を口にする。多少の汗

をかいてはいるが、そこまで疲労している様子はなかつた。

もし用子のことを何も知らなければ、単なる強がりな子だと答えるだけで済んだのかもしれない。しかし、怜次は見てしまったのだ。グレムリンに特機の腕を喰われ、尋常ではなく狂乱する用子の姿を。その姿を目にしておきながら、あれをただの強がりだと思い込める図々しさを、怜次は持ち合わせていかつた。

「……俺に分かるわけないだろ」

姑息な返事をするとしかできない。

月子から一十秒ほど遅れ、亜由美と玲奈もランニングの課題を終わらせた。ジャージが汚れるのも構わず地面にぺたんと座り、荒い呼吸で酸素を求める。玲奈に至ってはグラウンドに大の字になつて横たわつている。

「はあ、はあ……ふう」

「もう駄目、動けない……」

現在グラウンドを使つてゐるのは第三小隊だけだが、周辺には他の隊の隊員もちらほらと見える。当然ながら、彼らは亜由美達のような特別採用の年少兵ではない。規定通りの手段で入隊した正規の軍人ばかりだ。

周辺の兵達は、時折仕事の手を休めては亜由美達のことを盗み見ていた。年少兵が珍しいのだろうか。ランニング中に感じていた視線も、きっと彼らのものだつたに違いない。

ふと、さつきまで休んでいた月子が、じちらに向かつて歩いてくるのが見えた。

「黒河内……」

「心配はしなくていい。私なら大丈夫だから」

すれ違ひ様にそう囁き、月子はグラウンドの外へと歩き去つていった。

翔也がその後姿を見やりながら、不可解そうに眉をひそめる。

「何なんだ、ありや。年上に敬語の一つも使えないのかよ」

体育会系気質の翔也にとつて、月子の態度は許容しがたいものであるらしい。

その価値観自体は怜次も理解できる。だが、この場合は少し事情

が異なる気がした。丹子の態度から受けた違和感とでも表現すればいいのだろうか。相手に敬意を払わないとか、高圧的に接するとか、そんな類の意図は感じられないのだ。

むしろ、相手と対等にあらうと背伸びをしている。そんな印象さえ受けてしまつ。

「……考えすぎかもな
「何か言つたツスか？」

独り言のつもりだが、つい口に出してしまつていたらしい。
「いや、何でもない。それと黒河内のことだけ、俺は別に気にしてないから、あまり騒ぎ立てるなよ」

適当な言葉でその場を誤魔化して、怜次は会話を切り上げた。
少し歩くと、猪熊曹長と岸田兵長が何やら話し合つてゐるところに出くわした。どちらも怜次が近くにいることに気付いていないらしい。猪熊曹長に至つては、普段なら新兵達の前では決して見せない砕けた態度で、気の緩んだ声を漏らしていた。

「むう、いかんな。ノルマを厳しくし過ぎたか
「だから言つたじやないです。いきなりランニングの距離を五割増にしちやつたらバテるに決まつてるでしょう」
「久我くらいの奴らを鍛えるのは慣れているんだが、あんな子供はどうもな……経験がなくて加減が分からん」

どうやら、猪熊曹長が体力練成のメニューの件で岸田兵長に文句を言わせているようだ。岸田兵長は猪熊曹長より階級も年齢も下であるはずなのに、ああして腰に手を当てて叱つてゐる様が妙に似合つていた。

「次から女の子の子の訓練内容は私に任せてくれださい。怜次君と翔也君のメニューはお願いしますから」

「…………」

猪熊曹長は拒否も反論もしなかつた。きっと、そうするのがいいと自分でも思つてしまつたのだろう。

不意に岸田兵長が振り返る。

「あ、怜次君」

兵長の声を聞いて、猪熊曹長がじろりと怜次を睨んだ。たつたそれだけのことと、怜次は怒鳴りつけられたのと同じくらいに怯んでしまう。

「午前中の課業はまだ終わっていないだろう。早く汗を洗い流して着替えて来い。分かつたら駆け足！」

怒鳴り声を最後まで聞くより先に、怜次は一目散に走り出していた。

しばらくそのまま走った後で、充分に距離が離れたのを確かめて、駆け足から早足程度にまで減速する。

猪熊曹長は生糸の下士官だ。大抵の兵は声を聞いただけで姿勢を正してしまつくらいの雰囲気がある。……怜次も含め。

「お疲れ様です、怜次さん」

グラウンドを出たところで玲奈が話しかけてきた。色素の薄い前髪を額に貼り付けたまま、人好きのする笑顔を浮かべている。ただ微笑んでいるだけで他人を和ませられるのは、なかなか稀有な才能

ではないだろうか。

玲奈はジャージの上を小脇に抱え、涼しげな白いシャツを秋風に晒していた。怜次はその涼しげな格好が羨ましくなって、ジャージのファスナーを開け放つてみた。

「災難だったな、あんなに走らされて。曹長も加減を間違えたとか言つてたぞ」

「あはは。確かにくたくたですよ」

玲奈は体の前で指を絡め、腕をぐっと前に伸ばした。汗で湿つた白いシャツが線の細い体格を浮かび上がらせる。

「でも、やっぱり体力つけなきゃ強くなれないじゃないですか。それを考えたら、多少のことは頑張れます」

「そつか……しつかりしてるな」

年少兵として軍に入った以上、彼女も何らかの重い事情を抱えているはずなのだ。それを微塵も感じさせないどころか、絶え間なく笑顔をふりまき続け、辛い訓練にも耐える覚悟をも固めているのである。

「そんなことないですよ。私だって……」

「委員長つて意外と体力ないんだな」

玲奈の声が翔也の大声に搔き消されてしまった。振り返つて見ると、ふらふらになつてている畠由美の横をゆっくりと歩いている翔也の姿があつた。

「ねえ……何でそんなに……平気そうなのよ」

亜由美は今にも倒れそうな様子だ。恐らく とこより間違いない、第三小隊で最も体力がない隊員は彼女に間違いない。

そんな亜由美とは対照的に、翔也の顔には疲労の色が殆ど見られなかつた。

「ん? 何でつて、中学んとき陸上部で長距離やつてたからな。言つてなかつけ?」

けろつとした顔でそう言われ、亜由美はがくりと肩を落とした。運動し慣れているようだとは思つていたが、長距離を走ることが本領だつたというなり、あの程度のランニングで音を上げないのも納得である。

「なあ、榎。この隊に来る前の教育隊ではどれくらい訓練してたんだ?」

「んー……ランニングの距離はさつきの六割か七割くらいでしちゃうか。亜由美ちゃんとは隊が違つたので私と同じだとは言い切れませんけど。少ないですか?」

「俺の場合と比べたらかなり少ないな。もつとも、俺みたいに高校卒業してから入隊した連中ばかりだつたけどさ」

やはり教育隊も中学を卒業したばかりの少年少女を扱いかねていたのだろう。今年入隊した年少兵は特別採用の第一期といつにとなる。ノウハウなど持ち合わせているわけがない。

教育隊の教官も、猪熊曹長と同じ心境だつたはずである。

「やっぱりみんな大変なんだなあ」

玲奈がしみじみとした口調でそう呟いた。

コラム・世界における戦争の現状

蓬萊書院発行 高等学校現代社会教科書より抜粋

(前略)

金属食性異星生物は、一九八一年に地球へ降り注いだ彗星の破片から発生したと考えられている。これらの破片は世界中に落下したため、金属食性異星生物の発生地点も世界中に分散してしまった。

(中略)

現在の学説では、この生物は蟻や蜂のような生態をしているとされている。

『女王』を中心とした群れが巣を構え、群れが大きくなると、新たに『女王』が群れを引き連れて移動し、移動先に巣を作る。このサイクルの繰り返しによって、異星生物は次々と生息域を広げていく。また、巣の周辺の餌が足されば、群れは巣を棄てて大移動を開始する。

軍事的には、巣や女王を中心とした縄張りの推定範囲を『敵勢力地域』と呼称している。

こうした生態のため、人間同士の戦争とは異なり、地球上のどこからどこまでが異星生物に侵略されているか断定することは困難である。例え一度人間が駆逐された場所でも、群れを維持できる環境がなくなれば、その群れは即座に別の場所へ移動してしまう。また、他の群れとの繩張り争いに敗れて移住を余儀なくされるケースもあるとされる。

(中略)

異星生物との戦いにおいては、発見された巣や群れを一つずつ撲滅していく以外の撃退手段が存在しないとされている。一つ一つの巣や群れが完全に独立しており、異星生物すべてを統率するリーダーが存在しないためである。専門家の間では、異性生物との戦いは戦争ではなく世界規模の害獣駆除に過ぎないと表現されることもある。

現代の戦争はこうした特殊性を帯びているが、被害を受けやすい地域の傾向は明らかになっている。多くの金属製品が存在する都市や、金属資源が埋まつた鉱床等である。大陸国家はこれらの条件を満たしやすく、逆にわが国のような島国は

(この行からページの余白の最後まで、誤字脱字の酷い殴り書きの文章が記されている)

こんな奴ら消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ

消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ

きえりきえりきえりきえりきえりきえりきえりきえりき
えりきえり

死ね死ね死ねしね消えてしまえ死ねシネシネしねしね消えてし
まえ死ね死ね死ね

消えろ消えろ死んじやえ死んやえ消えてしまえいなくなればいいんだ
来なけばよかつたんだ何で來たんだ何で何で何で何でどうし
てどうしてどうして

(以下、最後の一文まで判読不能)

おとおさんをかえせ おかあさんをかえせ ともくんをかえせ

一一〇一一年 十月十一日 津ノ井駐屯地 隊舎一階廊下

「…………ッ！」

怜次は反射的に教科書を閉じた。

背筋に冷たい汗が流れる。心臓が爆発しそうなほどに高鳴つてい
る。初陣のときでさえ、こんなに嫌な震えは感じなかつた。

体力練成が終わり、シャワーを浴びて制服に着替え、次の課業に
向かおうとした直後のことだつた。怜次は廊下に落ちていた本を何
気なく拾い上げてしまつた。「高等学校現代社会教科書」という、
蓬萊書院が発行している教科書である。

落し物かと思い、どこかに名前が書いていないか調べていると、
怜次の手の中でとあるページがひとりでに開いたのだ。恐らくはそ
のページに開き癖が付いていたのだろう。繰り返し繰り返し癖が付
くまで開いていたせいで。

「何だつたんだ、あの落書きは……」

「おい、そこで何をしている」

急に声を掛けられ、怜次は飛び上がりそつなくらいに驚いた。

恐る恐る振り返ると、制服姿の猪熊曹長が怪訝そうな表情でこち
らを見やつていた。

「」たなものが廊下に落ちていたんです。名前は書いてありません」

怜次は説明の手間を省くために拾った教科書を見せた。すると、猪熊曹長はその表紙を見ただけで、納得した様子で頷いた。

「年少兵が使つてゐる教科書じやないか。ビリの隊の奴が落としたんだ」

「……年少兵？ 黒河内一等兵達のことですか？」

そう訊ねてから、怜次は年少兵制度 特別採用制度の意図を思い出す。

あの制度は、戦争の影響で学校に通いにくくなつた子供に公共機関での職を与えると共に、通信制高校等の形で教育を施すことを目的としている。つまり、彼らが教科書を持っているのは極めて当たり前のことなのである。

「あいつらは通信制高校の生徒でもあるからな。教科書くらい持つてるだろ」

曹長は怜次が怜次が気付いた事実と同じ内容を説明した。

「名前が書いてないなら遺失物として届けて來い」

「いえ、持ち主を探してみます。駐屯地の年少兵は人数が限られて いますから」

咄嗟にそんな言葉が口を突いて出た。

遺失物として届ければ、必然的に担当者もあのページを見ることになるはずだ。果たして、この教科書の持ち主はそれを望むだらうか。残酷なまでに赤裸々な告白を、これ以上他人に覗き見られるな

んて。

ただの余計なお節介かもしれないが、怜次はその考えを無視することができなかつた。

「確かに虱潰しで探すのは楽だが……」

猪熊曹長が腕時計に視線を落とす。

「次の課業まで三十分。格納庫で特機の操縦席周りの調整だつたな。それまでに切り上げる。間に合わないなら遺失物管理の担当に届けろ」

「了解しました」

怜次は姿勢を正して敬礼に代えた。

教科書が落ちていたのは廊下の真ん中だつた。そんな目立つところに落ちていて、なおかつ怜次が見つけるまで拾われていなかつたところ」とは、落とされてからあまり時間が経つていなかつたのだと推測できる。一時間も一時間も前の出来事なら、とつぐに他の通行人が見つけているはずである。

隊舎で教科書を広げて勉強できる場所といえば、自分の部屋か資格取得の勉強等に使われる自習室くらいだ。それを考へると、教科書を落としたタイミングは自室から自習室へ向かう途中、またはその帰りである可能性が高い。

まずは自習室から調べてみるべきだ。怜次はそう考へ、自習室へ向かおうとした。

その前にふと足を止め、猪熊曹長の方へ振り返る。

「曹長。ひとつ質問があるのでですが、我々の隊が前線に投入される可能性はありますのでしょうか」

「意外と心配性だな」

猪熊曹長が口の端を上げる。

「日本国内における激戦区は北海道と北九州だ。どちらも大陸からの侵攻を防ぐ防波堤になっている。次に戦闘が頻発するのは太平洋側の沿岸部だな。ミクロネシアや東南アジアを転々とする群れが定期的に上陸を試みては、海上自衛軍の艦隊と陸上自衛軍の迎撃部隊に撃退され続いている」

ここで暫しの間が入った。

怜次が話について来れていることを確認してから、猪熊曹長は続きを喋り始める。

「だから、第三特機群が前線に出るとすれば、四国の太平洋側高知県や徳島県に大規模な敵勢力が上陸した場合くらいだ。それに万が一そんな事態になつても、年少兵を抱えた部隊を最前線に送るとは思えん」

「……そうですか。ありがとうございます」

怜次は教科書を抱える腕に力を込めた。

この教科書の持ち主は、どんな気持ちで戦況を見つめているのだろう。戦線から離れた場所で過ごせて幸運だと思っているのだろうか。それとも、敵に直接手を下せないことを歯がゆく感じているのだろうか。

鎖で縛られた扉が眼前に立ち塞がっているようで、怜次はそれ以上何も言えなかつた。

第七話 チルドレン・イン・ザ・ウォー

一一〇一一年 十月十一日 津ノ井駐屯地 自習室

駐屯地には自習室と呼ばれる部屋が設けられている。隊舎の施設としては珍しくエアコンが常時起動している部屋で、消灯時間までなら暑い夏や寒い冬でも快適に過ごすことができる場所である。

普段は兵士達が資格試験の勉強などのために使う部屋なのだが、今日に限っては少しばかり趣が違っていた。

「あれ、全員揃つて何やつてんだ」

自習室に入るなり、怜次は意外そうな声を上げた。自習室の机の一つを第三小隊の面々が占領している。翔也に玲奈、亜由美に月子と、隊の年少兵が揃い踏みだつた。机の上にはテキストと大学ノートが広げられている。内容は数学……のよう見えた。

怜次以外にとつても奇怪な光景なのだろう。居合わせた他の隊の隊員もしきりに視線を向けていた。利用者があまりいない時間帯なので人数こそ多くないが、少なからぬ隊員がこちらの様子をさり気なく窺つている。

体力練成のときもそうだったが、この小隊は他の隊員からの注目を集めやすいらしい。当たり前といえば当たり前ではあるのだが。四人を代表して、亜由美が怜次の疑問に答えた。

「通信制高校の課題です。特別採用で自衛軍に入った人は、みんなそうします」

「ちなみに学費はタダっす」

翔也が聞かれていない情報を付け加える。

ランニングが終わってから次の課業までは一時間も空いていない。そんな隙間の時間を使ってまで勉強をするのは素直に賞賛の対象だと思えた。

「何これ、全然分かんない……亜由美ちゃん」

「さつきもその公式で詰まつてなかつた?」

苦戦して頭を抱える翔也と玲奈。自身は軽々と解き進めながら、二人に問題の解き方を教える亜由美。独りで黙々と解答欄を埋める月子。エアコンが吐き出す涼風の下、シャーペンの芯が紙面を擦る音が妙に大きく聞こえていた。

そのとき、自習室のドアが騒々しく開け放たれた。

「ああー、やつぱりここは快適でいいなー」

集中力を容赦なくぶつ切りにする黄色い声で、岸田兵長が来襲した。ここが『自習室』であるという重大な事実をなかつたことにしそうな勢いだ。軍服の襟元をぱたぱたと動かして、冷氣をシャツと肌の間に送り込みながら、岸田兵長は四人と同じ机に腰掛けた。亜由美はあからさまに遠慮して欲しそうな顔になった。亜由美にとつて、こういう気の抜けた人物はすこぶる相性が悪いらしい。無論、岸田兵長は亜由美の無言の抗議を軽やかに無視している。

「お勉強? それなら私が教えてあげるのに
「結構です」

掛けの言葉も自然と刺々しくなつていて。だが岸田兵長には文字通り蛙の面に水だつたらしく、一向に堪える様子もなくだらけ続けていた。

「で、怜次君はどひして」「で、

岸田兵長にそつ言われて、怜次は自分がここに来た理由を思い出す。

「そつだ。廊下にこんな教科書が落ちてたんだけど、誰か知らないか

四人が机に広げた教科書とノートを見渡す。月子の手元に積み重ねられた教科書の中に、怜次が持つているものと同じ本が混ざっているのが見えた。

怜次は軽く首を傾げた。かなり失礼な妄想ではあるのだが、もしかしたら月子の使つている教科書なのかもしれないと思つ気持ちがあつた。予備を持っているとは考えにくく、新たに調達するには気が早い。

やはりただの考え方だつたのだろう。そつ考へて、怜次は自習室から出るため振り返つとした。

「あ！ それ、私のです」
「え」

細い指が怜次の手から教科書を抜き取つた。
呆然とする怜次の目の前で、玲奈が可愛らしい笑顔を浮かべていた。

「やつぱり廊下に落としてたんですね。ありがとうございます、

偽りのない感謝を込めた言葉と。

「いひちで勉強するときは、教科書を一通り持つてくるよつとして

るんですけど」

相変わらずの人好きがする笑顔で。

「失くしたのかと思って焦っちゃいました」

怜次に向かつて微笑んでいた。

「……本当に前なのか？」

「そうですよ？ ほら」

玲奈は件の教科書と別の教科書を一緒に見せてきた。どちらも裏表紙の隅に手書きのマークらしきものが描かれている。形も癖もそつくりで、同一人物が描いたことは間違いない。恐らく、これは玲奈の所有している教科書全てに記入されているマークなのだろう。怜次が言葉に窮していると、玲奈の手の上で、開き癖の付いたペーパーが浮き上がる。

そして、殴り書きの文字が

「…………！」

「あつ…………」

硬直する怜次と裏腹に、玲奈は至って普通の態度で教科書を閉じ直す。まずいものを見られてしまつたという態度は微塵も感じられなかつた。

「他の箇には言わないで下さいね。恥ずかしいから……」

玲奈は一冊の教科書を片手で抱え、気恥ずかしそうに頬を搔いた。何かがおかしい。何かが致命的にずれている。怜次は得体の知

れない違和感に襲われ、僅かに退いた。

周囲の面子は、怜次が言葉を失っている原因も、玲奈が照れている理由も知らないままに、思い思いの会話を続けていた。

「あれえ……なんで間違つてんだる」

「ちょっと見せなさい。どうせ公式でも間違つて覚えてるんでしょ
「飲み物でも買おうと思つんだけど、何か要るかい？」

「あ、じゃあ俺コーラ」

「私は……せつかくだから烏龍茶でもお願ひ」

数学の問題が解けずに頭を捻っている翔也と、彼に解き方を教えている亜由美。そして、あくまでマイペースに振る舞つている月子。誰一人として怜次の戸惑いには気が付いていないようだ。

唯一、岸田兵長が怪訝そうに怜次を見やつたのを除いて。

月子は紙コップ式の自動販売機から飲み物を購入し、翔也と亜由美に渡して代金を受け取ると、元の席に戻つて再び勉強に集中し始めた。

その右手の傍では、淹れたてのミルク「コーヒー」が白い湯気を立てていた。

「私も何か飲もつと

玲奈が自動販売機に駆け寄り、商品を品定めし始めた。立ち尽くす怜次に岸田兵長が声を掛けた。

「どうかしたの？ 顔色悪いけど

「……なんでも、ないです」

言えるわけがない。

何に驚き、どうしてたじろいでしまったのかなど。

怜次の意図を汲んでくれたのか、岸田兵長はそれ以上追求しようとはしなかった。

「でも、どうして……」

岸田兵長に届かない程度の小声で呟く。

怜次は、あの殴り書きを『他人に見せてはいけないモノ』『他人に見られたくはないモノ』なのだと考えていた。心の底からの呪詛と、覗き見られるべきではない本音を書き連ねたものだと、勝手に思い込んでいた。

だからこそ、これ以上他人に見られないように自分の手で返そうとしたのだ。

しかし、現実は明らかにズレていた。

落とし主はいつも笑顔を絶やさない神玲奈で、殴り書きを見られても、感じるのは憎悪や嫌悪の類ではなく単なる羞恥。例えるなら日記帳を誤つて見られた場合と大差ない反応でしかなかつた。

怜次は眩暈らしきものを感じ、自習室の壁にもたれ掛かつた。

「気持ちの整理をつけたつてことならいいんだけど……」

筆舌に尽くし難い感情に区切りをつけ、結果として笑顔を見せられるようになつたというなら、むしろ歓迎すべき状況だと言えるだろう。恥ずかしそうにしていたのも、昔の激情の痕跡を見られたためだと考えれば何の不思議もない。

だが、仮にそうではなかつたら。

教科書の殴り書きが、今も変わらぬ玲奈の本心だとしたら。あの笑顔にどんな意味を見出せばいいというのだろうか。

「へそつ、また間違えた」

翔也が苛立つた様子で消しゴムを動かしている。しかし勢い余ったのか、消しゴムの摩擦でノートのページを破いてしまった。

「しまった……」

「何やつてるのよ」

「やつちまつたもんは仕方ねえだろ」

翔也は破れてしまつたページを切り離し、くしゃくしゃに丸めてゴミ箱へ放り投げた。だが、それは目的の箱まで届かず、少し手前に落ちてしまつた。

「まつたく、前も同じことしてなかつた?」

「……うるさいな」

翔也はおもむろに席を立ち、肩を揺らしながらゴミ箱のところへ歩いていった。その近くには月子が座つてゐるのだが、拾つて捨ててくれたとは頼まなかつたのは、失敗の理由が不恰好過ぎたからだろう。

落ちていた紙屑を捨て、月子の隣を通りて席に戻つたところで、翔也の身体が月子の右肘にぶつかった。

「あつ……」

「……おつと」

当たつた衝撃で右腕が大きく動き、紙コップ入りのミルクコーヒーに接触。

揺れた拍子に中身がこぼれて月子の右手にこぼしあつと掛けた。

「危ないな。ノートに掛かつたらどうするんだ」

月子は素早くノートを避けると、大して慌てた様子もなく右腕の袖を捲り上げた。「一ヒー色に汚れた右手の包帯と白いままの右腕が、奇妙な対比を生み出している。

「悪い。医務室から替えの包帯貰つてくる。ロール一個で足りるよな」

翔也も「ごく普通の態度で月子の文句に返していた。下手な気負いも感じられない気軽なやり取りだ。

下手に気を使つよりも、いつそこれくらいの接し方が丁度いいのかもしねり。

怜次がそんなことを考えていると、唐突に亜由美が席を蹴つて立ち上がつた。

「ちょっと！」

周囲の視線が一点に集まる。

亜由美は血相を変えて月子のところへ駆け寄り、月子の右手と翔也の顔の間で視線を右往左往させた。明らかに焦つてている素振りだつたが、本人以外は何に焦つているのかさっぱり理解できていない。月子が説明を求めるように怜次へ眼差しを向けてきた。そんな困惑した顔をされても困つてしまつ。怜次も何が起きたのか理解できていないのだ。

「早く冷やさないと火傷しちゃうじゃない！」

その一言で、この場にいた全員がハッと月子の右手を見た。手元に置かれた紙コップからは依然として白い湯気が立つていて、右手に掛けたコーヒーは熱湯のままだつたのだ。その事実に一番驚いていたのは、他ならぬ月子自身であるようにも見えた。

亜由美が包帯に覆われた右腕を掴もうとする。次の瞬間、円子は反射的としか思えない勢いで、亜由美的手を振り払った。

「 あ

呆然と、亜由美は目を瞬かせた。

やがて何が起ったのか理解したらしく、わなわなと肩を震わせる。

「 黒河内さん！ 何するの！」

「 それはこいつらの台詞だ！」

怒号が怒号を塗り潰す。亜由美は予期せぬ反撃に狼狽し、何も言ひ返せずに後ずさった。

円子は自身に注目が集まっていることに気が付いて、左腕で右腕を隠すように抱くめる。まるで、右腕そのものが『他人に見られたくないモノ』であるかのように。

「 ……怒鳴ったことは謝る。だけど、このことは気にしないでくれ

それだけ言い残して、円子は血溜室から走り出てしまった。

後に残されたのは、状況を理解し切れていない玲奈と翔也に、言葉もなく立ち尽くしたままの亜由美。そして顔を手で押さえて溜息をつく岸田兵長。玲次は散々躊躇つた拳銃、遠慮がちな態度で亜由美に声を掛けた。

「 おー、上原……」

「 ……あの子はいつもやつなんです」

まつりまつりと話し始める亜由美だったが、その顔は玲次へ向け

られていなかつた。

「まるで、何でも独りで済ませられるみたいに振る舞つて……勝手に動いて規律を乱して……協調性を狂わせて……。噂になつてゐるですよ。軍の偉い人の子供だとか、親戚だとか。だからつて規律を乱していいはずがないのに……」

様子がおかしい。視線が明らかに宙を泳いでいる。喋る内容も分かりづらく要領を得ない。

特別採用制度。それは、いく当たり前の生活を送ることすら困難になつた子供達を支援するためのルール。その対象となつた子供達は、必ず相應の過去と現実を背負つてゐる。

亜由美はすぐるような眼差しで怜次を見上げた。

ならば、この少女はどのよだのうな重荷を背負つてゐるところなのだ。

「黒河内さんだけじゃないんです。規律を守らなかつたら、みんなきつと死んでしまうのに。そうですよね？ 私、間違つたこと言つてませんよね？ 久我二等兵も氣をつけてください。あの子に道連れなんかにされたら」

「亜由美ちゃん。自留室で騒ぐのもマナー違反よ」

岸田兵長が鋭い声で口を挟む。亜由美はびくりと肩を震わせて口を噤んだ。

「す、すみません」

亜由美は声を潜めて謝罪の弁を述べた。さつきまでの異様な態度はすっかり消えてなくなつてゐる。元に戻つたといつべきなのだろうか。怜次は語るべき言葉を見出せず、戸惑つ玲奈の視線を無言で受け止めるこことしかできなかつた。

しんとした空気が血腫室を包み込む。それを破つたのは翔也の声だった。

「……なあ、上原。俺も黒河内がお偉いさんの親戚だつて噂は聞いてるけど、はつきり言つておかしいだろ。本当にそんな親戚がいるなら、軍なんかに入るわけないと思うんだけどな」

翔也にしては珍しく表現を選んだ様子の発言だ。

口には出さないが、怜次も翔也と同じ意見を抱いていた。特別採用制度は戦災児童を救済する目的で設立された制度である。そんな社会的地位を持つ親族がいるなら、わざわざ年少兵にならずとも、直接養つて貰えればいいはずだ。

仮に、直接的な援助ができない関係だといつなら、親族の権力で好き勝手ができるという理屈自体が成り立たなくなる。そもそも、危険な戦闘部隊に配属されたことからしておかしい。権力を傘に着られるなら、比較的安全な後方部隊に配属させてもうおうと考えるのが普通の発想ではないのか。

「怜次君、ちょっとといいかな」

くいぐいと裾が引つ張られる。怜次は抵抗の余地もなく、血腫室の隅に連れて行かれた。

「どうかしたんですか？」

怜次は身を屈めながら小さな声で訊ねた。こんな形で引き寄せられた以上、表立つて話せない話題を切り出そうとしているのは間違いあるまい。

岸田兵長は周囲の様子を窺いながら怜次に耳打ちをした。

「用子ちゃんの右腕のこと、気付いてる?」

「…………」

用子の右腕。肩から指先までを包帯に覆われ、その上、包帯すらも見せまいとするような皮手袋を愛用する腕。触れられることすら徹底的に拒み、それでいて、熱湯を浴びても気付かない たつぱり数秒考え込んでから、怜次は岸田兵長の耳元に口を寄せた。

「何となく、想像はできています。でも黒河内が話したくないというなら、そのことには触れないつもりです」

「そつか。できれば、そのままでお願ひね」

怜次は無言で頷いた。岸田兵長の喋り方が妙に大人っぽく見えたのは、きっと気のせいではないだろう。実際、彼女は怜次よりも十一年近く多くの人生経験を積んでいるのだから。

岸田兵長はくるりと回のよけに向き直り、他の三人に号令をかける。

「さつ！ そろそろ次の課業だ。さつさと用子ちゃんと合流するよ

件名（Subject）：【重要】サンプル分析調査の結果
に関する報告

陸上自衛軍中部方面隊第三特機群 日向虎彦様

平素は格別のお引き立てをいただき、ありがとうございます。

先日ご依頼を承りましたサンプルの分析調査の結果が判明したため、急ぎ連絡をさせていただきます。
分析結果は以下の通りです。

一、依頼されたサンプル一種と、国内で確認された異星生物との照合結果

サンプルA（六脚型）：全ての既存データと不一致
サンプルB（触腕型）：全ての既存データと不一致

二、依頼されたサンプル一種と、上海で確認された異星生物との照合結果

サンプルA（六脚型）：一致
サンプルB（触腕型）：一致

三、サンプル二種の同定分析

一致率：九九・八パーセント

結論を申し上げますと、九月三十日に鳥取県で回収されたサンプルAと、十月六日に島根県で回収されたサンプルBは、どちらも上

海の異星生物群に属する個体である可能性が極めて高いと考えられます。

今回の分析結果は軍事的に極めて重要な意味を持つと思われるため、我々の判断で軍上層部への通達を行いました。結果的に事後報告となってしまったことをお詫び申し上げます。

岡山異星生物総合研究所 構成物
質分析センター

第一研究班主任研究者 阿佐
ケ谷龍太郎

一〇〇九年 十一月七日 中華人民共和国領 上海市市街跡

放棄された装甲車の外装に、雨粒がぽつりと滴った。

「雨、か……」

虎彦は誰に聞かせるでもなく呟いた。

真っ黒な頭髪に雨が滴り、頬を伝つて落ちていく。

かつては洋風のカフェテリアであつたらしい廃墟の片隅で、赤鎧が浮いた客用の椅子に腰を下ろし、疲れ果てた身体を休ませる。

虎彦の顔付きからは、二十代前半といつ若々しさは既に消え失せていた。疲労と消耗を極限まで積み重ね、生氣を削り尽くされたような表情だけをやつれた顔に貼り付けている。迷彩色の戦闘服も、汗と土埃と生臭い透明の液体に塗れ、見る影もなく汚れていた。

遠くで砲声が響き渡る。

一発、三発、四発と連射したかと思うと、唐突に途切れで何も聞こえなくなつた。

虎彦は制服のポケットからブロック状の携帯糧食を取り出して、厚手の包装紙を歯でちぎつた。乾いた粘土のようなそれを黙々と咀嚼し、金属製の水筒の中身を呷る。水筒の中身はもつすべ空っぽになりそうだった。

廃墟と化したビル街の向こうで黒煙が上つた。目を凝らさなければ分からぬほどに、細く薄い。さきほど発砲した戦車が破壊されたのだろう。虎彦はその黒煙を無感動に眺めていた。あの程度の光景なら、とつくの昔に見慣れている。顔も知らない誰かの死を嘆くことすら忘れるほどに。

制服のアタッチメントに取り付けられた通信機が受信を告げる。虎彦はスイッチを押して音声を流した。耳障りな雑音の後に、飄々とした若い男の声が聞こえてきた。

『 よお、日向。おつと、今は日向中尉殿か』

「 気にするな。小隊長が死んだから、臨時で繰り上げられただけだ。で、何かあつたのか、岸田少尉」

虎彦は皮肉げに返した。最後の方はわざと固い口調を使つたが、口元は綻んでいる。

『 休憩してるとこり悪いんだが、エスコートの引継ぎを頼む。台湾

軍の戦車小隊が一個分だ。第一臨時港湾まで送つてくれ

要するに、港まで撤退中の戦車小隊の護衛任務を交代して貰った
いといふ要請である。

通信機から流れる声は明るい口振りだつたが、焦りの色も少なか
らず混ざつていた。岸田少尉達の置かれている状況は、決して気楽
なものではないようだ。

「了解。位置情報を機体の方に送つてくれ」

虎彦は携帯糧食の残りを一気に飲み込み、カフェテリアの残骸を
後にした。

岸田少尉は『戦車小隊が一個分』と表現していた。
普通なら、どこの部隊に所属する小隊なのがを通達していくるはず
だ。それをしてこないということは、文字通り二つの小隊が逃げて
いるのではなく、壊滅した部隊の生き残りを集めた結果、車両数が
二個小隊分、即ち八輛に達したというだけなのだろう。

戦局は壊滅的だ。

勢いを増した雨が、ひび割れたアスファルトに染み込んでいく。
虎彦は黒々とした髪を濡らしながら、建物の隣の路地へと入つてい
つた。

ごみと瓦礫にまみれた袋小路の最奥で、黒い装甲に身を包んだ金
属の巨人が、静かに跪いて主人の帰りを待つていた。

三式特機　　近年になつてようやく実戦投入された、人間の形を
した兵器。

虎彦は機体の脚部を足場にして胴体まで登り、外部から操縦席の
開閉機能を操作した。何十回と繰り返した搭乗手順を速やかに終わ
らせ、虎彦は細い配線の束が取り付けられた薄手のベルトを首に巻
いた。目蓋を閉じ、手元のボタンをオンにする。

「 神経系インターフェース、接続」

始動ボタンを押しながらペダルを踏み込む。操縦席の中はひどく暗い。光源らしい光源といえば、座席正面のディスプレイが前方の風景を映し出している光くらいだ。

「全シークエンス完了」……三式、起動」

機体が曲げていた脚部をゆっくりと伸ばす。

ゆり籠のように傾く操縦席の中で、虎彦は岸田から送られた戦術情報をサブモニターに表示し、その内容を確かめていた。内容は友軍の種別と座標を一覧にした文字情報だが、あちらの状況を把握するには充分だ。

「台湾軍戦車が八輜……」これが護衛対象か。その後方に殿の特機が三機……」

無人の大通りを、漆黒の装甲を纏つた巨人が歩いていく。降りしきる雨が夜間迷彩で塗装された装甲を滝のように伝い落ちる。

周囲に人の気配はない。

否、機体の周囲どころか、上海全体から人間という存在が駆逐されつつあるのだ。

「……来たか」

虎彦は機体を停止させた。流れのような動作で、機体右腕部に装着した三五ミリ機関砲を前方へ向ける。

その体勢は、人間が拳銃や突撃銃を構える場合とは全く違うものだ。グリップを手で握るのではなく、機体全長と同程度の長さの砲身が右腕の肘から手首にかけて固定され、その上から追加装甲が取

り付けられている。砲弾を収めた弾装は胴体から右肩にかけて背負うように搭載し、上腕を覆うカバーの下を弾帯が通る構造になっている。

安定のため右腕に左手を沿え、足を開いて腰を落とす。射撃体勢を維持したまま、虎彦は目標が視界に入るのを待ち構えた。

雨の帳を潜り抜け、迷彩塗装のM60戦車が現れる。総数は七。先ほどよりも一輛減っている。確認のため通信を入れると、移動中に一輛やられたという旨が英語で返ってきた。

「四人戦死、か」

M60戦車の乗員は四名。一輛が破壊されたということは、これだけの人数が戦死したことを意味する。仮に脱出できていたとしても、この戦況では死期が僅かに延びたに過ぎまい。しかし、虎彦は隈のできた目を僅かに細めただけで、死者を悼む様子すら見せなかつた。

七輛の戦車は時速五十キロにも満たない最高速度をいつぱいに振り絞つて、背後に迫る鉤爪の音から逃げ切ろうとしている。

虎彦は照準が四車線道路の中央線に重なるように調整して、攻撃のタイミングを計つた。

戦車群が機体とすれ違つた直後、雨の帳の向こうに鈍色の影が揺らいだ。

巨大な狗。

体高だけで巨人の肩に達するほどの獸が、鉤爪でアスファルトを削りながら急速に接近してくる。

無論、尋常な生物であるはずなどない。肉体の各所は金属質の部品で構成され、平らな装甲板のような皮膚が主要な部分を覆つている。一方で、顔面の中央でぎらぎらと輝く単眼は極めて生物的だ。

例外なく六本の脚を有する、金属と有機体の入り混じつた血肉を

持つ巨獣。

それが人類の敵

金属食性異星生物、グレムリン。

「三、二、一……ッ！」

虎彦は右手のレバーのボタンを押した。

三五ミリ機関砲の砲身が高速回転し、音速の三倍を超える焼夷榴弾が秒間数発の間隔で放たれる。鉄鋼製の砲弾は巨獣の皮膚を易々と穿ち、内部で爆発して金属的な筋肉纖維を焼き焦がし、破壊力を帯びた破片を体内に撒き散らす。

先頭を疾走していた巨獣は、一秒間にも満たない射撃によって、肉体の前面をズタズタの残骸に変えられていた。

「まず、一つ」

後続の『敵』が素早く左右に散開する。

数は三体。どれも先ほど撃破したグレムリンと同じ種類だ。

「次つ……！」

虎彦は機体の膝をバネのように曲げて、一体だけに別れたほうに追随して横に跳んだ。

巨獣がガードレールを踏み躡つて方向を変える。

次の瞬間、虎彦の三五ミリ機関砲が火を噴いた。砲口から吐き出される濃厚な黒煙の向こうで、巨獣が色の薄い体液を撒き散らして盛大に転倒した。

「二つ」

虎彦は即座に機体の向きを変え、道路の反対側を疾走する巨獣の

側面を蜂の巣にした。流れ弾がガラスを突き破り、倒れていく巨体が窓枠と壁を粉碎する。

「二二〇」

「これで四体のうち三体までを仕留めることになる。残るグレムリンは一体のみ。

虎彦はアクセルペダルを踏み込んで機体を加速させた。最後の一
体が路地裏に潜り込むのが見えたのだ。虎彦はM60戦車が逃げて
いった方角に走りながら、周辺の地図情報をサブモニターに映した。
あのサイズのグレムリンが通過できる横道で、ここから一番近い
道は一区画先にある。

「……間に合ひつか？」

機体を極端なまでの前傾姿勢に移行させ、路面を斜めに蹴り疾走
する。爪先がアスファルトを抉り、土砂と雨水が混ざった飛沫を撒
き散らす。

操縦席が激しく振動するのも構わずに、虎彦は可能な限りの速度
で走り続けた。一脚と六脚ではどうしても後者の方が速い。後は相
手が回り道をしているという有利をどこまで生かせるかだ。
機体に急制動を掛ける。片足を突つ張つて速度を一気に削ぎ落と
す。強烈なGが虎彦を左右に揺さぶり、機体の足元で壁のような水
柱が立つた。

「セ二〇一。」

目的の路地に二五ミリ機関砲の砲口を突つ込み、照準を定める手
順すら省いて発砲した。

がむしゃらな弾幕が路地を埋め尽くし、皿と鼻の先まで迫つてい

た巨獣を打ち抜いていく。頸部が半分吹き飛び、取れかけた頭が急に牙を剥いた。死の直前に振り絞った力で機体の胸部装甲に食らいつき、厚みの半分ほどをもぎ取つて絶命する。

巨獣が倒れ、大きな水飛沫を散らした。

路地に静けさが戻る。降り注ぐ雨粒が硝煙を薄め、機体の筋肉組織を冷却していく。胸部に刻まれた歯型からは、装甲の奥のフレームが僅かに覗いていた。

「……ふう」

虎彦は黒い髪をかき上げ、操縦席のシートに深く身を横たえた。操縦席は気密性が非常に高いため、雨音や空気の冷たさは伝わってこない。しかし、ディスプレイ越しの雨模様を見ているだけでも、火照った身体が涼しくなっていく気がした。

不意に、機体に備え付けの通信機がノイズを吐き出した。送信元は岸田少尉の機体だ。通信状態が悪いせいか聞き取りにくい。虎彦は通信機の音量スイッチを捻つた。

『 よお、日向。そつちは好調みたいだな』

「ああ、さつき四体倒した。次は何体来る予定だ？」

雑音が混ざり、大口径の火器の発砲音が聞こえた。
戦闘中なのか？ 虎彦は眉をひそめた。それにしては岸田少尉の声が暢気過ぎる。

「護衛対象は逃がした。今頃は川岸の仮設港まで辿り着いてるはずだ。お前達の方はどうだ。戦況は？ 現在位置は？」

内心に滲む焦燥を抑え切れず、矢継ぎ早に報告を促す。
返ってきた声は、酷い雑音に侵されていていた。

『なあ 向。俺達が こで負け ら、日本はどうな かな』

聞き取りにくいのは、雑音が混ざっているところ以上に、声そのものが衰弱しているせいだ。虎彦は全てを察し、視線を伏せた。

「どうにもならないだろ。上海への上陸作戦は失敗、それだけだ。投入した戦力以外は何も失わない」

虎彦は無意識に言葉を選んでいた。

失われた戦力とは、虎彦や岸田のことをも含んでいた。その現実には触れず、なおかつ嘘にならない範囲で、可能な限り肯定的な表現を使おうとしている。

「俺達が派遣される前と同じだ。自分の近くで戦いが起るまで、対岸の火事みたいに暢気に過ごして……平和に暮らすんだろ」

『ああ、そりや いいな。姉さんも でなきや で死ぬ、意味が 』

甲高いノイズが鼓膜を突き、それを最後に通信は途絶えた。

虎彦はきつくな歯を噛み締めた。歯の表面がこすれ合う不快な音が鼓膜を震わせる。そうしなければ叫び出してしまいそうだった。機体を急旋回させ、最後に岸田機の反応を捉えた方角へ走らせる。既に手遅れなのは分かりきっている。走らせずにいられなかつた。疾走を続けながら通信機のスイッチを弄る。一縷の望みを託して、他の一機との交信を試みるも、耳障りな雑音が神経を苛立たせるばかりであった。

虎彦は吐き捨てるように舌打ちをして、本隊との通信回線を開いた。

「いやら臨時遊撃小隊！ 本隊、応答してくれ！ 僕以外は全滅だ……！」

『撤退は許可できません。可能な限り遊撃と支援を続け、主力部隊の撤退が完了するまでの時間を稼いでください』
「……クソッ！」

乱暴に通信を切り、激戦によつて荒れ果てた道路を南下していく。街並みは極限まで荒れ、建ち並ぶビルはまるで穴あきチーズのような有様だが、不思議と兵器の残骸は少なかつた。

三百メートルほど進んだところで、虎彦は舌打ちをして機体を減速させた。大通りから死角となるように位置取つて、ビルの陰に機体を隠す。大通りに複数の敵の反応があつた。大型の敵影が一つと、それを取り巻く形で小型の敵影が散らばつている。

未だ降り止まぬ雨が、機体の装甲の表面を流れ落ちていく。

「ちつ……」

各種センサー類を搭載した『頭』を回し、敵の一群を映像で捉える。

そこには正体不明の巨大な生物がいた。寸詰まりの海鼠か蛭のように生々しい胴体から、金属質の六本の脚が左右に三本ずつ生えている。脚はクレーンの腕と似た構造をしていて、皮膚はまるで分厚いゴム膜のよう。脚部に支えられて浮き上がつた高さも含めれば、その大きさはビルの五階部分まで達している。

怪獣じみた大きさの、異常発育した海鼠が数台の重機で持ち上げられている 虎彦はそんな印象を抱いた。初めて見るタイプだが、あれもグレムリンなのだろうか。

「デカブツが一匹に小物が……数えるのも面倒だ」

巨大海鼠は六本の脚を互い違いに動かして、無人の道路を我が物顔で闊歩している。速度は極めて遅く、一步進むのにたつぱり三秒以上かけていた。あまりにも緩慢すぎて、虎彦にはアレが前進しているのか、それとも後退しているのかすら分からなかつた。

巨体の両端が伸縮し、地面の臭いを嗅ぐ象の鼻のように路面をまさぐる。この怪物の前後を区別できない最大の理由。それは、肉体の両端に口腔がぽつかりと開いていることだつた。肉筒としか表現のしようがない孔の周りに、大きく内側に湾曲した牙が環状に生え、一定のペースを維持して開閉を繰り返している。

その周りには、小型のグレムリンが数え切れないほど群がつていた。成人の男より一回りは小柄で、恐竜図鑑に載っている小型恐竜を髪髪とさせる形状をしている。

「小さいのはともかく、でかい奴は倒しきれそうにないな……」

巨獸の片方の口が、破壊され放置されていたM60戦車を銜えた。砲塔に牙を食い込ませ、瓶の蓋をこじ開けるように捻じ切る。高く掲げられた砲塔から、戦死した砲手の亡骸がズるりと滑り落ちた。巨獸は砲塔をごりごりと咀嚼し、更には車体そのものまでも喰らつていく。

身の毛もよだつような光景を前にしても、虎彦は無表情を崩さなかつた。

「……一気に抜けるか」

機体を捻り急加速。向かいの路地を目指し大通りを横切る。それと同時に、三五ミリ機関砲の焼夷榴弾の嵐で小型恐竜の群れを薙ぎ払う。アスファルトに無数の孔が穿たれ、メタリックな肉片と半透明の体液が、水飛沫に混ざつて四方八方に飛び散つた。

大通りを挟んだ反対側の路地に機体を滑り込ませる。移動射撃は

有効な打撃を与えた。小型恐竜は大半が吹き飛び、生き残りもパックを起こしている。

流れ弾が何発か巨獣に当たったようだが、どうやら全く堪えていないらしい。戦車の乗員を食べていた側とは反対の口が、砕け散った小型恐竜の残骸を捕食し始めた。敵味方関係なく死体を食いつまるで掃除屋だ。

虎彦は路地の奥へと機体を走らせた。追つてこないのなら、無理に攻撃を加え続ける必要はない。弾数を考へても、無駄な戦闘は避けるべきだ。

時間と共に強さを増す雨を潜り、虎彦の駆る特機は無人の上海を走り続けた。

勢いもそのままに十字路を曲がり、即座に三五ミリ機関砲を振り向ける。

その瞬間、虎彦は驚愕に目を見開いた。

「なんだ、これは」

眼前の町並みが数百メートルに渡つて陥没し、異世界じみた深淵が口を開けている。

崩落した地盤と道路。倒壊し、引きずり込まれた高層建築。折れ曲がった信号機。それらを白い纖維のようなものが包み込み、歪な半球が幾つも重なり合つた有機的な形状の構造体を作り上げている。まるで、暗い穴の中央から大量の泡が吹き出しているかのようだ。無論、実際は泡などという生易しいものではない。表面に白銀の光沢があり、降り注ぐ雨粒が飛沫を立てて弾けている。明らかに硬質の物体、それも金属的な物質に違ひなかつた。

「これが……グレムリンの……巣、なのか……」

白き奈落の中央に、兵器の残骸が塔のように積み上げられていた。

M60戦車。M41D軽戦車。C21M装甲兵員輸送車。七四式戦車。八九式装甲戦闘車。七三式装甲車。戦車砲が、装甲が、車輪が、無限軌道が重なり合い、折れ曲がり、無残な姿を晒している。この惨状が自然発生したものではないことは明白だ。何らかの意図を持つて実行された所業に違いない。

「…………つ！」

ディスプレイ越しに映る塔の頂に、異質なモノが座していた。

黒金の残骸とは対照的な白銀の外皮。陽光を弾く幾何学的な鱗。腕のように発達した六本の足。水晶のように透明な一対の翅。脚よりも強靭な一本の尾。その尾と見紛うばかりに長く伸びた首。そして、首の先に付いた小振りな頭と、人間のような平べつたい貌。人面の飛竜。有史以来、この世に存在した如何なる生物からもかけ離れた『異物』が、残骸の塔から虎彦の機体を見下ろしていた。

「岸田……！」

乱杭歯を何重にも生やした顎の狭間に、虎彦の機体と同じ胴体ブロツクが挟まっている。両腕と下半身を喪失し、残された胸部に不規則な配列の牙が何本も突き刺さり、機能を停止していた。

『異物』が顎を噛み合わせ、巨人の残骸を粉碎した。無色に近い動力溶液に混ざって赤い少量の液体が飛び散つたのを、虎彦は見逃さなかつた。

虎彦は腹の底から叫び、機関砲を振り向けた。泡状のドームを引き裂いて種々多様なグレムリンが姿を現し、敗残兵を狩り尽くすべく各々の武器を剥き出しにする。さながら主を守らんとする忠臣のように。

首を持たない四腕一脚の巨人。触腕を振り乱す鋼の海星。六本脚の奇蹄生物。

それはまさに、地獄の釜の蓋が開いたような

第九話 それは珍しくもない出来事で

一一〇一一年 十月十一日 鳥取市津ノ井 自衛軍士官用宿舎

「 くそつ 」

最悪の寝起きだった。

虎彦はベッド代わりに使っていたソファーから身を起こし、真っ白になりかけている頭髪を搔き乱した。

「 またあの夢か……一年も経つてのに、女らしいもんだ 」

寝惚け眼のまま、殺風景な部屋を見渡す。2DKの洋間には必要最小限の家具だけが置かれている。独り暮らしといつ簡潔な生活規模に対して、部屋の面積が広過ぎるのだ。

贅沢だと言われるかもしぬないが、この部屋は虎彦が好んで借りたものではない。

一般に、自衛軍の兵士は駐屯地内で生活することが義務付けられる。そして猪熊曹長のよう下士官と呼ばれる地位になると、一定の条件さえ満たせば、駐屯地の外に居を構えることが許可されるようになる。

だが、少尉以上の軍人……いわゆる士官の場合、逆に駐屯地内で暮らすことが許されなくなるのである。これは自衛軍が自衛隊だった頃からの決まりであり、自力で家を用意できない場合は、軍が借り上げた集合住宅の一室に入居することになる。

虎彦の居室もそいつた士官用集合住宅の一つだった。

「 もうこんな時間か 」

日付表示付きのデジタル時計に目をやる。

午前七時五分。虎彦の感覚から言つと、これでも寝過ぎた内に入れる時間だ。

「今日は……日曜の振り替えで休みだったな」

自衛軍の軍人にも休日は存在する。

どうしようもないほど熾烈な最前線は別として、そうでないな週に一日から二日の休養は与えられる。ただでさえ人員不足が深刻となつてゐるのに、過労で使い潰すなど論外だということなのだろう。

しかし社会一般と同じ土日の週休一日を徹底すると、突発的な事態に即応できる部隊がなくなつてしまつ。それを防ぐため、部隊ごとに 第三特機群の場合は中隊単位で 休日をずらして割り当てるのが、陸上自衛軍における実質的な休日制度となつていた。

とはいへ、緊急時には即座に駐屯地へ戻れる範囲で行動すること、とこう最低限の条件も定められているのだが。

「……ん？」

ふと、隣室へ繋がる扉に顔を向ける。

扉の隙間から、食欲をそそる匂いが漏れ出してきていた。虎彦は溜息混じりに扉に手をかけると、一気に開け放つた。

「おはよっ、虎ちゃん」

隣室のダイニングキッチンで、どうこうわけか岸田兵長が調理にいそしんでいた。

質素な私服を着用し、その辺にあつた踏み台を足場にしてフライパンの中身をかき混ぜてゐる姿は、どう羨爛目に見ても料理に挑戦

した中学生だ。

「何をやつてるんだ、岸田兵長」

「見ての通りだけど」

岸田兵長は砕けた態度で答え、足場の上で振り返った。この姿だけを見て、彼女が軍人であると氣付くことができる人間がどれほどいるのだろう。

「今日は私もオフだからね。どうせ虎ちゃんは簡単なもので済ませてるんだろうなって思つたから」

「おい、兵長……」

虎彦が口を挟もつとした矢先、岸田兵長はびしきと指を突き出した。

「オフは階級関係なしつて約束したでしょ。そつちのほうがやりやすいいつて言つたの、虎ちゃんじやない」

「……そうだつた。それで、皿が一人分あるのは佐代子さんの分なのか？」

虎彦は僅かに喋り方を変えた。敬語を使つ者がいなくなり、普段とはまるで異なる空気が流れ始める。

「いいじゃない、私も朝食まだなんだから」

岸田兵長 佐代子は軽い口調でそう言つて、食卓に並べてある食器に朝食を並べていく。そして一通り準備を終えるや否や、佐代子は部屋の主を差し置いて席に着いた。その後に続く形で、虎彦も椅子に腰を下ろす。

恋人とは異なる碎けた雰囲気。あえて近いものを擧げるトすれば、長年連れ添つた家族の間に流れる空気だらうか。

佐代子は軽く手を合わせ、虎彦より先に朝食に手をつけ始めた。

「ところで、岡山の研究所に頼んだサンプル分析の方はどうなつてるので？」

「今日はオフなんだろ？ 完全に仕事の話じゃないか、それ「オフだからよ。仕事中だと却つて聞きにくいけれど、部隊長やつてる士官と下つ端兵士の関係なんだから」

「……そういうものかね」

虎彦は溜息を吐き、四つ折りの白い紙を差し出した。岡山の構成物質分析センターから送られてきた報告メールを印刷したものだ。報告内容は虎彦が想像していた結果と同じ。想像しつる限りで最悪の展開。

猿政山で交戦したグレムリンだけでなく、九月末日に回収されたサンプルまでもが上海由来の個体だったのだ。

佐代子は報告書を一読するなり、ぽつりと呟いた。

「もうすぐ一年になるんだね。司が死んじゃつてから」

その名を聞いて、虎彦は額を押された。

上海戦役。地獄とも称される、自衛軍結成以来最悪の大敗。この戦いにおいて、岸田司少尉は虎彦の同僚として、後には部下として戦い、戦死した。

それだけなら、数え切れないほどに出遭つてきた戦争の犠牲者の一人に過ぎない。

だが、岸田司の場合に限つては、他の戦死者達と同一視できない理由があった。

「しつかづしなくちやつて思つただけど、やつぱり弟の」とだから
難しいかな

佐代子は食事を取る手を緩め、物憂げに微笑んだ。

「でも小隊の子達はきつちり面倒見るから、心配しないで。中尉く
らになると隊員のひとりひとりまで見てる暇はないんでしょ。そ
こんところは、私と竜馬君に任せていいからね」

「はは……頼りにしますよ」

岸田同と岸田佐代子。その苗字が示すように、一人は血を分けた
姉と弟という関係だった。むざむざ死なせてしまった男の血縁者と
食卓を囲む。考え方によつては、ひどく倒錯的な光景なのかも
しれない。

「やつぱり心配だよね」

「……何のことだ?」

「これからのこと。虎ちゃんのことばランドセル背負つてた頃から
知つてるんだから。隠しても無駄なんだからね」

佐代子は半分ほど空になつた食器を箸の先でなぞりながら、虎彦
の顔をじっと見据えた。

虎彦は眼を背けることができなかつた。非難や叱責といった類の
感情ではなく、純粹な真撃さだけを湛えた眼差しだ。

「大陸のグレムリンが日本にいるといつことは、女王も海を渡つて
きている可能性が高いはずでしょ。そうだとしたら、私達の小隊
も戦いに駆り出されるかもしれない。でも、今のあの子達に本格的
な実戦は早過ぎる。虎ちゃんもそう思つてるんでしょ?」

虎彦は沈黙を以つて肯定に代えた。佐代子の指摘は紛れもなく的を射ている。否定する余地など微塵もない。

「ねえ、どうにかならないかな」

「出撃の判断は司令官が権限を持つてゐるから、俺の権限では意見を上奏するのが精一杯だよ。……だけど、最善は尽くす」

その返答を聞いて、佐代子は子供のような笑みを浮かべた。

上海戦役で虎彦は旧友を失い、佐代子は弟を失つた。そして今、彼女は新たに得た弟達と妹達を危険に晒してゐる。だからこそ気に病まずにはいられないのだろう。あんな喪失感を一度も味わうなど、想像するだけで気が狂いそうになるに決まつてゐるのだから。

一一〇一一年 十月十一日 津ノ井駐屯地 第三小隊格納庫

「……よつと」

怜次は身を捩り、仰向けのまま三号機の操縦席から這い出した。開け放たれた胸部装甲の内側に脚を置き、そのまま上半身を引きずり出す。こうした特機特有の降り方にもだいぶ慣れてきた。最初は頻繁に頭をぶつけたものだが、教育期間を含め半年以上も乗つていれば、否が応でも身についてしまう。

「ふう……後部座席は終わつたぞ」

怜次は薄めた消毒用アルコールを染み込ませた布切れを胸部装甲の縁に置いた。

同じく胸部装甲の内側に座っていた月子が、その布切れを掴み取る。

「前は私の担当だから、交替だな」

二人とも軍服の上着を脱いだワイシャツ姿で作業をしていたが、月子はそれに加えて、いつもの皮手袋を嵌めている。

「にしても、操縦席周りの整備が操縦士の仕事ってのは面倒だよね」

「戦車は乗組員が車体のメンテナンスも担当するそうだから、それに比べれば楽だと思うよ。特機の手足を整備しようと言われてもお手上げだからね」

そう言つて、月子は膝と手を突いた体勢で、上半身から操縦席に入つていった。

特機の操縦席は、胸部装甲が乗降ハッチと足場を兼ねている。しかし、その足場の広さにはどうしても限りがあった。胸部自体の幅より広くすることができないのだ。そのため、二人が同時に座ろうとすると、どうしても手狭に感じてしまう。

そのことを考えて、怜次は月子の作業の邪魔にならないように、足場の先端付近に腰を下ろしていた。下手に誰かの近くに座つていると、接触した拍子に転落しかねない。これは特機の操縦訓練において真っ先に叩き込まれる常識である。

「ん……普段は気にならないけど、やっぱり座席が汗臭いな。入念に拭いておこう」

月子は上半身だけを操縦席の中に入れたまま、座席を消毒用アルコールで清掃している。

さり気なく、怜次は視線を逸らす。操縦席の手入れとしては基本的な作業の一つなのだが、どうにも視覚的に宜しくない。膝を突いて上半身を操縦席に入れている関係上、どうしても臀部をこじらへ向ける形になってしまうのだ。

人によつては、好機とばかりに眺めるのかもしれないが、怜次にそんな趣向はなかつた。

「よし。次はインターフェースの調整を……」

そんな怜次の意図など知る由もなく、月子は操縦席から上半身を抜いて、胸部装甲の内側にぺたんと座り込んだ。その手には、細い配線の束で操縦席と繋がつた薄手のベルト 神経系インターフェースが握られていた。

それを手早く首に巻き、操縦席内のコントロールを操作する。

「接続……確立。体性感覚同調……右腕、左腕、右脚、左脚……」

「……やること無くなつたな」

怜次は何気なく辺りを見渡した。月子がときぱきとメンテナンスを進めていくので、却つて手持ち無沙汰になつてしまつたのだ。

格納庫の内部には第三小隊の一号機から四号機までが立ち並んでいる。

しかし、操縦士が乗り込んで整備をしているのは、怜次達の三号機だけだった。

第三小隊は本来祝日だった月曜日に即応部隊として営内待機し、今日はその代替として休日扱いになつてゐる。なので、他の隊員達は思い思いの形で休養を取つてゐるはずである。

「他の連中は何してんだろ?」

怜次の何気ない咳きに、月子が神経系インターフェースを付けたまま答えた。

「長谷川君と榎さんは市街地に行くとか言っていたけど。……ああ、一緒に遊びに行つたわけじゃなくて、偶然行き先が同じだつたらしいよ」

「で、上原は自習室でのんびりお勉強か」

「仕事をしてるのは私達くらうってことだね」

さりりと言つてのけた月子に対し、怜次はほんの僅かの反感を覚えた。大袈裟な不快感などではなく、日常的に起こり得る些細な苛立ちではあつたが、少しばかり言い返してやろうといつ気持ちが湧き上がつてきたのだ。

「左腕を丸ごと付け替えるわ、泥汚れが酷くて洗浄に手間取るわ、色々あつてメンテナンスのスケジュールが大幅に遅れたからな。休日返上も止む無しつて奴か」「…………

皮肉めいた口調でそう言つと、月子が左手を伸ばして小突いてきた。

どうやら、前回の戦闘は月子にとつて悪い意味で印象に残る戦いだつたらしく、そのことが話題に上るたびに苦々しげな反応を見せてくれるのだ。

「おつと、避難避難

怜次はおじけた態度でそう言つて、用意されていた脚立を使って床へ降りた。そして、二郎機の足元から、開きつ放しの胸部装甲を見上げる。

あの戦いから六日が経つた。それなのに、怜次は未だに月子に訊ねることができずにいた。

何故あんなに取り乱したのだ と。

それ自体は大して特別な質問ではないはずだ。今まで遭遇したことのない事態だったので、つい混乱してしまったのだとでも聞けば、簡単に納得できるような疑問に過ぎない。

こんなに単純なことが出来ないでいる理由はただ一つ。怜次の中に『きっと聞かれたくない事情があるに違いない』という思い込みが巢食ついているためである。

勝手な思い込みであるとは理解している。だが、それを払拭するのは容易ではなかった。

「訊いてみれば楽なんだろうけど……やつぱり臆病者なんだな、俺つて」

怜次は適当な物資の箱に腰掛けた。

格納庫の中は不思議なくらいに静まり返っている。例の戦闘以降、第三小隊は本格的な戦闘を伴う作戦に参加していない。そのため、整備班の仕事も他の隊と比較して少なく、時間帯によつては開店休業も同然になつていた。

この時点では格納庫にいるのは、怜次と月子を除けば、資材を搬入しにやつて来た二、三人の整備員だけだ。

静まり返つた格納庫の資材搬入口の方から、文物の靴の足音が近付いてきた。

「久しぶりだな」

靴音の主は怜次の前で立ち止まり、親しげな口調でそう言った。濃紺のスカートスーツの上から白衣を羽織つた、怜俐な顔立ちの女だ。

怜次は暫し記憶の糸を辿り、女の名前を思い出した。

「……空木さん？」

「ちゃんと覚えていてくれたか。ええと、君は……三号機の操縦士だから……」

空木は困ったような顔で首を捻つた。察するに、怜次がどこの誰であるかは覚えているが、肝心の名前を思い出すことができずに困っているのだろう。

「久我です」

「そうそう。久我怜次君だつたな。資料を読んで何度も確認したんだが、どうにも他人の名前を覚えるのは苦手でね」

空木は悪びれる様子もなく笑つた。彼女の価値観においては、他人の名前を忘れることはさして重大な問題ではないらしい。

「ところで、今日は休日扱いなんだろう？ きちんとメンテナンスされるのは開発者冥利に尽きるが、休養を取らなくては大丈夫なのか」

「大丈夫ですよ。相方の作業が終わつたらゆっくり休むつもりですから」

月子のことを相方を表現したことに、怜次は軽いくすぐつたさを覚えた。間違つた表現でも大袈裟な誇張でもないが、何となく変な感じがしたのだ。奇妙な喻えかもしれないが、少年時代に一人称を『僕』から『俺』に変えたときの恥ずかしさと少し似ている。

「相方というと黒河内月子か。そうだな……何なら、暇潰しに雑談でもしようか」

発言内容は提案形式だったが、拒否権を「えられていらない気がした。恐らく空木も時間を潰す方法を探していたところだったのだろう。それでもなければ、唐突にこんな提案をしてくる意味が分からぬ。」

怜次は適当な話題を探そうとして、出会い頭に空木が話していたことを思い出した。

「そういうえば、人工の腕を造つて本物の代用にする研究は完成しているとか言つていましたよね。それ、本当なんですか？」

「よく覚えていたな」

空木は口の端を上げて笑つた。

「義肢の研究について説明するには、まずは特機の開発経緯から解説する必要がある」

話題を間違えたかな　　怜次は内心で軽く後悔した。

空木都子という人物は、知識を披露することに楽しみを覚える性格であるらしい。この前のグレムリンに関する高説がそうであつたように、今回の話も長くなりそうだ。

「知つての通り、日本は資源に乏しい国だ。地下資源が皆無なわけではないが、自国の生産量では突然変異的に発達したメガロポリスを支えきれない。だが、世界各地でグレムリンとの戦いが始まつてからは、必要な資源を必要なだけ輸入できる保証がなくなつた」

怜次は相槌の代わりに無言で頷いた。日本の不安定な資源事情は、小学校の社会科でも習つ事柄である。

「その危機感を背景に、一九八七年頃、とある研究が国家レベルの案件としてスタートした。グレムリンの肉体を構成する金属を再資源化し、輸入資源の代替とする研究だ。その先駆けとして、グレムリン由来の金属で兵器を製造する試みが進められた」

豊かな金属資源を有する土地は、グレムリンの標的になりやすい。石油等を運ぶタンカーも、中継地点の港が壊滅していれば航行できず、またそれ 자체もグレムリンの餌となる。

問題はそれだけではない。戦争が長期化すればするほど、金属資源の需要が上がって争奪戦が激しさを増し、資源輸出国が危機に陥れば輸出そのものが途絶えかねない。資源の安定した確保は、世界中のありとあらゆる国が頭を悩ませる難題なのだ。

「君もグレムリンの兵器利用については聞いたことがあるだろ？」「戦車の装甲や銃弾の素材として使う研究が進んでいるんですよね。でも、それと義肢にどんな関係があるんですか？」「そう急くな。物事には順序というものがあるんだ」

どうやら、空木は本腰を入れて語り尽くすつもりらしい。怜次は三号機の胸部を見やつた。月子はまだ作業中のようだが、この分では話が終わる方が遅いかもしれない。

「グレムリンの装甲は簡単に再利用の目処が立つた。実際に戦車の装甲として使われていないのは、普通よりもコストが掛かるというだけの理由でしかない。輸入資源が値上がりすれば、速やかに再資源化装甲へ切り替わるだろ？ね」

「ここまで話したところで、空木は急に声のトーンを変えた。これからが本番だとばかりに、口調に力を込めていく。

「ところが、筋肉だけは再資源化が難しかった。あれは有機物と無機物が巧みに組み合わさった複雑怪奇な構造体だからな。金属だけを分離するのに莫大なコストが掛かる一方で、質のいい金属は殆ど得られない。とにかく割に合わないんだ」

筋肉　怜次はグレムリンの強靭な四肢、否、六肢を思い浮かべる。

一見しただけでは単なる金属纖維の束に思えるが、間近で見ると、想像以上の生々しさに驚かされる。いかに無機質な外見をしていようど、あれは紛れもなく生物の一部分なのだ。

「だが、四年後の一九九一年に、その常識を逆転の発想で克服する兵器の開発が始まった」

「それが特機なんですね」

怜次の推理を聞いて、空木は嬉しそうな笑顔を浮かべた。失礼な感想だが、この人もあるな表情ができたのかと驚かざるを得なかつた。

「『明察。筋肉を再資源化することが困難なら、筋肉を筋肉のまま使えばいい。しかし、既存の機械に部品として組み込んで、整備が難しくなるだけで性能は大して上がらない。だから『グレムリンの筋肉を主な動力とし、それ以外のメカニズムを極力排除した兵器を開発する必要があつたわけだ』

語り口にどんどん熱意が籠っていく。相変わらず、放つておいたらいつまで経つても本題に入らない人だ。それでいて、淀みのない饒舌さで喋り続けるものだから、口を差し挟むタイミングを見つけることすら難しい。

もしかしたら、怜次のことを『話せる』相手だと見なしたのかも

しない。仮にやうだとすると、喜ぶべきなのか嘆くべきなのか判断に困るところである。

空木は背後の二郎機を親指で指し示した。

「特機にはエンジンなんか搭載されていないだろ？ せいぜい電子部品やモーターを動かす蓄電池が必要なくらいで、燃料はグレムリンの死骸から絞り出した動力溶液のみ。地下の金属資源も化石燃料も殆ど使わない、資源小国にうつてつけの兵器だ」

「……特機の材料がグレムリンだというのは教えられました。けど、そういう経緯があったというのは初耳です」

特機が有する兵器としての優位点は、大きく分けて二つ。

一つ目は、戦車を初めとする戦闘車両が立ち入りづらい場所に、歩兵では扱いにくい高火力を持ち込めること。特機が山狩りや残党狩りに用いられるのは、この特徴を評価されての運用である。

二つ目は、建造素材と燃料の大部分を敵の死体から調達できること。駐屯地に運び込まれたグレムリンの死体は、駐屯地内に設けられた工場で修理用の素材と燃料に加工されることになる。空木が語った話の内容は、まさにこの特徴の裏話ともいいうべきものだ。

「兵器の開発史なんてそんなものだ。乗り込む者は知らなくても構わない知識だよ」

空木はじつよつやく言葉を途切れさせた。その隙を見逃さず、怜次はすかさず口を挟む。

「それで特機と義肢にどんな関係があるんですか」

すると、空木は意味深に笑つた

「改めて訊くまでもないだろ？ 君は既に理解しているはずだ。それとも、わざわざ私の口から説明して欲しいのか？」

怜次は思わず口もつた。空木の言つとおりだ。特機の操縦士が先ほどの解説を聞けば、嫌でも空木の言わんとするこ理解できてしまうだろ？

空木が三号機のに田をやる。

開けつ放しの胸部装甲の上から、月子がこちらを見下ろしていた。何故かは分からぬが、月子は驚きに田を丸くしているようだつた。

「さて、君の相方は仕事を終えたらしい。私はそろそろお邪魔するよ」

急いで脚立を降りる月子から逃げるよう、空木は踵を返した。そして、去り際に意味深な言葉を残す。

「『それ』は既に完成している。どうして世に普及していないのか考えてみると？」

空木が格納庫から姿を消した直後、月子が急ぎ足で駆け寄つてきた。

「久我さん！ さつきの女に変な」と言われなかつたか？
「いや、ただの雑談だつたよ」

嘘は吐いていない。客観的に見れば、日本の資源事情と特機開発の関連について熱く語られていただけだ。知的な会話をしていたのだと誤解される可能性はあるかもしれないが、変な話題だと言わることはないだろ？

しかし、怜次の胸の奥では、許されない嘘を吐いたかのような不

安感が渦巻いていた。

「やうか……考えすぎか」

円子は左手で右の一の腕を抱き寄せた。きっと癖になつているのだろう。一緒に仕事をしていて頻繁に口にする格好だ。

怜次は椅子代わりにしていた資材から腰を上げ、あえて明るい声を出した。

「さて！ メンテも終わつたし、ゆつくり休むか」

「そうだな。午前中に終えられてよかつた。早く宿舎に戻るとしよう」

ちよつど居合させた整備員に施錠を任せて、怜次は円子と連れ立つて格納庫を後にした。

男性用の宿舎と女性用の宿舎はそれぞれ別個に用意されている。だが、極端に離れて建つてゐるわけでもないので、格納庫からの帰り道は男も女も変わらない。厳密に言えば、男性用宿舎が格納庫と女性用宿舎を結んだラインの延長線上にあるという位置関係だ。

「いつもしていると、部活帰りに不純異性交遊でもしているみたいだな」

唐突に、円子がとんでもないことを言い出した。

驚いて振り向くと、口の端を上げて挑発的に微笑んでいる円子と目が合つた。これは彼女なりの笑い方であり、別に相手を馬鹿にしているわけではない。

怜次はそれをしつかり理解していたので、普通の雑談らしく冗談を言い返した。

「意外と経験豊富ってか。お盛んで羨ましいよ」

「失礼な。これでも異性関係の絶無さには昔から定評があるんだ」「定評じやなくて悪評つて言つんじやないか？」

下らない雑談に興じているうちに、一人は女性用宿舎の前に到着していた。男性用宿舎は、この道を一、二分ほど歩いた先にある。

「久我さん……もう少しだけ、立ち話をしたいんだが」

月子は声を潜めてそう言った。せつときまでの冗談めかした口調とはまるで違う。真剣な、そして不安そつた声だ。

「榎さんの教科書に書かれていた落書き、久我さんも見たんだろう？」

一瞬、呼吸を忘れた。

どうしてあのことを知っているのか。そう聞き返そうとしたが、上手く言葉が出てこない。怜次の動搖をよそに、月子は俯き氣味に発言を続けた。

「私と榎さんは同室だから、たまに視界に入るんだ」

「榎は……気にしてないのか？ あんなものを他人に見られて……」

怜次は曖昧な問いを口にするのが精一杯だった。月子の言い方だと、玲菜は例の殴り書きを隠すわけでもなく、平然と教科書を広げているとしか思えなかつた。それはもはや、怜次の想像の埒外にあら光景であつた。

「違う。それは『あんなもの』なんかじやないんだ。私達にとつては『当たり前のこと』なんだ。特別採用に縋るような人は、少なかつ

らすああいう感情を抱えている。教育隊でも神さんのような子はたくさんいたよ」

月子の表情が哀しげに歪む。線の細い左手が右腕を握り、包帯に爪を立てる。

なんてことだ。怜次は己の浅はかさに絶望すら覚えた。

特別採用制度で軍に入った子供達は、通常の生活を送れないほど追い詰められた環境に置かれている。つまり、玲菜のような心境や行為は決して異質なものではなく、外聞を気にして隠したりする対象などではないのだ。

例え他人に見られたとしても、異常だと思われることを恐れたりはしない。精々、個人的な日記帳を見られるのに近い羞恥心を感じる程度。何故なら、それが彼女達にとっての当たり前なのだから

「……悪い。考えが甘かった
「ち、違う！ そうじゃないんだ！」

月子が珍しく慌てた様子で取り繕う。

「神さんや上原さんのことを見られて欲しくない……。出来る限りいいから、普通の態度で接して貰いたいんだ」

彼女達の『当たり前』を、怜次の『当たり前』の態度で受け入れる。そんな『当たり前』のことを、月子は心の底から申し訳なさそうに口にした。それとも、月子の中の久我怜次という男は、こんな頼み方をしなければならないような人物なのだろうか。

あの子達の良い先輩に いつか誰かに言われた言葉が、頭の中で反響していた。

第十話 急転する運命

一一〇一一年 十月十三日 兵庫県伊丹市 伊丹駐屯地

「 以上が、九月末から十月初頭にかけて得られたサンプルの分析結果です」

天野大佐は壇上から薄暗い会議室を見渡した。橢円形のテーブルに座した軍人達は、誰もが重苦しい表情で前方の大型スクリーンを見やっている。彼らは中部方面隊に属する師団や旅団といった大部隊の司令官であり、天野大佐よりも階級の高い将官ばかりである。

スクリーンに映し出された日本地図上の二つの赤い光点は、それぞれ九月末と十月初頭に交戦したグレムリンの出現地点を示している。

「これら二つのサンプルが、上海戦役において我が軍と交戦した勢力の個体であることはほぼ間違いないと思われます」

将官達の間でざわめきが広がる。

「よりによつて上海の勢力か……」

「本州上陸を察知することすらできないとは… 海軍と西部方面隊は何をしていたんだ！」

「まあ、待て。大規模な移動ならともかく、少数の群れが隠密に行動した場合は警戒網を潜り抜ける場合もある」

「少数の群れだと？ 新たな女王が巣立つたとでもいうのか」

議論ともいえない憶測が飛び交う。情けないが無理もないことだろつ。上海戦役には中部方面隊の部隊も数多く送り込まれ、甚大な

被害を出した。あの悲惨な戦いは陸上自衛軍のトラウマになつてゐるのだ。上海の勢力が本土上陸を果たしたかもしないという可能性だけでも、彼らの判断力を低下させるには充分過ぎる。

鳥合の衆と化した将官達を静めたのは、上座に座る男の一言だつた。

「上海では圧倒的物量に敗れたのだ。少數ならば脅威にはなるまい」

軍服に中将の階級章を付けた将軍が会議室を睥睨する。他の将官達は 階級が同じはずの中将も含め 無為な憶測を口にするのを止めた。

中部方面隊方面総監。それが、あの将軍の肩書きである。

方面総監とは方面隊隸下の師団長や旅団長を束ねる、いわば軍団長とでも言つべき役職だ。この場の誰よりも強力な権限を持つ人物だが、将官達が押し黙つたのは、むしろ彼自身が持つ威圧感によるものに違いない。

「天野大佐。上陸した勢力の女王がどこにいるか推測できるかね」「はつ。サンプルAは鳥取県北東部、サンプルBは島根県南部で発見されています。しかし、勢力の移動経路は西から東であると考えられるため、移動についていけず落伍した個体である可能性は低いと考えられます」

天野大佐はレーザー・ポインタでスクリーン上を指し示しながら話し続ける。

「本当に可能性はないのか?」

「サンプルAの発見とサンプルBの発見の間には一週間のタイムラグがあります。そもそも、サンプルBと遭遇した地点は他の勢力の巣を潰したばかりの地域です。多くの部隊が残党狩りを行つてゐる

中で、一週間も存在を認知されないのは考えにくいでしょう

サンプルB、つまり海星型のグレムリンは作戦行動中の特機に奇襲を仕掛けるほど好戦的な性格だ。目撃すらされていないというのを考えにくい。しかも、日本には存在しない特徴的な外見なのだから。

「結論を申し上げます。上陸勢力を率いる女王は、中国地方または近畿地方西部に潜伏しており、サンプルとして回収されたグレムリンは斥候であると推測されます」

再び会議室がどよめく。しかし、今回は方面総監によつて素早く制された。

「こちらも君と同じ仮説に至つている。数日中に徹底的な掃討を行う必要があるだろう。天野大佐。君の部隊にも働いてもらうことになるな」

「承知しています、黒河内中将」

一〇一一年 十月十三日 岡山県岡山市北区 三軒家駐屯地

この日も、三軒家駐屯地は日を見張るほどの騒がしさだった。道という道を大小様々な輸送車両が行きかい、無数のコンテナや積荷が右へ左へ運ばれていく。その合間を縫つて、輸送大体の隊員達が休むことなく駆け回つていた。

虎彦は最近新築されたという新本部ビルの三階から地上の様子を

見下ろしながら、懐かしそうに呟いた。

「相変わらず、二二二は騒々しいな」

二二の駐屯地は西日本の物流の要だ。兵庫以東から持ち込まれる物資は一旦二二の駐屯地を経由して、中国地方の各地や四国、九州へと運ばれる。逆に兵庫以西から東海、近畿、北陸へと向かう物資も同様である。

基地を眺めている虎彦の隣に、スカートスーツに身を包んだ妙齡の女がやってきた。二週間ほど前、小隊発足の日に会った技術研究本部の空木都子技官だ。

「久し振りだな、日向中尉。色のお陰で遠くからでもよく分かったよ」

「こんな髪でもその点では重宝してるよ。といひで、半月は鳥取にいると聞いていたんだが、今日はどうしてここにいるんだ？」

「ただの日帰りの出張さ。荷物はあちらに置いてある」

軽い挨拶を交わした後で、空木は大きな封筒を渡してきた。受け取つてみると意外に重量がある。

「一〇式の最新版仕様書と引き渡し書類だ。後で天野大佐にも見せておいてくれ」

そして空木は口元を緩めた。

「確か五週間で四機という約束だつたな。まずはこいつが一機目だ。残りも三週間以内に配備できる田処が立つていて。ついでに新しい装備を幾つかオマケしておいた」

「性能は大丈夫なんだろうな」

空木は「当然」と言つて、虎彦について来るよう促した。

本部ビルの隣の建物まで移動して、巨大なシャッターを空木が持つていたカードキーで開ける。シャッターの向こうは広大な格納庫になっていた。第三小隊の格納庫の軽く五倍はありそうな威である。三式が立ち並ぶ格納庫の一角に、異質な機体が鎮座していた。

大きさは三式と同程度だが、陸上兵器らしい無骨さを持つ三式とは逆に、戦闘機を思わせる洗練されたフォルムを有している。そんな印象を受けるのは、まだ迷彩が施されておらず、素材自体のメタリックな質感が残されているせいだろう。

三式と同じ迷彩をすれば、多少は兵器らしく見えそうだ。

「一〇式筋動力一脚一腕型特殊駆動機械 通称一〇式特機。三式の優れた操縦性を引き継いで、骨格と筋肉配置を中心に構造を改善。運動性を向上させた機体だ。三式より分厚い装甲を装備したり、一〇式リ砲の強烈な反動を受け止める」ことも可能になつてい。

そこまで言つて、空木はにやりと笑つた。

「要するに、攻撃力、防御力、スピードの全てで三式を上回る機体だ」

空木は一〇式の性能によほどの自信を持つてゐるらしい。

三式の正式採用から七年も掛けて完成にこぎつけ、採用後も本格生産までに一年近い改良期間を経てここまで来た兵器なのだ。平時ならともかく、戦時中の新型開発としては難産というより他にない。性能もそれに見合つたものでなければ、これまでの苦労が無意味になつてしまつ。

「三式の操縦性を引き継いだといふことは、簡単に乗り換えられる

のか？」

「もちろん。機体の性能自体は上がっているが、三式乗りなら一〇式にもすぐ慣れるはずだ。ここで試乗してもらいたい所なんだが、もう少しづばかり調整が必要でね。それと、迷彩塗装はそちらでやつてくれ」

特機としては最新最高の性能を持つ新型機。これ以上なく頼もしい筈の存在を前にしても、虎彦は内心の不安を拭いきることができなかつた。

自分達は一手遅かったのではないか。

そんな懸念が泡のようになび、弾けることなく増え続けていた。

一一〇一一年 十月十三日 鳥取県八頭郡八頭町落石

獄山山中。

鬱蒼と茂る木々の奥、山道から遠く離れた場所に、それは座していた。

月の光からも見放された深い窪地。その奥底で白い塊が蠢いている。

膨らみ、泡立ち、弾け、碎けた波頭のような形で静止する。純白の熔鉱炉じみた地獄の泉から、鋼の獣が鼻先を突き出した。牙を剥き、窪地の壁に爪を立て、ずんぐりとした六肢でその巨体を押し上げていく。

金属質の獣が遂に外気に触れる。新たな同胞の誕生を、巨木の頂から六脚の大蛇が見下ろしていた。

機械の獣が大いなる主を仰ぐ。彼らに言葉があつたのなら、声を

揃えて高らかに謳つていたであろう。雌伏のときは終わった。陸を駆け、海を渡る日々はもう来ない。今こそ雄飛のときを迎え、この地に樂土を築けりつゝや

一一〇一一年 十月十四日 津ノ井駐屯地 男子宿舎

緊急放送が駐屯地にけたましく響き渡る。怜次は暗闇の中で飛び起きて、大急ぎで電灯のスイッチを入れた。壁時計の表示は午前三時過ぎ。まだ早朝と呼べる時間ですらない。

「起きろ長谷川！」

同室で眠つてゐる翔也を大声で叩き起こしながら、制服の袖に腕を通す。こんな警報は軍に入つて初めてだ。訓練の一環として真夜中に起こされたときもあつたが、それとは明らかに雰囲気が違う。翔也はしばらくベッドで寝ぼけていたが、並々ならぬ気配を感じ取つたのか、転がり落ちるようにベッドから降りた。

「何があつたんですか！」

「俺に聞くな！ とにかく格納庫に急ぐぞ！」

一分足らずで制服を着用し、部屋を飛び出す。廊下は格納庫へ急ぐ他隊の隊員達でごつた返していた。怜次と翔也もその流れに乗り、駆け足で宿舎を後にする。

女子宿舎の前を駆け抜けたところで、岸田兵長や月子達と合流した。亜由美と玲菜も緊急事態に面食らいながらも兵長の後を追つて

きていた。

怜次は岸田兵長に併走しながら声を掛けた。

「岸田兵長！ 今の警報は……」

「敵襲みたいね。詳細は分からぬけど、まさか隊長不在のタイミングで来るなんて」

その会話を聞いていた亜由美が、横合いから驚きの声を上げる。

「隊長つて……小隊長がいなんですか？」

「昨日から新型機の引き渡しで岡山に行つてゐるよ。今日の朝には帰つてくる予定だったのに……よりによつてとしか言えないわ」

「そんな……」

亜由美は絶句した。他の面子も同じ心境に違ひない。

転々と灯された照明を頼りに、真夜中の駐屯地を走り続ける。格納庫に近付くにつれて、怜次は事態の深刻さを否応なしに理解させられた。

各小隊ごとに設けられた格納庫から、次々に特機が姿を現していく。特機は五機、十機、二十機と数を増やしており、このままでは第三特機群の全機体が出てくるのではないかと思わされてしまうほどだ。

否、実際に全部隊に出撃命令が下つてゐるのだろう。それはともかく、おさす、全部隊を動員しなければならないほどの緊急事態が生じたことを意味する。

第三小隊の格納庫に足を踏み入れると、猪熊曹長が他隊の士官と怒鳴り合つてゐる光景が目にに入った。

「曹長ー！」

岸田兵長もそちらに駆け寄っていく。後に残された怜次達新兵は、ただその場に立ち尽くしていることしかできなかつた。

「怜次さん、私達はどうすれば……」

玲菜が不安そうな声を漏らす。

銀縁眼鏡の中尉と猪熊曹長のやり取りから察するに、第一中隊の第三小隊は出撃すべきかどうかも判断できぬ状況に陥つてゐるらしい。出撃命令は全体に下つてゐるのだが、小隊長が不在な上に年少兵まで抱えている第三小隊を出撃させるべきなのか、司令部が決めかねているとのことだった。

怜次は必死になつて言葉を探した。玲菜の不安は、今何をすべきか分からぬことに原因がある。それを解消するには、やるべきことを提示してやるのが最も確実なはずだ。

考えが纏まつた直後、怜次は咄嗟に声を上げていた。

「猪熊曹長、念のため出撃の準備だけはしておきましょーうー。
「それもそつだな。総員、出撃準備を整えておけ！ 追つて指示を
出す！」

曹長の号令を受け、第三小隊の面々は格納庫隅の簡易更衣室へ駆け込んだ。その中で、怜次は大急ぎで制服から戦闘服に着替えていく。何度も繰り返した作業だが、焦れば焦るほどに、袖や裾が引っかかつて余計な時間を浪費してしまう。

格納庫から出たところで、怜次は月子と鉢合わせた。
二号機へ向かう足を緩めることなく、月子は眼差しを伏せる。

「久我さん。この騒ぎは多分、大規模な戦闘の前触れなんだろ？」「……不安なのか？」

円子の唇がきゅっと引き結ばれる。否定するわけでもなく、軽口を言い返すわけでもない。まさか本当に凶星を突いてしまったのか。怜次は己の軽率な発言を悔やんだ。大規模な作戦を前にして、相方を不用意に緊張させるなんて愚の骨頂だ。

何とかしなければ。そう思つたときには既に身体が動いていた。少し前を走る円子の背中に掌を叩きつける。

「うわっ！ な、なにを……！」

「大丈夫だ！ 何かあつても、俺がどうにかしてやる」

円子はぽかんとした様子で目を瞬かせた。

我ながら氣恥ずかしい大見得だ。安請け合いにも程がある。だが、言葉にしなければ自分の心に響かない。

これは自身への檄なのだ。何かがあれば死ぬ氣でどうにかしろ己に対する命令だ。

やがて円子は表情を引き締め、いつもどおりの不敵な笑みを浮かべた。

「信頼したからな？ もう撤回はできないし、させないぞ」「んな」とするかよ。——言はない

三脚機の傍に設置された脚立に足を掛け、ふと岸田兵長の方へ振り返る。兵長は怜次のことを眺めて微笑んでいたように見えた。

君ならあの子達の良い先輩になつてくれそつだと思つて

以前、岸田兵長から言われた言葉だ。あのときは何かの「冗談」と思つていたが、今なら兵長の気持ちが痛いほど理解できる。

しかし、こんなやり方でも良かつたのだろうか。

姑息な時間稼ぎで気を紛らわせ、実行できるかどうかも分からな

い約束をぶち上げてその場を誤魔化す……嘘も方便という言葉もあるが、これでは彼女達を欺いているに等しい。もし、この懸念を岸田兵長に打ち明けたら、どんな表現で煙に巻いてくれるのだろう。

「……つたく。どうして、いつも言われたとおりになつちまうんだ」

怜次は三号機の狭小な後部座席に身を沈め、自嘲気味に笑つた。岸田兵長の言葉だけではない。空木と知り合つたときに告げられた、呪いのような推測……怜次のところには彼女にとつて興味深い出来事が集まつてくるという発言も大当たりだ。

「総員注目！ 司令部から通達が下つた！ 我々第一中隊第三小隊も作戦に参加する！」

猪熊曹長が声を張り上げる。予想できていたとはいえ、冗談とか思えない状況だ。

前部座席で、月子が拳を握り締めたのがはつきりと見えた。

第十一話 強きもの、弱きもの

一一〇一一年 十月十四日 鳥取県八頭郡 県道二三百八十一号線

津ノ井駐屯地から山を一つ越え、更に南東。兵庫県との県境の山地へ繋がる県道を、数輜のトレーラーが列を成して走っていた。

それらの荷台には、一輜、一機の特機が跪くような姿勢で載せられている。三五ミリ機関砲と巨大な弾倉を装備し、ワイヤーによって荷台に固定されたその姿は、静まり返った夜の山村において隠しようのない異彩を放っている。

「なんだか不気味だな……」

走行中のトレーラーから生じる震動が、特機の操縦席にまで伝わってくる。

怜次は暗く狭い後部座席に身体を押し込んだまま、後部用ディスプレイに視線を落とした。頭部の暗視力カメラが映し出す風景は、トレーラーの向かう先を暗示するかのように、不気味に静まり返っていた。

前部座席の用子が、怜次の咳きに振り返ることなく答える。

「住民の避難は済んでいるみたいだね。流石に警察の対応は迅速だ」

確かに、里山沿いに建ち並ぶ家々からは人の気配が感じられない。夜も更けているので眠っているのだろうとも思つたが、状況を考えれば避難していると考えるほうが自然だらつ。

「これなら少しば戦いやすいんじゃないかな」

「……正直、あまり変わらない気がするぞ」

いつもの軽口もこわばつて感じられる。月子も少なからず緊張しているようだ。

怜次達は未だに詳細な戦況を教えられていない。より正確に言つと、軍の上層部も詳しい情報を得られていないらしい。猪熊曹長曰く、確かなのは鳥取県南東部に纏まとった敵勢力が出現したということだけで、何故そんなものが現れたのかも定かではないそうだ。

『総員。今回の作戦内容について通達する』

通信機から猪熊曹長の声が流れる。怜次は気を引き締めて通信機の音声に耳を傾けた。

『我々第三特機群は、主力となる戦車部隊と歩兵部隊が到着するまでの間、敵勢力の市街流入を阻止する役割を与えられた。いわゆる足止めという奴だ。主力部隊は岡山県側の駐屯地から派遣される手筈になつていて、我々の到着から最大三十分程度遅れる計算になる』

三十分　怜次は暗闇の中でぎゅっと拳を握つた。

不意に操縦席の前方で明かりが灯る。見ると、月子がペンライトを片手に、狭い前部座席一杯に地図を広げていた。

『第一中隊から第三中隊までは県道二百八十一号線を直進し、敵勢力が発見された場所へ直行する。第四中隊と第五中隊は南の国道二十九号線を進み、南から敵勢力へ接近。同時に、敵勢力が南回りの迂回進路を選んだ場合に備えている』

『どうせなら、私達を楽そうな方に回してくれたらよかつたのにね』

岸田兵長が冗談めかして口を挟む。隊員達の緊張を解きほぐそう

してくれたのだろう。だが、今回の任務には楽そうな方など存在しなかつた。

怜次達が進む県道は市街地への最短経路であり、グレムリンの群れが市街襲撃を考えたとしたら、十中八九通過するコースである。一方、別働隊が進んでいる国道周辺の街並みは、県道周辺よりも規模が大きい。手早い餌場を探しているとしたら、狙われるのはこちらだ。

結局、どちらも同じくらい危険な任務なのだ。

『偵察に向かつた先遣隊の情報によると、敵勢力は獄山周辺に留まつていて。我々第一中隊は県道三十七号線との合流点に布陣。第二中隊と第三中隊は南北に分かれて獄山を包囲する。後の指示は目標地点に到達してから行う。通信は以上だ』

短い雑音を立てて通信が途切れ。

獄山とは、県道一百八十一号線の終点付近にそびえる、標高八百メートルほどの山である。地図によると、南東へ伸びる一百八十二号線と、南北に蛇行する三十七号線は、この山の少し手前で合流している。その合流地点が、怜次達の戦場となるのである。

「久我さん……」

月子が囁くように切り出した。その声は明らかに不安に沈んでいる。

「もし、私がこの前みたいになつたら……そのときは、無理矢理でもいいから止めてくれ

怜次は一瞬言葉を失った。猿政山での一件は、怜次が思っていた以上に、月子の心境に影響を与えていたのだろう。ただ、あの戦い

の何が影響を与えたのかまでは分からない。まともな反撃も出来ずに翻弄されたことか、それとも

「…………」

いや、今はそんなことを考えているときではない。月子が正直に不安を打ち明けてくれたのだ。それに応えなくてどうする。しかし、実行できるか分からぬ約束を交わすことが許されるのだろうか。

あのとき自分は何もできなかつたではといひのに。

「…………黒河内。俺は…………」

怜次の言葉を搔き消すよつて、通信機が猪熊曹長の声を吐き出す。

『二号機！ 九時方向に敵影！』

次の瞬間、重く鈍い衝撃がトレーラーの左から襲い掛かる。まるで大型トラックでも突っ込んできたかのような衝撃に、怜次は操縦席の内側で大きく揺さぶられた。

「ぐひっ…………！」

衝撃は一度だけでは終わらなかつた。巨大な金属の獣がトレーラーの側面に身を押し付け、凄まじい力を加えているのだ。左車輪が浮き上がり、重心が致命的なまでに傾いていく。

「黒河内！」

「分かつてゐる！」

円子は二号機の脚部で荷台を蹴り、右方へと跳躍した。機体を固定するワイヤーが一気に張り詰め、付け根部分の金具ごと引き千切られる。金具の残骸が付いたワイヤーを機体に引っ掛けたまま、二号機は真っ暗な路傍へ飛び降りていった。

道路の高さから一メートルほど落下して、水深の浅い川に着地する。水音の残響消えやらぬ間に、機体頭部の暗視力メラがトレーラーに起きた異常を捕捉した。

横転寸前のトレーラーに、逃げ遅れて荷台に固定されたままの四号機。

そして、強靭な四本の前肢で車体を持ち上げる、金属の巨獸。

「グレムリンッ……！」

円子が三五ミリ機関砲を振り向ける。それを見て、怜次は反射的に声を張り上げた。

「止める！ 味方に当たる！」

熊に似たそのグレムリンは、二号機から見て倒れかけのトレーラーを挟んだ反対側に位置している。ましてや二号機は道路より低い場所にいるため、下方から上向きに砲撃する形になってしまつ。こんな状態で攻撃すれば、十中八九トレーラーと四号機に被害が及ぶだろう。

トレーラーが横転する直前に、四号機が緩んだワイヤーの隙間から脱出した。

『二号機と四号機は敵から距離を置け！ 一号機は俺を援護しろ！』

先行するもう一台のトレーラーから、猪熊曹長が操縦する一号機が降り立つた。その後ろでは、岸田兵長と翔也が乗った二号機が機

関砲を構えている。

だが、グレムリンは他の機体には田もくれず、三号機に向かって飛び掛ってきた。

「……このつー！」

円子が右手のレバーのスイッチを押し、三五ミリ機関砲を連射する。無数の徹甲榴弾がグレムリンの胴体に直撃し、全て外皮の表面で爆発した。

グレムリンが煙を割つて川面に落下する。道路まで降りかかる水柱に気圧されるように、三号機は数歩退いた。

三五ミリ機関砲の徹甲榴弾は、その名の通り装甲を貫徹した後で内蔵の火薬が爆発し、破片と爆風で標的の内部にダメージを与える砲弾である。徹甲弾と榴弾の特徴を兼ね備えた弾薬といえるが、内部爆発を前提とする関係上、貫通力は純粋な徹甲弾ほど高くはない。結果、あのグレムリンの分厚い皮膚を貫くには至らず、表面で爆発を起こすに留まつたのである。

怜次は焦りを堪え、小隊の全機体への通信回線を開いた。

「徹甲榴弾が効かない！　徹甲弾を撃つてください！」

『分かった！　二号機と四号機は攻撃に移れ！』

こういった状況に備え、特機部隊では複数の弾薬を同時に運用している。第三小隊の場合は一号機と三号機が徹甲榴弾を、二号機と四号機が徹甲弾を搭載しているのだ。

『円子ちゃん、下がつて！』

『そこのでかいの！　怜次さんから離れる！』

岸田兵長と玲菜の叫びを皮切りに、砲弾の雨がグレムリンの背中

へ降り注ぐ。音速を遥かに超える徹甲弾がグレムリンの厚い外皮装甲に穴を穿ち、骨肉を抉つて体液を迸らせた。

しかし熊のような姿のグレムリンは、重低音で吼えるばかりで一向に倒れない。

それどころか、不気味な眼光で三号機を睨んでうらうらと見えた。

「何て硬さだ……」

月子は改めて機関砲の砲口を向けた。大して効果がないのは分かっているが、襲つて来るなら迎撃しなければならない。

怜次が後部座席のディスプレイに視線を落とした瞬間、画面の奥に異変が生じる。

路上から砲撃を続ける一號機と四號機の後方、山肌に生い茂る広葉樹の枝葉が不自然に揺れ動いたのだ。まるで、猿政山のグレムリン ブエルが現れたときのように。

「後ろだ！」

叫ぶが早いが、高速回転する円盤が一號機に襲い掛かる。

『うわっ！』
『きやあっ！』

鋭い鉤爪に右肩から背部にかけてを切り裂かれ、一號機は路面に膝を突いた。同時に機関砲から吐き出される砲弾が途切れ、弾切れのときと同じ音が虚しく響く。左背部の弾倉から右腕の機関砲へ弾薬を送る弾帯は、柔軟に動く金属製カバーで保護されている。それが破断したために、機関砲に砲弾が供給されなくなつたに違いない。一號機を無力化した謎の円盤は、路面にぶつかつてから跳ねるよ

うに浮き上がり、速度を減じて正体を現した。

猿政山で遭遇したグレムリンと同じ、六本の触腕を有する海星型。回転速度が速過ぎて円盤状に見えていたのだ。

『伏兵か!』

すかさず一号機が機関砲を連射し、落下中のグレムリンを粉々に破壊する。

それと前後し、大熊のグレムリンが水飛沫を上げて駆け出した。

「黒河内、来るぞ!」

「分かつてん!」

大量の体液を迸らせながら、巨体が三号機へ突っ込んでくる。二号機の射撃が途切れたことにより、大熊に浴びせられる砲弾の絶対数が半減。結果、あの巨体を押さえ込むことができなくなつたのだ。月子がグレムリンの頭部目掛けて砲弾を乱射する。厚い外皮のない眼球と口腔に徹甲榴弾が突き刺さり、肉の中で爆風と破片を撒き散らす。

だが、それでも敵は止まらなかつた。片目を潰され、口から体液の反吐を逆流させながら、瞬く間に三号機へ肉薄する。

「しまつ」

咄嗟の後退も、僅かに遅い。逆袈裟に振り上げられた大熊の腕の先端が、三号機の胸部装甲の端に引っかかる。

たつたそれだけの接触で、三号機は紙切れのように吹き飛ばされた。

緩やかな放物線を描き川岸に激突。操縦席を凄まじい衝撃が襲う。

「ぐひ……」

怜次は苦痛に歯を食い縛りながらも、ディスプレイから田を離すまいとした。

川中に立ちはだかる屈強のグレムリン。
その胴体が、二つに千切れで吹き飛んだ。

「あ

一瞬の出来事だった。グレムリンの脇腹が突如として抜けたかと思つと、間髪入れずに巨大な穴が穿たれたのである。

衝撃波が大気を殴りつけ、水面を激しく波立たせる。その轟音は三号機の操縦席の中にまで響き渡つた。

やがて周囲に静寂が戻つた頃、通信機から若い男の声が聞こえてきた。

『　えるか　聞こえるか？　』あら日向。これより第三小隊に合流する』

日向中尉だ！　怜次が驚きに言葉を詰まらせていると、他の機体からの音声が次々と飛び込んできた。

『虎ちゃん！　よかつたあ……』

『中尉殿！　申し訳ありません、待ち伏せを受けたようです』

『え、マジで隊長？　どうしたですか、その機体！』

錯綜する交信を聞きながら、怜次はシートに体重を預け、安堵の溜息を吐いた。

助かった　情けないかもしれないが、素直にそう感じていた。

日向中尉が駆けつけてくれたのもそうだが、月子にも感謝しな

ければなるまい。トレーラーからの離脱と、先ほどの回避を成功させたのは、他でもない月子自身の技量なのだから。

「また……助けられた……」

だが、前部座席から聞こえてきたのは、今にも泣き出しそうな声だった。

怜次は掛けるべき言葉を搜したが、結局、何一つとして見つけることができなかつた。

「黒河内。操縦は俺がするから、少し休んでくれ」

やつとのことでその一言を絞り出す。月子は無言で頷いて、後部座席に全てのコントロールを委譲した。

迂闊だった。月子にとつて、今の戦いは猿政山の再演だ。力の限りを尽くし、それでも敵を倒すことができず、日向隊長によつて助けられる。怜次にとつては幸運な出来事だが、月子もそう感じるのは限らない。それを理解できなかつたのは、あまりにも愚かだ。

未明の閑散とした駐車場に五体もの特機が跪いて並んでいる。それらのうち、無傷の三式は一号機と四号機。二号機は機関砲と右腕が破損し、三号機は胸部に傷が刻まれている。

そして迷彩塗装の三式に混ざった、未塗装の鈍色の特機……〇式。

虎彦は駐車場に集まつた隊員達を見渡した。携帯用のランプに照らされた彼らの表情は、それぞれ三者三様の顔色を浮かべている。

「朝になるまで帰つてこないと思ったのに、ほんと良いタイミングで来てくれちゃつたね」

佐代子が微笑みながら囁く。

「嫌な予感がしたからな。輸送隊の連中に無理言つて早めに出発してもらつたんだ」

無論、完全な直感だつたわけではない。中国山地に潜む敵勢力が上海由来の群れなら、好む戦術も同じに違いないだと考えたのだ。猿政山で三号機が受けたような、不意打ちの強襲から大打撃を与える戦術。上海では、莫大な物量でそれをやられ、甚大な被害を出してしまつた。

グレムリンにも獸並の知性はある。一度も手勢が倒されたのだから、本格的な攻撃が近いと予想して、先手を打つたとしても不思議ではない。

「猪熊曹長。現在の状況はどうなつてゐる

竜馬は不意に矛先を向けられたにも関わらず、予め命じられていたかのように、淀みなく戦況を報告し始めた。

「先行していた第一、第二中隊は獄山周辺にて戦闘中。第一中隊の他の小隊は、作戦を変更して周辺の森林や山地を索敵しています。

第四、第五は三分後に獄山に到着する予定です。」

「別働隊の伏兵が撃破されたから、獄山の本隊を動かしたということころか」

伏兵自体は特機を一機半壊させたに留まつたが、その効果は大きかつた。他の別働隊の存在を考える必要が生じたせいで、獄山へ向かうはずだった第一中隊が山狩りをしなければならなくなっている。つまり、最前線の戦力が予定より手薄になつたということだ。

虎彦は暫し考えてから、竜馬に指示を飛ばす。

「機体の割当てを変更する。一号機は現時点を以つて編成から除外。今の一号機を二号機にスライドさせ、俺が乗ってきた機体を新しい一号機とする。操縦士の配分はいつもの通り。以上の内容を中隊本部に具申しろ。」

「了解しました」

具申、つまり上への提案といつ形だが、実質的にはただの事前報告でしかない。一刻を争う緊急事態なのだから、中隊本部も一つ返事で許可を出すに決まっている。

通信機を使うために機体へ戻る竜馬の後ろを、翔也が駆け足で通り過ぎていった。何事かと目で追うと、翔也は佐代子の目の前で立ち止まり、やけに改まつた態度で何か話しかけているようであつた。

「申し訳ありません。あれは自分のミスです。後方の警戒を怠つていきました」

「あれは仕方なかつたと思うよ。けど、正直に反省点だと思えたのは偉いね。今度はそれを次に活かせばいこよ」

佐代子はまるで歳の離れた弟に接するような態度で、落ち込む翔也を励ましている。

虎彦はさり気なく視線を外した。客観的に見れば望ましい関係と言えるのかもしれないが、こればかりはどうしても主観的な感想を抱かざるを得ない。果たして佐代子は、あの笑顔の下にどんな思いを抱いているのか　それを思うだけで見ていられなかつた。

「日向隊長。あの機体と大砲はどうしたのですか？」

不意に声を掛けられ、虎彦は反射的に振り返つた。

駐車場の中央に置かれた電燈を背に、亜由美が背筋をしゃんと伸ばして立つている。逆光のため表情はよく見えないが、いつもの肩が凝りそうな真面目顔をしているのだろう。

「ん、あれか。三式に代わつて配備される予定の新型だ。本当は駐屯地まで持ち帰るだけのつもりだつたんだが、現場の判断で実戦投入つて奴だな。で、大砲の方は……」

虎彦は一〇式　新たな一号機に目をやつた。

その足元には、特機の全長を上回るサイズの砲が置いてある。前半分は細く、砲身そのものが剥き出しになつてている一方で、後ろ半分には幾つもの装置が大袈裟に盛り込まれている。

特機が腕を入れて固定するための孔と、もう一方の手で掴むための外部グリップ。砲弾等を詰め込んだ大型マガジンと自動装填装置を保護する装甲。シリンドラー型の大型緩衝装置。最後部には、砲撃の反動を相殺するカウンターウェイトの発射装置が配置されている。これこそが一二一〇ミリ滑空砲特機仕様。ドイツのラインメタル社が開発した戦車砲に対し、徹底的な低反動化と携行化の改造を加えた代物だ。強引な改造を重ねたせいで砲としての性能自体が低下し

ただけでなく、最新鋭の一〇式ですら一発撃つと転倒しそうになるといつ、まさに曰くつきの新兵器である。

システム総重量は四トンを上回って五トンに迫り、両腕を使って支えなければ歩くことすらままならない兵器だが、特機が扱える火力としては最強。戦車の運用が難しい戦場に、これを担いだ特機を一機送り込めば非常に頼もしい存在となるだろつ。

以上の内容を、虎彦は一言でまとめて口にする。

「クソ重くて死ぬほど反動がキツいが、桁外れに強力な試作兵器だ。戦車砲の改造品だな」

「はあ……」

亜由美は理解したのかよく分からぬ表情で、曖昧な相槌を打つた。

『一〇式は一一〇ミリ砲が撃てる』といつ空木の言葉は嘘ではなかつた。本物の戦車には到底及ばず、連続射撃も難しい代物ではあるが、確かに扱うこと自体はできている。

そして何より、一一〇ミリ砲が誇る長射程のお陰で三号機を襲うグレムリンを狙撃できたのだから、役に立つたのは間違いない。

「……そう言えば、三号機の二人はどうだ？」

さり気なく尋ねると、亜由美は言葉を濁しながら駐車場の隅に目線を動かした。

虎彦はそれ以上何も訊ねずに、電燈の光が届かない隅へと歩いていく。

そこでは、コンクリート製の車止めに座り込んだ田子のことを、怜次と玲菜が心配そうに見下ろしていた。

「あつ、隊長……」

玲菜が虎彦の接近に気付いて身を引く。

虎彦は俯いた月子の前で立ち止まり、落ち着いた声色で話しかけた。

「随分投げ飛ばされたみたいだが、身体に異常はないか？」
「……ありません」

声に霸気が感じられない。相当塞ぎ込んでいるのが手に取るようにな分かった。その理由については容易に想像できる。猿政山での戦いと、今回の戦闘。一度に渡つて不覚を取つた事実が彼女を追い詰めているのだろう。

虎彦は傍らに立つ怜次を横目で見やつた。怜次は虎彦が近くにいることすら気付いていないかのように、月子のことを真剣な眼差しで見つめている。

昏い空を仰ぐ。虎彦には『黒河内月子を死なせてはならない』といつ命令が下されている。しかし、仮にそんな命令が存在しなかつたとしても、部下を死なせるつもりなどない。

だからこそ、今回ばかりは月子の意に沿わない指示を下すしかなかつた。

「三叩機は一時後退。下津黒に設営している臨時整備場で、点検と整備を受ける」

月子がハツと顔を上げる。その大きな黒い瞳は、驚きと困惑の色に塗り潰されていた。

安全圏への後退　この命令は事実上の戦線離脱を意味している。現在の月子の精神状態では、戦況を無視して無謀な戦いに手を出しかねない。精神面の不安要素が他の隊員の誰よりも大き過ぎる。しかし、これは月子から挽回の機会を奪うことをも意味する。

翔也が失敗を生かす好機を得た一方で、月子はそれすら失つ」とになるのだ。

「久我。整備場に着くまでの三号機の指揮はお前に任せる」「……はい」

歯切れこそ悪かったが、怜次は確かに返答した。

本人には自覚がないかもしないが、この小隊では彼以上に月子と相性のいい者はいない。負けん気が強い月子をベテラン兵と組ませるのは難しく、同じ年少兵では、月子を『死なせてはならない』理由が壁になる。

だからこそ、怜次が最適なのだ。

虎彦は踵を返し、駐車場の中央で待機している残りの隊員達に向き直った。

「一号機、二号機、四号機を起こせ！ 前線部隊の支援に回るー。」

一一〇一一年十月十四日 鳥取県八頭郡 県道二三百八十一号線
沿線

冷たい夜風が耳元を撫でて通り過ぎる。夜明けはまだ遠いようだ。怜次は真っ暗な駐車場を照らす携帯用電燈を持ち上げ、光量を絞つた。駐車場の片隅に佇む三号機が夜闇に飲まれ、その輪郭を薄れさせしていく。

誘蛾灯というわけではないが、暗闇の中でぼつりと灯っている明かりは、敵にとつても丁度いい標的になつてしまつ。かといって、完全に明かりを消してしまつと自分達の行動に支障が出る。電燈の光量は適切に調整する必要があつた。

怜次は一抱えもある電燈を三号機の足元に置いてから、コンクリートの車止めに座り込んだ月子のところへ歩いていった。

「黒河内……大丈夫か？」

「本当にそう見えるなら、君の日は節穴だね」

月子は冗談めかした口振りでそう言つと、乾いた笑みを浮かべた。他の隊員達は既に前線へ向かつている。この場に残つているのは怜次と月子の二人だけで、残されているのは損壊した一号機と無傷に近い三号機だけだつた。

周囲の暗闇が与える奇妙な圧迫感のせいで、密室に一人きりで取り残されたかのような錯覚を覚えてします。

「別に、誰かのことを恨んでるわけじゃないんだ。中尉の判断は正しかつたとも思つてゐる」

置き去りにされた事実を瞳つよつて、月子は小さく首を横に振つた。

「ただ……自分の弱さが嫌になつた。それだけなんだ」「……焦らなくてもいいだる。訓練が終わつて、まだ半月なんだからさ」「

小隊結成後初めての出撃で無様な結果に終わったことを悔やみ、日々の些細な訓練にも妥協を許さず、今もこつして実力のなさを嘆いている。これを焦りと言わず何と言つ。

意外なことに、月子はあつさりとそれを認めた。

「そうだね……確かに私は焦つてゐる。でもね、久我さん。こんなご時勢だと、焦らずにはいられないこともあるんだよ」

怜次を見上げる月子の表情は、大人びてゐるようでいて、今にも泣き出しそうな子供の顔のようにも思えた。

何も言えず、口を閉ざすことしかできなかつた。良くも悪くも人並みの半生を送り、特別採用制度の世話になることもなかつた怜次は、月子の生々しい言葉に反論できるだけの経験を持ち合わせていない。知つた風な口を利いたところで、空虚な響きにしかならないだろう。

ならば、己の無理解を認めるしかあるまい。月子が自身の焦りを認めたように。

「正直に言つて、俺は何も知らない」

怜次は一瞬だけ月子の右腕に視線を落とした。そして、すぐに正面から視線を合わせる。

「黒河内がどんな風に生きてきたのか……どんなことを考えてここにいるのか……黒河内だけじゃなくて、他の連中についてもそうだ」

月子は車止めに座つたまま、怜次のことを見上げている。いきなりおかしなことを語り出されて困つていいのだろうか。だとしても、もう少しじだけ付き合つてもらわなければ。

「それだけじゃない。知らないくせに、知らうともしなかった。聞かれてくないに決まつてるとか、話したいわけがないとか、勝手な言い訳ばかりしてきたんだ」

玲奈の教科書を拾つたときもそうだった。教科書の持ち主の気持ちを勝手に推し量り、自分本位の価値観で処理して、自爆同然に困惑を覚える結果となつてしまつた。

それを間違つてはいけない、仕方のないことだと考える人もいるかもしれない。けれど、玲奈達のことを理解したいと思うなら、完全な悪手である。

相手のことを知りたいなら　ほんの僅かでも役に立ちたいと願うなら　自分から歩み寄らなければ、何も得ることはできない。そんな当たり前の理屈を、今の今まで気が付かなかつたことが情けなかつた。

「だから……黒河内のことを、教えて欲しい」

月子の大きな瞳が一際丸くなる。そのまま暫くきょとんとしていたかと思つと、皮手袋を嵌めた右手で顔の下半分を覆い隠した。

「いきなり何てことを言つんだ、君は。ここは戦場だぞ。それに、私のことを知りたいなんて……物好きにも程がある」

月子は困惑しているのか怒っているのかよく分からぬ態度で視線を泳がせ、上田遣いで目線を向けてきた。光源から離れているせいで、顔色まではよく分からぬ。しかし初めて見る表情なのは間違ひなかつた。

怜次はそんな月子の眼差しを正面から受け止めた。

「そりかもな。きつと俺は物好きなかもしれない」

山中で機関砲が鳴り響いては、唐突にはたりと止む。先ほどからこのサイクルが繰り返されている。さほど遠くないところに戦闘が起きているのだ。

「……本当に私の話を聞きたいなら、一つほど約束して欲しい」

やがて、月子は意を決したように立ち上がった。

「まず、私が見せたもの、話したことを他人には言わないでくれ。中尉や曹長、佐代子さんは最初から知っているから別として、小隊の皆や他の隊の人には絶対に教えないで欲しい」

怜次の口をしつかりを見据えながら、右手の皮手袋を外していく。そして、迷彩柄の戦闘服の金具とボタンを取り外し、上着を躊躇いなく脱ぎ捨てた。

「お、おいー」
「一つの約束」

携帯用電燈の光が月子の身体を淡く照らし出す。

華奢な身体に、薄手の白い半袖シャツと迷彩ズボン。指の先から

シャツの袖口 恐らくは肩口までも を厳重に包む真新しい包帯。

「これから何を見ても、私のことを嫌わないで」

短く切られた黒髪と大きな瞳に飾られた顔が、怜次を真剣な眼で見上げている。

怜次は大きく頷き、それだけでは足りないと想い、明確な宣誓を付け足した。

「……分かった。両方とも約束する」

「約束、したからね」

縋るようにそう言つと、月子は左手を右の肩へと伸ばし、袖口の中へと指を滑らせる。その指先は明らかに震えていた。怯えているのだ。あの包帯が覆い隠す何かは、彼女にとつて重過ぎるほど意味を持つ代物なのだろう。

まさか、罪深い行為に手を染めてしまつたのではなかろうか。そんな錯覚が怜次を襲つた。しかし、もつ後には引けない。結果を全て受け止めるだけだ。

月子が固く縛られた包帯を解いていく。
白く細長い布が、重力に曳かれて滑り落ちる。

「あ
」

淡い光に照らされた月子の右腕は、一切の人間的な質感を欠いていた。

骨格代わりのフレームに、グレムリンの筋肉と同じ金属質の筋繊維を繋ぎ合わせた、人造の腕。そうとしか表現することができなかつた。特機の腕部から装甲を除き、サイズと重量感を人間の腕に合

わせれば、もしかしたらあのよつた形になるだらうか。

「あまり驚かないんだね」

円子は自嘲気味に笑い、金属の右腕を左手で抱き寄せた。
驚いていないといえば嘘になる。だが、ある種の心の準備ができていたのも事実だ。

最初の出撃で右肩に触れたときの、硬い質感。右腕に熱いコーヒーを浴びても気付かなかつた事実。そして、佐木との会話で執拗に暗示された『特機の技術を利用した義肢』の存在。

確信できていたわけではないが、想像だけは常に頭の片隅に巢食つていた。

「こんなの……ただの義手じゃないか。どうして隠さなきゃいけないんだ」

二つが円子から告げられた言葉が脳裏を過ぎる。

榎とさや上原さんのことを見直して欲しい。

出来る限りでいいから、普通の態度で接して貰いたいんだ。

それは円子自身のことをも含んでいたのではないか。

「分かってるくせに」

月子は哀しげな笑みを浮かべた。図星だつた。そんなもの、あの右腕が『何』で造られているのかを思えば、容易に想像できてしまう。

これ以上、月子に辛いことを語らせてはいけない。怜次は血ら口を開いた。

「グレムリンのせいで不幸になつた奴が、グレムリンの身体で造られた腕を見ていい顔をするわけがない……か」

月子は右腕を抱き寄せたまま、沈黙を肯定に替えた。

理屈だけで考えれば不条理なことかもしれない。けれど、人間は理屈だけでは割り切れないものだ。自分達の不幸の原因を利用して、腕の喪失という不幸を克服しているように見える相手に、ネガティブな感情を抱く者がいたとしてもおかしくない。

「私が十歳くらいの頃だ。当時住んでいた町をグレムリンの群れが襲つて……私は右腕を喰いちぎられた」

怜次はその光景を想像し、目を逸らしたくなる衝動に駆られた。しかし、ここまできて顔を背けるわけにはいかない。

「暫く母方の親戚を転々とした後……中学三年生になつた頃だつたかな。その頃、父方の伯父と初めて会つた。そのときまで知らなかつたのだが、私の父は陸上自衛軍の将軍の弟で、若い頃に親から勘当されていたそうだ」

陸上自衛軍の将軍。それを聞いて、怜次は中部方面隊の黒河内中将を思い浮かべた。珍しい苗字なので気になつてはいたが、まさか本当に親類だつたのだろうか。

「こことは、亜由美が言つてた噂は根も葉もない流言つてわけじゃないのか？」

「あちらからすれば、勘当された不出来の弟の娘だ。引き取るつもりもなかつたそうだ」

月子はゆらりと右腕を上げ、精緻に組み上げられた右手を広げてみせた。

「だから、上原さんが聞いていた噂のような援助はない。ただこの右腕を実験的に取り付ける代わりに、陸上自衛軍の特別採用枠に入れてもらつた……それだけだよ。いくら福祉目的の制度でも、五体満足でなければ軍には入れないからね」

「……自分から志願したのか」

「いや、提案してきたのは向こうからだ。伯父は義手の研究をしている軍の研究所から頼まれて、定期的に被験者を紹介していたそうだ。最初は傷痍軍人が中心だったみたいだけど、幅広い年代のデータが欲しいということで、私に目をつけたらしい」

あくまで淡々と、月子は身の上を語り続ける。

内容の善し悪しに関わらず、軍が研究のために人員を都合するのは珍しくない。それに、義肢の研究は社会的な貢献度も大きい。軍が積極的に関わっていたとしても責められることはないだろう。だが、目の前の少女がそれに関わっていたと聞かされると、何故か居た堪れない気持ちになってしまつ。

「どうして、そこまでして軍に入らうと思つたんだ」

「一言で説明するのは難しいかな。これ以上他人の世話になりたくないかったんだと言つても、あのグレムリンに復讐したかったんだと言つても、どちらも間違いじゃない。あえて言つなら……弱いまま

の自分が嫌だった、ということなのかもしれない」

月子は珍しく曖昧な表現を繰り返した。正直な動機を話したくないわけではなく、月子自身の中でも動機を言語化し切れていないのだろう。

遠くから機関砲の発射音が反響し、がらんとした駐車場に消えていく。

「さて……自分語りはこれくらいにしよう。久我さんもこれで分かつただろう？ 私はもう、他の人達には受け入れて貰えない身体なんだ。その上、特機乗りとしての力量も伸び悩むようじゃ焦るのも当然じゃないか」

そう語る月子の口振りは、自虐的を通り越して被虐的ですらあつた。

硬い右腕を掴む左手に力が籠る。抱き寄せるのではなく、そのまま握り潰してしまつのではないかと思えるほどに。

「受け入れられないなんて……そんなこと！」

怜次は理屈を考えるより先に口を開いていた。

「教育隊では皆そうだった！ 隊長達だって軍務だから我慢してるだけに決まってる！」

剥き出しの感情が響き渡る。受け入れられたいという願望と、受け入れられるはずがないという確信。心が軋むような聞き合いで怜次の胸にも伝わってくる。

ずっとこんなものを抱えていたのか。そんな思いと共に、今日まで気付くことができなかつた不甲斐なさが襲い掛かる。

「黒河内！　俺は　！」

その瞬間、川を挟んだ向かいの山肌で爆発が巻き起こった。

轟音と同時に眩い炎が吹き上がり、暗がりを一瞬だけ拭い去る。怜次は何が起きたのか即座に理解した。グレムリンの肉体に爆発性の物質は存在せず、可燃物だけの山中で炎を伴う兵器を使うとは思えない。つまりあの爆発は、特機が装備している機関砲の弾倉が破壊され、火花が何かで引火したものとしか考えられなかつた。炎は延焼することなく收まり、夜の闇と静けさが帰つてきた。

怜次は我に返るが早いか、月子の腕を掴んで駆け出した。

「久我さ

」

「敵がいる！　多分、味方がやられたんだ！　早く三号機で逃げ……」

…

直後、月子が怜次の腕を強引に振り解いた。

こんなときに何をしているんだ！　怜次は苛立ちを堪えて振り返つた。しかし、月子の顔を見た瞬間に、そんなものは跡形もなく消え失せていた。

月子は右腕を庇つように抱き締めて、怯え切つた顔で立ち尽くしている。

怜次が咄嗟に掴んだ月子の腕は、あろうことかあの右腕だったのだ。

「黒河内……」

ここで謝つてはいけない　直感がそう告げる。怜次はあくまで当たり前の態度を貫き通したまま、もう一度月子に呼びかけた。

「味方がやられたらしい。たぶんここも危なくなる。俺が操縦する

から早く離脱しよう

「……分かつた。それと……『ごめん』

怜次は無言で頷き、二号機へ駆け寄った。二号機は胸部装甲を開放したまま、駐車場の隅に佇んでいた。怜次はその胸部装甲に手を掛け、懸垂の要領で一息に這い上がると、飽きるほど繰り返した手順で後部座席に乗り込んだ。

続いて円子が前部座席に座り、胸部装甲が閉まるまでの間に起動準備を完了させる。

「行くぞ……」

二号機は体勢を低くし、早足で駐車場から走り出た。できればなりふり構わず逃げてしまいたいところだつたが、そのせいで敵に見つかっては元も子もない。

県道を百メートルほど逆送したところで、後方の山裾で木々の梢が激しく揺れ動いた。

「久我さん！ 後ろ！」

円子が焦った声を上げる。怜次は二号機の進行方向を素早く変更し、県道沿いの民家の陰に駆け込ませた。特機の全高は四メートル程度。二階建ての民家なら直立したままでも遮蔽物とすることができる。

その数秒後に、奇怪な形状のグレムリンが県道に降り立つた。

四本の脚と一本の腕。こう表現すれば、多くの人はケンタウロスを連想することだろう。しかし二号機のディスプレイに映った敵影は、神話のように整つた姿形をしていなかつた。

強靭な筋肉で編み上げられた巨大な芋虫の胴体から、馬のような四本の脚が生え、頭の辺りに歪な上半身がくつ付いている。人間の

形とはお世辞にも言えない。首に相当する部分が存在せず、縦長の肉塊が胴体に癒着しているとしか表現のしようがなかつた。

上半身の左右からは一本ずつ腕が生えている。一の腕は極端に細く、それとは対照的に、肘から先は太い円錐状に尖つっていた。まるで騎兵の突撃槍だ。

「あれが友軍の特機を……？」

前部座席の月子は頭部カメラの映像を表示し、未知の敵を真剣に観察している。

その間、怜次は別視点の映像を次々に切り替えて、周囲の様子を窺つていた。

機体側面、民家の二階を捉えた映像を目にしたとき、怜次は思わず操作の手を止めた。二階の窓は開け放たれたままだが、明かりは全て消されており、普通なら一寸先も見えない暗闇が広がっている。故に『それ』が見えたのは、ひとえに暗視カメラの性能のためと言わざるを得ない。

怜次が目にしたもの。それは、押入れの奥で身を寄せ合つ幼い兄妹の姿であつた。

第十二話 マイナス・ファイア

一一〇一一年 十月十四日 鳥取県八頭郡 県道二百八十一号線
獄山近傍

暗い県道を機関砲弾の嵐が吹き荒れる。

火薬の炸裂音と衝撃波の爆音を撒き散らしながら、明るい赤色の光の線が、真っ暗な未知の奥へと吸い込まれていく。発光しているのは、通常の砲弾に混ざって、数発ごとに発射される曳光弾だ。超音速で飛翔する砲弾を肉眼で捉えるのは不可能に近く、そのままでは砲撃中の照準調整は困難を極める。そこで用いられるのが、飛翔中に発光して軌跡を知らせる曳光弾である。

路上に布陣していた特機部隊が一斉に砲撃を止める。

曳光弾の光が暗闇に消え、あれほど大気を震わせていた騒音が、夜の闇に溶けるように消え去った。

数瞬の間を置いて、グレムリンの一群が特機部隊目掛けて殺到する。

三五ミリ機関砲が通用しない外皮の個体を先頭に集め、掃射に斃れた仲間の死骸を踏み越えて、六脚の獣がアスファルトに爪を立てる。

「来たよ、虎ちゃん！ 重甲タイプが先頭に三体！」
「了解、まずは中央から突き破る！」

虎彦は一号機を県道の真ん中に仁王立ちさせ、一一〇//コ砲を振り向けた。砲身を覆う装置類に右腕を差し入れた状態で、外付けのグリップを左手で握るその姿は、まるで右腕そのものが砲身と化したかのようにも見える。

周辺の僚機が示し合わせたように一号機から離れる。

新型でも相変わらず狭苦しい操縦席の中で、虎彦は右手のトリガーを引いた。

瞬間、凄まじい衝撃が操縦席を揺るがす。

「ぐつ……！」

音速の五倍に迫る砲弾が一直線に大気を引き裂き、先頭を駆ける熊のようなグレムリンを貫き四散させる。

直撃を受けたグレムリンのみならず、後方にいた一群までもが砲弾に穿たれる。

同時に、砲身後部から同程度の運動エネルギーを持つ硬質プラスティックの塊が発射され、空中で粉々に砕け散った破片と爆風が路面を薙ぎ払った。

砲撃時の反動を、反対側に同威力のものを放つて相殺する、ディビス式と呼ばれる無反動砲の原理の一つだ。

虎彦は相殺し切れなかつた反動で傾く機体を立て直し、敵の一群に再度照準を合わせた。

「次つ！」

一発目の砲弾が敵陣を打ち崩す。壁役のグレムリンが吹き飛ぶのを見計らつたかのように、各部隊の特機が路上に集まって一斉に機關砲を放ち始めた。

『日向隊長。流石に一二〇ミリは強力ですな』

前方で機關砲を連射する二号機から通信が入る。余裕のある竜馬の声の陰で、翔也が余裕のない雰囲気で何事か口走っているのが聞こえた。恐らく、実践訓練という形で射撃を翔也に任せているのだろう。

「威力だけなら相当だが、主武装としては使えたもんじゃない。
反動が強烈過ぎる」

虎彦は一二〇ミリ砲に固定してあつた一号機の右腕を外し、砲を道端に置いた。五トン近い重量故か、ゆっくり置いたつもりなのに、アスファルトが僅かに沈んだよつた気がした。

「あれ？ 外しちゃつていいの？」

後部座席から佐代子が怪訝そうに話しかけてきた。

「同じ手は何度も通じるものじゃないからな。次の命令は、全機前进で敵勢力を押し返せってところだらう」

自由になつた一号機の右腕を腰の後ろへ回し、腰部アタッチメントに提げてあつた武装を掴み取る。人間用の武装でいうショットガンに近い外見で、一二五ミリ機関砲や一二〇ミリ滑空砲と異なり、砲身と腕部を装甲で包んで固定する方式ではなく、グリップを手で握ることで固定する方式の短砲身兵装だ。

グリップの前には長方形の弾倉が取り付けられており、これが連射を前提とした兵器であることを誇示している。

「それなら、こっちの方がやりやすい」

一号機が武装を構えたタイミングで、現場の中隊を指揮する大尉から、前進制圧の命令が下された。

戦列を成す特機が機関砲を構えて走り出す。先ほどの攻撃で崩れかけたグレムリンの一群に機関砲弾を浴びせながら、敵陣の最奥獄山への距離を縮めていく。

虎彦は他の部隊の動きを確かめた上で、随伴する一号機と四号機に指示を出す。

「俺と岸田兵長は最前線の部隊を援護する。四号機は猪熊曹長の指示に従つて、前線を抜けってきたグレムリンを迎撃しろ」

『了解しました』

『了解ですっ！』

亜由美と玲奈が同時に返答する。少し遅れて翔也も口を挟んだ。

『一号機も後方支援でいいんですか？』

『前線に出たいなら、俺から隊長に頼んでやろうつか』

『冗談きついっす、曹長……』

翔也と竜馬のやり取りを、後部座席の佐代子は楽しそうに笑いながら聞いていた。通信機越しに亜由美の呆れ声と玲奈の苦笑が聞こえた気がした。どうやら新人達から余計な緊張が取れてきたようだ。緊張感を失うのは問題だ。しかし逆に緊張しそぎるのも危険を招いてしまう。その点では、この三人は良い方向へ進んでいいように思える。月子の件は未だに懸念事項ではあるが、今は怜次に任せることしかない。

県道の奥で機関砲の発砲音が折り重なるように鳴り響く。一機や二機の攻撃ではない。相当大きな衝突が起きたと見るべきだ。

『俺達も行くぞ』

『りょーかいっ！』

一号機の脚部がアスファルトを蹴り付ける。シートに押し付けられる感覚を全身に感じながら、虎彦は遙か前方を飛び交う曳光弾の残像を睨んだ。

『 たつ、助けてくれ！ 化け物だ ！』

通信機から、他部隊の特機兵が発した悲痛な叫びが吐き出される。虎彦が戦況を訊ねようとした矢先、獄山の麓の一角が凄まじい土柱を立てて吹き飛んだ。

前線部隊の機関砲が一斉に射線を収束させる。明赤色の曳光弾の輝きが、低空を滑るように飛ぶ不可思議な影を照らし上げた。

白銀の外皮。燃焼剤の光を弾く幾何学的な鱗。腕のように発達した四本の脚。水晶の「」とく透き通る一対の翅。脚よりも強靭な一本の尾。その尾と見紛うばかりに長く伸びた首。三式の脚部を銜えた乱杭歯。

人面の飛竜。恐らくはあれこそが『女王』

虎彦は反射的に一号機を跳躍させた。新型であるが故の優れた出力と脚部の構造が、三式では達し得ない高度まで機体を持ち上げる。刹那、人面の飛竜が凄まじい速度で真下を飛び去った。

「何あれ ！」
「舌、噛むなよっ！」

虎彦は曲芸じみた空中制動で機体の姿勢を変え、衝撃を最小限に抑えて着地した。

一方、人面の飛竜は一号機の後方で急上昇し、大きな弧を描いて旋回しながら、再び地上に狙いを定めているらしかった。

「今のは……」

似ている。虎彦の記憶の中には、あれと同じ姿のグレムリンが強烈に焼きついている。今しがた襲い掛かってきたグレムリンは、上海戦役において一個師団相応の部隊を壊滅に追い込んだ女王と瓜二

つの姿をしている。

だが、一箇所だけ明確な相違点があつた。

「五時方向に敵影！」

「ちつ……！」

佐代子の報告を聞くや否や、虎彦は右腕の武装を後方へ振り向けて引き金を引いた。

砲口から放たれた円筒形の弾が空中で裂け、大粒の散弾の嵐が吹き荒れる。散弾銃ならぬ散弾砲の一撃は、間近まで迫つていた大型のグレムリンの頭部を蜂の巣にし、原型が残らぬほど粉々に撃ち碎いた。

「虎ちゃん！ 上つ！」

返事をする間もなく真横へ飛び退く。一瞬前まで一号機がいた空間を、人面の飛竜が凶悪な速度で飛び去つていく。

風圧に紛れて高温の風が機体を押し流す。

あの飛竜の翅では、どう足搔いても飛べるはずがない。察するに、翅は滑空や滞空のために用いられる器官に過ぎず、飛翔自体は圧縮空気なり可燃ガスの爆発なりを放出して推力を得ることで実現しているのだろう。

虎彦は機体の体勢を整えて前線を見渡した。他部隊の特機は獄山から押し寄せるグレムリンとの戦闘に追われ、上空の『女王』と交戦する余力がないようだった。

「ねえ、あのグレムリン……まさか上海の……」

佐代子が震える声で呟く。

上海の群れを率いた『女王』それは即ち、岸田司を殺めた元

凶

しかし、虎彦は明確にそれを否定する。

「いや……サイズが違い過ぎる。上海の奴より一回りは小さい。いくらグレムリンでも、身体が小さくなることはないだろ？」

虎彦が上海で遭遇した『女王』は、三式特機の胴体プロックを丸ごと噛み碎くほどに巨大な顎を具えていた。しかし、あの『女王』の顎は脚部を銜えるのが精一杯の大きさしかなかつた。どちらも特機と比べれば桁外れの巨体だが、誤差として片付けるには差があり過ぎる。

「それなら、あれは……」

「上海の群れから分化した、新しい群れの『女王』ってところだな

虎彦は苦々しく吐き捨てた。

日本に上陸したグレムリンの群れは、上海の勢力そのものではなかつた。この事実は決して喜ばしいだけのものではない。上海に巣食う勢力が、もはや対岸の火事などではなく、日本に直接的な脅威をもたらす存在になつた証拠でもあるのだ。

この戦いがどんな結末を迎えるとも、日本の防衛指針は大きな見直しを迫られるだろ？ 虎彦はまさにその瞬間に居合わせてしまつたのである。

「兵長。右腕の制御を任せん」

「いきなりどうしたの？」

人面の飛竜が上空を旋回し、一号機に三度狙いを定める。

虎彦が人面の飛竜を特別なグレムリンだと看破したように、あのグレムリンも虎彦の一〇式を特別な特機だと見抜いたらしく。

「次の突撃は回避に専念する。タイミングを合わせて、翅の付け根に撃ち込んでくれ」

「一人でやつたほうが確実じゃない？ やれっていうならするけどさ」

虎彦は機体を道路の中央で立ち止まらせ、上空のグレムリンと正面切つて向かい合つた。

こうすれば次の襲撃を正面突撃に限定できる。紙一重の回避を実行する状況が整つた。

人面の飛竜が爆発的な加速を帶びて急降下する。路面の寸前で水平に軌跡を変え、一号機へ向かつて一直線に飛来する。

「来るぞ！」

特機の動力液に塗れた乱杭歯が十数メートル手前まで迫る。

虎彦は極限まで敵を引き付けた上で、機体を真横へ跳躍させた。目と鼻の先を巨大な人面が横切つていく。

その口元が、ぐにやりと歪んだ。

直後、壁に激突したかのような衝撃が、一号機の操縦席を揺るがした。

「なつ！」

前腕。グレムリンがすれ違いざまに前腕を横に突き出し、一号機を驚撃みにしたのだ。虎彦はグレムリンの口元が歪んだ理由を理解した。あれば嗤つていたのだ。

機体がふわりと宙に浮かぶ。虎彦は空中へ連れ去られまいと一号機をもがかせたが、桁外れの握力に捕らえられて抜け出すことすらままならない。

そのとき、一号機の右腕が虎彦の意思とは無関係に動いて、散弾砲の引き金を引いた。

至近距離で放たれた金属の粒が透明な翅に殺到し、容赦なく無数の孔を穿つ。

「どうだつ！」

佐代子が会心の笑みを浮かべる。虎彦が突然の事態に動搖している間にも、佐代子は自分の役割を果たすタイミングを図り続けていたのだ。

人面の飛竜は一対四枚の翅のうち三枚までを根元から引きちぎられ、残る一枚も数本の筋で辛うじて繋ぎ止められた有様で、無様にアスファルトの路面に墜落した。慣性でそのまま路面を滑り、激しい火花を散らしながらアスファルトを削つて、次第に速度を落としていく。

力が緩んだ隙を突き、虎彦は一号機をグレムリンの手中から脱出させた。

脱出の直前に佐代子から右腕の制御権を取り戻す。即座に散弾砲を投げ捨てて、脚と同時に接地させて衝撃を受け止める。減速しきつていないう状態だったために、両脚だけでなく両腕までも使って着地せざるを得なかつたのだ。

人面の飛竜は更に数十メートル程進んだところで、ようやく速度を失つて停止した。

『中尉殿！ 大丈夫ですか！』

一号機の竜馬からの通信が飛び込んでくる。ディスプレイの隅に、こちらへ駆け寄つてくる一号機と四号機の姿が見えた。いつの間にかこんな後方まで引きずられていたのか。

それを確認するや、佐代子が通信機に向かつて叫んだ。

「近付いちや駄目！ あれはまだ生きてる！」

人面の飛竜の鱗が蠢く。一際大きな鱗が開き、ジェットエンジンのようないかにも高温の風圧を吐き出した。その凄まじい圧力の反作用により人面の飛竜が加速する。翅を失った以上、まともな飛翔はできない。制御を失ったロケット弾さながらに路上を蛇行し、路面に爪を立ててその場で半回転。虎彦の一号機を正面に捉える。

虎彦は道端に放置してあつた一一〇ミリ滑空砲に駆け寄り、砲身を担ぎ上げた。

「そんなの当たらないよ！ 相手が速過ぎる！」

「大丈夫だ……！」

一号機が一一〇ミリ砲を腕部に取り付けた瞬間、遙か前方でグレムリンが地を蹴った。

虎彦は機体を僅かに前方へ傾けた。

直後、巨大な砲弾と化した女王が一直線に飛翔する。

砲を構える猶予もなく、数十メートルの距離が一瞬にして塗り潰される。

さながらギロチンの如き勢いで肉薄する乱杭歯。

虎彦は、血のように紅い口腔に、一一〇ミリ砲の砲身を突き立てる。

「これなら、外さない」

密接よりも更に深く。マイナス距離からの直接砲撃。

飛竜の胴体が衝撃波で爆発的に膨らみ、超音速の徹甲弾が背中を突き破る。背中の穴と口腔から、一一〇ミリ砲の発射炎が噴火しながらに噴き出した。

虎彦は右腕を一一〇〇二二〇砲から抜き去つて、完全に動きを止めた
『女王』から距離を取る。砲身は喉に突き入れたまま。あんな無
茶苦茶な撃ち方をして、砲身が無傷で済むとは思えない。使い物に
ならないほどに歪んでいるはずだ。

人面の飛竜が上体を起こす。口から背までを串刺しにされ、体内
を灼熱の爆圧で焼き尽くされながら、尚も無機質な眼球で虎彦の一
〇式を睨む。

「まだ動けるなんて……！」

佐代子が悲鳴にも似た叫びを上げる。

しかし虎彦は、不思議なくらいに落ち着いた心境で『女王』を見
上げていた。かつて自衛軍に地獄をもたらした『女王』と同じ姿の
グレムリンが、無残な瀕死の有様を晒している それなのに、不
思議と心が躍ることはなかつた。

「全機 撃て」

一號機と四號機の機関砲が一斉に吼える。

砲弾の雨が『女王』の胴体に降り注ぎ、胸部を経て次第に頭部へ
と上つていく。一機の射線が顔面で交錯。口腔に残された滑空砲の
弾倉を撃ち抜く。

残された全ての弾薬が起爆。

燃え盛る炎と暴発した砲弾によつて、飛竜の顔面が柘榴のように
弾けて吹き飛んだ。

第十四話 その手をとつて（上）

一一〇一一年 十月十四日 鳥取県八頭郡 県道二三百八十一号線
沿線

「子供がいる……」
「何だつて？」

怜次の咳きを月子は耳聴く聞きつけ、ディスプレイの表示を次々に切り替えた。そして、遮蔽物に使っていた民家の二階を映す映像を目の当たりにし、言葉を失う。

地域住民の避難は既に済んでいたはずだ 少なくとも怜次はそう認識していた。

しかし現実は違つた。何かの手違いか、それとも不幸な偶然か。三号機が盾とした民家には一人の子供が取り残されている。

「久我さん……どうしたら……」

月子の声は戸惑いに震えていた。彼女にとつても予想外の出来事だつたのだ。

だが、迷つてゐる暇はない。このままでは、いずれ三号機は山から下りてきたグレムリンに発見され、攻撃を受けることになる。そうなつたときに、怜次達の実力では民家への被害を出さずに戦えるとは思えない。

ならば選択肢はただ一つ。

「……助けるしか、ないだろ」

怜次は音を立てないように細心の注意を払いながら、民家の窓に

機体の正面を向けた。

一腕四脚の異形のグレムリンは、単調な足取りで県道を渡り、二号機が残された駐車場の付近に到つていった。駐車場に放置してしまつた携帯用電燈と、その近くに佇む二号機の姿に引き付けられたのだろう。

この状況を幸運と見るべきか、それとも不運と見るべきか。

怜次は胸部装甲を開き、姿勢を調整して先端部を窓際へ近付け、屋内へ入る架け橋とした。

「私が、行くのか……？」

月子が不安そうに振り返る。駐車場の一件の直後に、逃げるよう三号機へ乗り込んだので、月子は白い半袖シャツに迷彩ズボンという服装で、右腕には包帯ビニルか皮手袋すら身につけていなかった。

「」の姿のまま見知らぬ人間の前に出ることを厭う気持ちは理解できる。

だが、時間がないのだ。

異形のグレムリンは駐車場から離れ、道路をこちらに向けて歩いてきている。二号機が破損し放棄されたものであると見抜いたに違いない。三号機が発見されるまで一分か、一分か、あるいはもつと

「敵が近付いてる。早く助けるんだ！ お前のその手で！」

「私の、手で……」

押入れの襖がゆっくりと開き、幼い兄妹が恐る恐るこちらを窺う。県道では、異形のグレムリンが杭上の両腕を引きずり、鋭い先端でアスファルトをがりがりと削つてはいる。もはや物陰から様子を窺える距離ですらない。不用意に顔を出せば、その場で民家を巻き込

む戦闘になるに違ひなかつた。

「……私が……」

月子は神経系インタフェースのベルトを外し、ディスプレイを操縦席の脇に動かした。

そして、足場となつた胸部装甲の裏を踏み越え、窓枠に手と足を掛けて、部屋の中へ呼びかける。

「もう大丈夫だ！ 助けに来た！」

声が微かに震えている。恐れているのだ。他者に拒絶されてしまうことを。

異形との距離が百メートルを切る。もはや時間的猶予は微塵もない。

「だから……ほら、おいで」

月子は窓から家中に入り、腕を広げてみせた。怜次の目には月子の背中がいつも以上に小さく感じられた。兄妹を助けるために入つていつたはずなのに、まるで拒否せずに助けられて欲しいと懇願しているかのようだ。

異形の足音が次第に近付いてくる。

兄妹は暫く不安そうな顔で月子を見やつていたが、やがて不安と恐怖が堰を切つたように、月子の元へと駆け寄つて腕の中に飛び込んだ。操縦席までは聞こえてこないが、泣き声混じりに自分達の現状を訴えかけているようだ。

月子が三号機へ振り返る。その顔には安堵の色が浮かんでいた。

「黒河内……」

だけど、間に合わない。

「……その子達を頼む。俺はアイツを引き付ける
「何を言つて」

怜次は用子を民家に残したまま、胸部装甲を閉じ始める。民家の向こう側で異形のグレムリンの足音が止まる。三号機の存在に気付いたのだ。そもそもなれば、こんなところで足を止める理由がない。

今ここで三人を操縦席に乗せても、その状態で異形と戦わざるを得なくなる。そんなこと、殺してくれと言つてはいるも同然ではないか。

ならば、いつそのこと。

「久我さん！」

胸部装甲が閉まり切るのも待たずに、機体を真横に跳躍させて県道に躍り出る。

異形の歪な上半身の真ん中で眼窩がぎょろりと動いた。挽肉を粘土細工の如く練り上げた胴体に、人間の皿蓋を縦に埋め込んだような異物感。余りにも悪趣味な造詣に、生理的な嫌悪感すら覚えてしまう。

「「Jつちだ、化け物！」

あえて外部出力の拡声器を通して叫ぶ。

右腕の三五ミリ機関砲を振り向け、一瞬だけ引き金を引く。そして間髪を入れず川岸の土手を滑り降りた。砲弾自体は命中することなく空を切つたが、相手の注意を民家から逸らすには十分だ。

一人では勝てなくとも、逃げ続けて時間さえ稼げば何とかなる。

怜次はそう信じて機関砲を振り向いた。

異形のグレムリンが歪んだ蹄でアスファルトを蹴る。

瞬きする間もなく、ただの一歩で、異形が三号機に肉薄した。

「 ッ！」

想像を遙かに超える速さだ。

咄嗟に機関砲を放とうとするも、それよりも更に早く異形の左腕が繰り出される。鋭く尖った金属の杭が、機関砲の砲身と三号機の右手を諸共に貫き通す。

「 こいつ……！」

敵は明らかに戦い慣れている。真っ先に機関砲を潰しにきたのがその証左だ。

怜次は反射的に三号機の左腕を動かして、敵の右腕 厳密には、肘から先の槍を掴んだ。そもそも、このグレムリンは山中を警戒していた他部隊の特機を撃破してここに来たのだ。未熟な怜次の技量で倒せる相手ではない。

それこそ、よほどの幸運が手伝わない限りは。

「 ……ちいつと、まずはいか？」

三号機と異形のグレムリンは、川の中で互いの腕を封じ合っている。

こう表現すれば互角のように思えるが、実際には三号機の方が圧倒的に不利な状況に置かれていた。三号機は主武装を破壊された上に右手首から先まで潰されたが、異形のグレムリンは右腕の槍を掴まれているに過ぎない。

異形の肩越しに、民家の玄関から人影が出ていくのが見えた。月子と子供達だ。

彼女達さえ逃げ切れば充分だ。その後のことは 後になつてから考えればいい。

「もう少しだけ……付き合つてもらひなが」

三号機の左腕に力を込め、異形を引き寄せ。両者の足元で川の水が大きく波打つた。

月子が異形の認識から消えるまで、せめて月子の姿が見えなくなるまで、この敵を食い止めておきたい。怜次はそれだけを胸に己を奮起させていた。

「あいつはまだ、これからなんだ……」

ずっと役に立てずについた。戦いではいつも月子が主導権を持ち、窮地に陥つたときは日向中尉が助けてくれた。

ならば、せめてこんなときくらいは役に立つてみせなければ。

「だから……！」

異形のグレムリンが右腕を跳ね上げる。三号機の左手は容易く振り払われ、無防備な半身を異形の单眼の前に晒した。

星明かりを弾く鈍色の槍が三号機の左肩を貫く。

静止は一瞬。異形は即座に肩から槍を引き抜いた。

機体を揺らす衝撃を感じながら、怜次は山中で起きた爆発の意味を理解した。

槍の穂先は左腕と胴体の連結を完全に寸断し、胴体ブロックの側面を深々と抉つた拳句、背部の大型弾倉までも穿つていた。

引き抜く瞬間に生じた火花が弾薬に着火。三号機の背部で弾倉が

大爆発を起こす。

「 ぐあっ！」

左腕が根元から焼け落ちる。

胸部側面の損傷から爆風の一部が吹き込み、操縦席の怜次へ襲い掛かる。

炎が操縦席を焼いたのは、時間にすれば一秒にも満たない。しかしたつたそれだけの出来事ですら、三号機の戦闘能力を削ぐには充分過ぎた。

「く……、う……」

顔の左半分が灼熱感と酷い疼痛で疼く。

焦げ臭い煙と熱気が操縦席を満たしている。

耐燃素材の戦闘服と座席が燃えるように熱い。

現状を認識するのが厭になる有様だ。

怜次はディスプレイの煤を指で拭つた。県道に月子達の姿はない。上手く逃げ切ることができたのだろうか。それなら、この戦いにも意味があつた。

異形のグレムリングが左腕の槍を機関砲から抜き去る。機関砲が三号機の右腕から滑り落ち、大きな水飛沫を上げて川に沈んだ。右手首から先が完全にちぎれてなくなつていて。

万策尽きた。

左腕を根元から「く」つそりと喪失し、右手と機関砲をまとめて失ってしまった。逃げ出そうにも、三式の速力で逃げ切れるとは思えない。

異形が单眼を見開く。

左腕の槍が三号機の右脚を貫き、先端を川底に突き立てる。大腿が碎かれ、串刺しになる。まるで虫ピンで縫い付けられた甲虫だ。逃走すら許さないといふことか。

「はは……徹底してゐるな……」

異形は右腕の槍を水平に構え、後ろへ引いていく。加速をつけているのだ。

胸部装甲の正面は他の部位よりも厚く造られている。それでも、あの槍の一撃を防ぎきれる気がしない。仮に耐えられたとしても、逃げることも防ぐことも叶わない現状では、一方的になぶり殺しにされるだけだ。

「……そういうえば、返事……してなかつた……な

視界が闇に沈んでいく。爆風を受けた左耳の刺すような耳鳴りだけが薄れない。

月子は久我怜次という男を信じてくれた。

だから、誰にも見せたくないはずの瑕を見せ、心の内を告白してくれた。

それなのに、久我怜次は月子の信頼に報いることができていない。どうすれば報えるのか分からなくとも、絶対に成し遂げなければならぬといふのに。

「こんなところで、勝手に終わるなんて

「あああああっ！」

異形の槍が目にも留まらぬ速さで放たれる。

判断は一瞬だった。

まるで己の腕を動かすかのような滑らかさで、怜次は三号機の右腕を繰り出した。

槍の先端が胸部へ斜めに突き刺さる。

装甲を穿ち、無人の前部座席を蹂躪し、破片を撒き散らし、怜次の足元を貫いていく。

手首から先を失った腕が異形の単眼を突き破る。

勢いに任せて肘まで捻じ込み、上半身の背中側に手首の断面をめり込ませる。

三号機の胴体を、鋭い穂先が斜め下方へ刺し貫く。

破れた異形の眼球から、淡い色の体液が滝のように溢れ出す。その一部が槍状の前腕を伝い、破壊された胸部装甲の孔から操縦席に流れ込んできた。

周囲を静寂が包む。

朝陽が山肌を鮮やかに染め上げ、夜空を淡い金色に塗り潰していく。

人型の巨体と人馬の巨体は、陽光を弾いて煌く河川に膝まで沈め、互いの肉体を右腕で穿ち抜いたまま、全ての機能を停止させていた。

「は……はは、は……」

前半分を抉り潰された操縦席の中で、怜次は笑っていた。

無理だと信じていたのに。

不可能だと確信していたのに。

結果はこれだ。勝ち目がないはずの戦いに勝ち、死ぬだろうと思つていた状況から生き残つた。自虐的な評価なんて案外当てにならないらしい。

機体の損壊部分から眩い光が差し込む。

怜次は目映さに目を細め、後部座席に身を預けて長く息を吐いた。

第十五話 その手をとつて(下)

一一〇一一年 十月十四日 鳥取県八頭郡 郡家東小学校

早朝。小学校のグラウンドは、普段ではありえないほどの賑わいに満たされていた。

臨時の補給所や医務施設の機能を担うテントが建ち並び、野戦服姿の軍人達が忙しそうに行き来している。

獄山における戦闘の大勢は決した。戦線を支えてきた第三特機群の第一、第二、第三中隊はハキ口後方の小学校に設けられた仮設陣地まで後退し、遅れて到着した第四中隊と第五中隊、そして歩兵と戦車からなる主力部隊に役割を受け渡した。

「本当に、生き残ったんだな……」

怜次は医務用テントの脇に腰を下ろして、ぼつりと呟いた。

戦闘服の上着を脱ぎ、左の頬と腕に火傷治療用保護材を貼り付けて状態で、仮設陣地の忙しない風景を眺める。保護用シートの表面は肌の色に近い色合いだが、それを固定するネットやテープが白色なので、遠目からでも負傷していることが分かるだろう。

「無茶しちまつたからなあ。曹長あたりに説教されるかも

思わず苦笑が浮かぶ。

戦果はグレムリン一体撃破。対する被害は三式特機一機大破。單純な数の上では一対一交換だが、互いの数量を考えれば収支はマイナスだ。一体倒すために一機を犠牲にしていては割に合わない。ふと、怜次は人ごみの向こうに目をやつた。

忙しく働き続ける軍人達の合間に縫つて、華奢な輪郭の人影が近

付いてくる。

「黒河内……？」

月子は迷うことなく怜次のところへやつて来ると、田の前で立ち止まつた。

怜次とは逆に戦闘服の上着を羽織り、右手にいつもの皮手袋を嵌めている。

外部からは右腕の様子を窺うことはできない。袖の奥に隠された秘密を知っているのは、この場では月子自身を除けば怜次ただ一人。月子もそれを認識しているのか、左手で右腕を軽く抱き寄せた。

「怪我をしたと聞いていたけど、元気そうで……よかつた」

「ああ……軽い火傷で済んだみたいだ。皮膚の表面が焼けただけだから、たぶん後遺症も残らないらしい」

会話が途切れる。前線の陣地に相応しい騒がしさが、二人の間にまで流れ込んできて、言葉だけでは表現しにくい雰囲気を作り出す。月子は何か言いたそうに視線を泳がせて、不意に怜次と視線を合わせたかと思うと、また目を外して口を閉ざすといつぎいちない行動を繰り返している。

そんな月子を、怜次は静かに見上げていた。

じるじると表情を変える月子なんて、そう見られるものではない。

「何か嬉しいことでもあったのか？」

「えつ？ それは……えつと……」

月子はあからさまに言葉を詰まらせた。どうやら凶星だったらしい。

知らず笑みが零れる。頬と腕の疼痛も気にならなくなってきた。

「ありがとうって、言つてくれたんだ」

小声で囁いたその言葉は、戸惑いと嬉しさが混ざり合つてこるよう感じられた。

「そうか……よかつたな。あの子達か?」

「……両親がどちらも夜勤で留守にしていたそつだ。一人で眠つていたところに警報が発令されて、どこかに隠れようと思つて押入れに避難したらしい」

本人は淡々と報告しているつもりのようだが、綻んだ口元は誤魔化しきれていない。

何も知らない子供だからかもしれない。戦争だとグレムリンだとか、難しいことを考える必要がない年頃というのもあるだらう。それでも嬉しいのだ。あの身体を嫌悪することなく、素直に受け入れて貰えたことが言によつもなく有難かったのだ。

「不幸な偶然だつたけど、助けられたのはまさに不幸中の幸いだつたね」

「とにかくみんな無事でよかつた。黒河内もあの子達も。そつそつ、小隊のみんなは全員怪我ひとつないってさ。衛生兵の世話になつたのは俺だけだよ」

怜次は名前も知らない兄妹に感謝の念を覚えた。

あの子達の自然で飾らない感情は、自分がわざとらしい理屈を重ねるより何倍も、月子の心に響いたに違ひない。そんなことを考えていたものだから、怜次は月子の一言をすぐに理解することができなかつた。

「……ありがとう」「え？」

怜次は不意を突かれて、はっと顔を上げた。

言葉にすれば、たつた一息。

周囲の騒々しさに呑まれてあつといつ間に消えてしまつゝ言ひ、いくつもの想いが折り重なるよつに織り込まれている。

月子は微笑を浮かべ、そつと右手を差し出した。皮手袋と袖の隙間からは鈍色の義肢が覗いているが、それを隠そうとする様子はない。

いつもと違つ柔らかな笑みに、怜次は思わず視線を奪われた。

「ああ、みんなのところに戻るつ」「……そんな顔、できたんだな」

月子が拗ねたように手を細める。

怜次は謝りながら笑い返し、その手をとつて、そつと握り締めた。

一一〇一一年 十月十七日 津ノ井駐屯地

「やあ、田向中尉」

中隊本部のある建物の廊下で、虎彦は何気ない声に呼び止められた。

振り返ると、白衣にスカートスーツといつもの格好の空木が、窓際に背を預けてこちらを見やつっていた。

「一〇式の一機目の納入が終わったぞ。それにしても、せっかく用意した一一〇ミリ砲が一日でおしゃかになるなんて想定外だ。参考までに状況を詳しく教えてくれないか」

「戦闘の詳細は報告書に纏めてある。一一〇ミリも『女王』と相打ちになつたんだから充分な戦果だろ」

興味津々といった様子の空木の追求を、虎彦は軽い態度で受け流した。

獄山における戦闘から既に三日。

第三特機群が受けたダメージは決して小さくなく、所属特機の一割ほどが小破以上の損壊を負っていた。當田中に修理できた機体もあるが、中には今日に到るまで修復が完了していない機体も存在しているという。

虎彦の小隊も例外ではない。小破と大破が共に一機ずつ。前者は簡単な修理で対応できたものの、後者は胴体ブロックの損壊の度合いが酷く、直そうと思うなら造り直しにも等しい労力が掛かるらしい。

だが、あれは機体を使い潰すだけの価値がある戦いだった。

「隊員が生き残つて成長してくれるなら、武装や機体を容赦なく使い潰していくつもりだ。開発畠の人間には悪いが、部隊長つて奴はそういう考え方の連中ばかりだからな」

「それでいい。兵器を大事にして人材を失うのは本末転倒の極みだよ。桁外れに高額な秘密兵器ならまだしも、特機はお手頃な値段が強みなんだから。知ってるか？ 君が『女王』の命と引き換えにした一一〇ミリ砲を改造する予算で、三式特機が一機と半分造れただ

單に愉快なのか、それとも嫌味を言いたいのかよく分からぬ態

度で、空木は笑い混じりにそんなことを喋った。空木はいつもこんな態度だ。色々な知識を喋りたがるが、それに意味があるのかは釈然としない。

虎彦は何気なく窓の外に視線を移した。

格納庫の前に佇む新しい一〇式の周囲に、ちょっとした人だからがきていた。開け放たれた胸部装甲の上には月子が座り、操縦席から身を乗り出す怜次と何やら会話を交わしている。群集の殆どは他の部隊の隊員だが、第三小隊の面子の姿も見えた。

あの戦いを通して、月子と怜次の距離は大きく近付いていた。

怜次には、精神的に不安定な月子の支えになつてくれたらと思つていたが、どうやら期待以上の結果になりそうだ。

「ふむ、あれは今回の戦いで一番の収穫だな」

いつの間にか、空木も虎彦と同じ方向を見やつていた。

「あの右腕の開発に携わった者としては、被験者の生活が充実しているのを見るのは喜ばしいものだ」

「……あんたは特機開発の担当じゃなかつたのか？」

「私の専門は、神経系インタフェースを用いた、グレムリン由来の金属質筋肉と人間の神経の連携制御だ。特機も義肢も、このプロジェクト・ネフィリムと渾名される研究の一環だよ」

「ネフィリム……地上に降りた天使と人間の間に生まれた怪物か。悪趣味な名前だな」

「皮肉で付けられた渾名に決まっているじゃないか」

月子の右腕 グレムリンの肉体を使用した精巧な義手。その開

発には特機開発のノウハウが大いに活用されているという。

ならば、空木が月子の腕について知つても不思議ではない。

「黒河内月子の義手の件だが、あれは感覚の再現を除けば完成に近い技術ではあるが、普及には技術力ではどうしようもない問題が残されている」

「周りの目、か」

「そうだ。人類の怨敵たるグレムリンを人体に接合することに対し、心理的な抵抗感を持つ者は少なくないはずだ。特機ですら反発する者がいると聞くくらいだからな」

空木は窓枠に肘を乗せ、物憂げに遠くの風景を眺めた。技術では解決できない問題。それに誰よりも直面しているのは、空木のような現場の技術者なのだろう。

「だからこそ、あの義肢を使う者には理解者が必要なんだ。黒河内月子にとっての久我怜次のように、ありのままを受け入れてくれる理解者が……」

「なるほど。だから怜次に接触して、色々と吹き込んでいたわけだな」

「バレてたのか。事前知識があれば受け入れられやすいかと思つてね」

空木はばつが悪そうに目を逸らした。

その効果があつたのかどうかは不明だが、怜次は月子を受け入れ、月子も怜次を信頼した。これから先には幾つもの乗り越えるべき壁が待ち受けているに違いない。それでも、こうして彼らが最初の一歩を踏み出せたのは喜ばしいことだ。

不意に、廊下の向こうから佐代子が呼びかけてきた。

「虎ちやー……じゃなかつた、日向中尉ー！ ちよつといいですかー！」

「ふむ、じちらも仲がよろしきことで」

空木は肩を竦め、どこかに歩き去っていく。

まったく、なんてタイミングだ。虎彦は気恥ずかしさを誤魔化す
ように眉をひそめた。誰かに聞かれていたら一大事だ。規則上の問
題はなくとも、他の連中が妙な誤解をしかねない。

虎彦は色々な感情の籠つた溜息を吐いて、佐代子の方へ向き直つ
た。

第十五話 その手をひとつ（下）（後書き）

以上までを第一章として一区切りとします。個人的な節目としての区切りなので、次の章になつたら内容が一変、ということはないと思います。

これからも「鋼鉄のネフィリム」を宜しくお願ひします。

第十六話 招かれざる寄り神

一一〇一一年 十月二十四日 鳥取県鳥取市 白兎海岸

国道九号線沿いの決して広くはない砂浜に、大勢の人が集まっている。

夏は海水浴客が、冬にはサーファーが集まるこの海岸は、本来なら閑散期の只中にあるはずである。しかし今日に限っては、冷たい日本海の波が打ち寄せる砂浜を無数の軍靴が往来し、無機質で画一的な靴跡を刻み続けている。

人だかりの殆どは軍人だ。それも迷彩服を着た陸軍の兵士ばかりで、他には近くの町の住人が野次馬として遠巻きに事の次第を見守つてゐるくらいである。

「クレーンはまだか！ 波に攫われちまうぞ！」
「は？ 七八式回収車？ 何で古い奴しかないんだよ！ せめて普通のクレーン車でも借り上げて来い！」
「そんなトレーラーじゃ乗せられないと言つてゐるだらう！ 漂着物の規模を考えろ！」

波の音に混ざつて、軍人達の声が四方から飛び交う。その内容は、現場の混乱を表すかのように錯綜していた。

やがて、戦車を改造した小型クレーン付きの軍用車輌と、通常の工事現場でも見られる民間用のクレーン車が砂浜に乗り込み、キャタピラの跡を深々と掘り込んだ。

クレーンのフックとワイヤーに繋がれていく、巨大な『漂着物』

それは常識的な代物などではなかつた。

六脚を持つ金属の巨獣、グレムリン。

大きさはちよつとした倉庫ほどもある。六本の脚はどれも人間が

すっぽりと納まるサイズの鱗と化し、胴体となだらかに繋がった長大な首と尾を、浜辺に力なく垂らしている。

既存のイメージで喻えるなら、絶滅した首長竜が最も近い印象だろうか。

無論、実際の首長竜とは相違点が幾つもある。首や尻尾は胴体との境界が分からぬほどに太く頑丈で、身体の表面を盾のような鱗が覆い尽くし、鱗の先端には黒光りする金属の爪が生えている。

「まるで海竜のゾンビだな……」

現場を指揮する大尉がぽつりと独りごちた。

白兎海岸は漂着したこのグレムリンは、既に完全な姿を留めてはいなかつた。全身の筋肉が形を崩し、膿を孕んだ傷口のようになり果てている。

恐らくは、漂流を続ける過程で筋肉を構成する有機物が腐敗し、分解されてしまったのだろう。その残り物が金属の部位に絡み、腐肉を滴らせるゾンビのような残骸となつたのだ。

こんな代物が近所に漂着した周辺住民の迷惑は、察するに余りある。

第一発見者は、飼い犬の散歩をしていた老人だといつ。見慣れた散歩コースに海竜のゾンビが横たわっていたのだ。きっと腰を抜かさんばかりに驚いたに違いない。

「大尉、漂着物をトレーラーに積載しました」

「分かった。輸送先は岡山の総合研究所でいいだろ。受け入れ態勢が間に合わないなら、近場の特機部隊の駐屯地にでも置かせてもらえ」

大尉は大型トレーラーに積み込まれた残骸を横目で確かめ、部下に追加の指示を出す。

「荷台はシートで隠しておけ。あんなモノを晒して街中を走らせるな」

「了解しました」

走り去つていく部下を見送つて、大尉は溜息混じりに顎鬚を撫でた。

グレムリンの死体を然るべき場所へ輸送して、これでようやく彼らの仕事は折り返し地点に到達した。悲しいことに、死体を片付けて終わりではないのだ。

大尉の眼前には、兵達の足跡と車輌のキャタピラの跡で傷つき、グレムリンの残骸で汚された砂浜が広がつてゐる。次はここを綺麗に清掃し、整地しなければならない。場合によつては死体を片付けるよりも重労働かもしれない。

「積荷を隠させたのでトレーラーを出発させました」

先ほどの部下が戻つてきて、任務の遂行具合を報告する。

「それにしても、あれはどこから漂着したんでしょうね。日本海側では見られないタイプのグレムリンですよ」

「さあな。この前、大陸から『女王』が群れを引き連れてきただろ。大方、その群れから落ちこぼれて行き倒れたんじゃないかな」

適当な答えではあるが、現時点での状況証拠ではそう考へるしかない。

大陸にはどんな形のグレムリンが存在し、どういう戦いをしているのかなど、現場の兵隊は知らないのが当然だ。当然、日本にいないうなイタイプのグレムリンが漂着したところで、その意味するところなど理解できはしない。

そんなものは上層部が頭を使って考えるべきことだ。

「 ばさつとしてないで、次の仕事だ！ まずは清掃！ 肉片は残らず回収しておけ。消毒も簡単でいいからやっておくよ！」 それが終わったら整地だ！」

大尉は矢継ぎ早に指示を飛ばした。

いつの間にか、周囲の野次馬は姿を消していた。見物の目玉であるグレムリンの漂着死体がなくなつたので興味を失つたのだろう。もしかしたら自分達に襲い掛かっていたかもしないのに、現金なものだ。

或いは、これが一般市民の標準的な態度なのかもしれない。

グレムリンとの戦争は これを戦争と呼んでよいのかは別として 長引きすぎた。

多くの世代にとつて戦いは日常の一部になり…… 謂わば『慣れて』しまつたのだ。自らが直接的な戦禍を被るまで、彼らはいつまでも野次馬であり続けるのだろう。

大尉は大きな溜息をひとつ吐いた。

一〇一一年 十月二十五日 鳥取県鳥取市 鳥取県八頭町 境
界付近 南部

『現在時刻一〇三〇。状況を開始せよ』

通信機から猪熊曹長の声がした。

亞由美はマイクを取ろうと手を伸ばした。指先が緊張で震えてい

る。

「……あつー」

爪の先が配線に引っかかって、マイクが通信機から落ちた。慌ててそれを拾う。大丈夫、まだ時間に猶予はある。亜由美は一呼吸置いて心を落ち着かせてから、通信機の向こうにいる猪熊曹長に準備完了の報告を送った。

「こちら四号機。作戦行動を開始します。榎さん、お願ひ」「了解っ」

前部座席の玲奈の制御に従い、四号機は木立の中をゆっくりと歩いていく。

亜由美達が搭乗している機体は従来型の三式特機である。新型の一〇式は整備関係の準備が終わっていないこととで、使わせてもらうことができなかつた。

通信機から猪熊曹長の声が漏れ聞こえた。

『一いち一 一四号機。本当に四機がバラバラに散開する作戦でいいんだな』

作戦内容の最終確認だ。こんな通信が来る予定はなかつたのだが、どうしたのだろう。

亜由美は玲奈に目線を送つた。玲奈は肩越しに亜由美と目線をあわせて、小さく頷いた。

「大丈夫です、話し合つた通りやります。頭数を増やしたほうが見つけやすいはず」

「曹長がアドバイスしてくれたら、もっと良い作戦が思いついたか

もしれないんですけど……ねえ、亜由美ちゃん

『それではお前達の訓練にならんだろ。やると決めたなら、自分達の作戦を信じろ』

木立の中は想像以上に視界が悪い。文字通り林立する樹木の幹だけではなく、その上部に広がる枝葉までもが容赦なく視野を遮っている。高木ならまだしも、特機と同じくらいの高さの広葉樹は目隠し同然の障害物だ。

頭部カメラが広葉樹に邪魔されている間は、他の場所のカメラが非常に有り難くなる。

動力液を循環させる機関の音と、歩行の振動が操縦席を包み込む。四号機の足元には落ち葉と枯葉が降り積もり、暗い暖色の絨毯となっている。

『こちら二号機。未だ標的は発見できず
『一号機も同じく』

通信機から怜次二等兵と岸田兵長の声が聞こえてきた。他の隊員達も状況は芳しくないらしい。四機のうちのどれかが標的を発見すれば、その報告を元に『標的』へ一斉に攻撃を加えることができる。それが来ないということは、まだ『標的』は警戒網に引っかかっていないということだ。

亜由美は通信機に向けてこちらの状況を通達した。

『こちら四号機。同じく標的は捕捉』
『待つた！ 一瞬だけ姿が見えた！ 四号機の方に行つたぞ！』

怜次が叫んだ瞬間、亜由美の『ディスプレイ』にも『標的』の影が映つた。三式特機とほぼ同じサイズの体躯を屈め、広葉樹林の只中を滑るように走つている。

方向は前方僅かに左寄り。距離は目測できない。速過ぎる。だが、四号機へ急接近しているのは明らかだ。

「神さん、十一時の方向！」

「……っ！」

怜奈が機体の右腕に装着された三五ミリ機関砲を放つ。

盛大に茂った紅葉のせいで視界は最悪だが、弾幕さえ張れば何発かは当たるはず。亜由美はそう確信していたが、敵の機動は想定の遙か上を行っていた。

敵影は木々の間を鋭敏に動き回り、太い幹を盾代わりとし、巧みに四号機の砲撃を回避していく。

敵影が十メートル手前まで迫った瞬間、足元に積もった枯葉が盛大に舞い上がった。

「しまつ」

古典的な目眩ましだが、亜由美は完全に意表を突かれてしまった。亜由美が口を開くより早く、玲奈が機体を横へ跳躍させた。そのままの勢いで、密集している樹木に身を隠す。

「ふう……危なかつた」「やられたかと思った……」

亜由美は玲奈の咄嗟の判断に感謝した。『標的』がどんな攻撃をするつもりなのかは分からぬが、距離さえ取つておけば柔軟な対応ができる。

「えっと……『標的』は……」

各部のカメラの映像を次から次にディスプレイに表示させる。

四号機の右斜め後方、ここから少し離れたところに『標的』姿が見えた。木々の隙間から、角張った小さな背中が覗いている。移動速度は速くない。四号機への攻撃を諦めて別の場所へ移動しようとしているのだろう。

「ターゲットを発見。方角は四時方向。榎さん、ここから狙える?」「……うーん。木が多いから、ちょっと難しいかも。連射すれば何発かは当たるかもしれないけど、その前に気付かれて逃げられちゃうと思う」

玲奈は歯切れ悪く答えた。三五ミリ機関砲はピンポイントの狙撃よりも弾幕を張る戦術に適しており、障害物の隙間を縫つて標的に命中させるような使い方には向いていない。そんな使い方ができるのはベテランの特機兵くらいだろう。

普段、四号機が装備している徹甲弾であれば、砲弾の威力に任せ
て枝や幹を撃ち抜くことも可能だが、今回はその手段を探ることが
できない事情がある。

玲奈が諦め混じりに首を振る。

「榊さん。一時の方向は木が少ないみたい。そこに移動しましょう」

亜由美は機体右側のカメラの映像を確かめながら、そう提案した。ディスプレイに映し出された映像を見る限り、その方向だけ妙に木々の密度が薄くなっている。

「そうだね、行ってみよう」

提案を受け、玲奈が四号機を走らせる。やがて四号機は森を抜けて、立ち木のない拓けた場所へと

「 つ！」

突如、玲奈は機体を急減速させた。

眼前に広がっているのは平坦な土地などではない。崖のような斜面だ。

辛うじて減速が間に合い、滑落する寸前で停止する。

「あ……ぶなかつたあ……」

「道理で木が見えないと思つたら、崖だつたのね……」

亜由美と玲奈は揃つて溜息を吐いた。

考えてみれば当然だ。山中の斜面を遠くから眺めれば、その辺りだけ木々が少なく見えるに決まっている。

「亜由美ちゃん。ターゲットは確認できる?」

「あ、ちょっと待つて！」

焦りを隠しながら、ディスプレイに表示する映像を切り替える。明らかに亜由美の失態だ。滑落の危機に気を取られて、思わず『標的』から目を離してしまった。

先ほどまで『標的』がいた方向のカメラにも、今は紅葉した森林しか映っていない。

「正面、右、左……ごめん、見失ったみたい」

最後に、真後ろを映すカメラの映像をディスプレイに表示させる。

左右の光景とあまり変わらない、赤茶けた広葉樹林。その木々の間を高速で潜り抜け、金属の『標的』が迫り来る。

「つ……！ 後ろ！」

叫んだときにはもう遅い。

巨大な拳で殴りつけられたような衝撃が、四号機の操縦席を搖るがした。

一一〇一一年 十月二十五日 鳥取県鳥取市 鳥取県八頭町 境
界付近

四号機被撃破。この一報はすぐに他の機体へも伝わった。

「くそつ……！」

怜次は掌に拳を打ちつけた。狭苦しい後部座席に乾いた音が響く。最初に『標的』見つけたのは怜次達だつた。しかし見つけたはいいが、一発の砲弾を当てるこども出来ずに取り逃してしまつたのだ。その失敗がなければ、三号機と四号機で『標的』を挟み撃ちにできたかもしれない。

「久我さん、私達はどうする？』

月子が振り返り、怜次に今後の指針を尋ねた。

現在、三号機は最初に『標的』を見つけた地点と四号機が脱落し

た地点の中央付近にいる。」のままだと、引き返してきた『標的』と一対一で戦うことになる危険もある。

やうなつたらまず勝ち田はない。ならば、選択肢はただ一つ。

「ひつひつ機。二号機、応答頼みます」

『二号機。何か用ですか?』

しばしの間を置いて、岸田兵長の気楽そうな声がした。

「位置情報を送つてください。もうへりへり思つてます」

答えはすぐには返つてしなかった。マイクから口を離して、何事か喋つてゐる気配がする。恐らく操縦担当の翔也と話してゐるのだろう。

『りょーかい。私はここで待機しておくから、そつちの位置情報を送信して』

「分かりました」

コントロールを操作し、二号機の位置情報を一号機へ送信。ほどなく、一号機の座標がサブモニターに表示された。怜次は両機の座標と周辺地図を照らし合わせながら、三式特機の不親切さに不満を溢す。

「これくらこ自動でやつてくれたらいこのこな……」

互いの位置をリアルタイムで共有し、戦術画面に視覚的な情報を表示する。この程度なら技術的に不可能ではないだろう。

勿論、怜次が考える程度のことはとっくに研究されているはずだ。そういう機能が三式に実装されていないのは、単に現実的な理由が

あるからに違いない。制式採用が八年前の兵器なのだから、最新技術に対応できなくて不思議はなかつた。

「黒河内。十時方向に歩行者用の林道がある。特機なら通れると思うから、セレを使おう」

方角を時間に喻える表現は、アナログ時計の文字盤を想像すれば理解しやすい。正面を十一時、真後ろを六時と考え、右を三時、左を九時と当てはめていく表現だ。

「一いつりでも確認した。道沿いに北上するだけでも一〇号機の近くまで行けると思ひ」

円子は肯定の顔つきを返すと、指定されたルートに沿つて二二号機を走らせた。

『ま、頑張つて。今回のターゲットは強敵だから、上手くやらないと返り討ちだよ』

岸田兵長の声は何故か弾んでいた。みんなを鼓舞しようとしているのか、それとも単に現状を楽しんでいるだけなのか。この人の場合はどうちだとしても違和感がない。

『ついでだから再確認。私と猪熊兵長は必要なら援護してあげるけど、みんながヤバい判断をしても止めたりしないからね。今回はそういう判断力を養う訓練もあるんだから』

作戦開始の前にも聞かされた注意事項だ。

今、怜次はその意味を痛いほど実感していた。

結果論でいえば、戦力を分散させて索敵するという判断は誤りだ

つた。しかし、その作戦を採用すると報告したときにも、兵長達は止めようとなかった。開始直後に猪熊曹長が作戦の再確認をしたくらいだ。

見通しのいい林道が緩やかなカーブに差し掛かる。月子は流れるような重心移動で機体を制御し、遠心力と振動を可能な限り抑えてカーブを曲がりきった。

「それにしてもまずい状況だね。戦力分散の末に各個撃破。最悪のパターンかもしない」

月子の表現は辛辣だが的を射ている。

「ああ……最初の選択ミスがここまで響くなんてな」

広大な作戦区域から『標的』を見つけ出すことに意識を奪われ、発見後の戦闘を軽視していた。誰かが『標的』を発見したところで、友軍が駆けつける前に倒されてしまつては何の意味もない。ディスプレイに表示していた側面の風景を、一瞬だけ黒い影が横切つた。

「三時方向、敵影！」

「いたつ！」

考えるより先に口を開く。月子もそれに追随し、林道脇の木立に機関砲弾を叩き込む。しかし敵影は緩急を付けた動きで直撃を逃れると、あつという間に森の奥へ消えていった。

「待て！」

月子の操縦に従い、三号機が『標的』を追つて木立へ飛び込もう

とする。

「追うな！ 攻撃は合流してからだ！」

怜次は思わず声を張り上げた。

その一言で、月子は機体の脚を止めた。

前部座席のシート越しに振り返り、不服そうな視線を怜次に送りながらも、三号機を林道へ戻して移動を再開させる。

「……少し、先走り過ぎたみたいだ」

先に矛を収めたのは月子の方だった。こうして自分の反省点を自覚できるのも、月子の長所の一つなのだろう。怜次は漠然とそんなことを思った。

一一〇一一年 十月二十五日 鳥取県鳥取市 鳥取県八頭町 境
界付近 北部

「いやあ、翔也君もやるね」

一一〇二号機の後部座席で、岸田兵長は嬉しそうにディスプレイを眺めている。

単純に感心しているのか、それとも予想よりマシだから驚いているのかは定かではないが、なんにせよ褒められてはいるらしい。翔也は複雑な心境になつた。本来なら喜ぶところかもしれないが、状況が状況なので素直には喜べない。

「でも、地味で格好悪いっす」

岸田兵長の賞賛を自虐的に否定する。

一郎機は三メートルほどの高さの崖に寄りかかってしゃがみ、枯葉をたっぷりと湛えたまま折れた枯れ枝を何本も被つて身を隠していた。その場にあつた材料を利用した、即席のカモフラージュだ。じつくり観察されればすぐにバレてしまう程度だが、ぱっと見では風景と区別しづらいはずだ。

三号機から待機要請を受けた直後から、一郎機はこうして身を隠し続けていた。

岸田兵長が座席越しに翔也の肩を叩いた。

「いやいや。三号機は識別信号のおかげでこいつの位置が分かるけど、ターゲットはそもそもいかないんだから。合流できるまで隠れておくのはいい判断よ」

兵長が褒めているのは、カモフライージュした状態での待機という選択の堅実さである。華々しい活躍とは程遠い、とにかく地味で土臭い戦い方だ。翔也は何度か物言いたげに口を開閉し、やがて諦めたように黙り込んだ。

不意に岸田兵長が身を乗り出し、翔也の肩に顎を乗せた。

「うわっー。」

翔也は上ずつた声を上げた。自衛軍の売店で売つてこるような、安物のシャンプーの匂いが鼻腔をくすぐる。耳に当たる髪の毛の感触は、翔也のそれとは桁違いに柔らかい。

「なるほど、翔也君は地味な戦いが嫌いなわけね」

「いえ、そういうわけじゃ……」

翔也が言葉を濁すと、岸田兵長は翔也の肩から顔を離して座席にもたれかかった。

「怒ってるわけじゃないよ。アンケートみたいなもの。……で、派手なほうが好き?」

岸田兵長の口調は、まるで同年代の友人と話しているかのような気さくもだ。少なくとも、兵器の操縦席で使う言葉遣いではない。このまま放つておいたら、そのうち特機の中で色恋話でも始めそうな勢いだ。

翔也はしばらく迷っていたが、結局は兵長の雑談に乗ることにした。待ちの一手を決め込むと判断した以上、状況が動くまでは大人しく待っているしかない。

「好きか嫌いかで言えば、こういうのは好きじゃないし、もっと格好良く戦いたいっす」

不思議と本音が口を突く。

「嫌いって言う割には、さつちり思いついて実行してるんだね」「俺、まだ弱いですから。いつもしないことベテランには追いつけないでしょ」

翔也達新兵が挑んでいる『標的』は、彼らの実力に不相応なほどに強い。初手に失敗した以上、ここからの逆転は難しいだろう。

それでも、胸の奥のちっぽけなプライドが、簡単には負けたくないと訴えている。

好きではない戦術に身を投じてまで勝ちを拾おうとしているのは、

翔也のやれやかな悪あがきだ。

「驕^{ひる}らないのはいいけど、向上心は失くしちゃ駄目だよ。どんなべテランだつて最初は弱かつたんだから」

「そつ……ですか」

翔也は思わず黙り込んだ。単なる雑談かと思^{いた}きや、いつの間にやら含蓄のある指導に移り変わっている。まさか、岸田兵長は最初からこの話をするつもりで雑談を振ったのではないだろうか。

岸田兵長の話し方はいつもひつひつだ。知らず知らずのうちに本音を引っ張り出されてしまう。

『「ひらり四号機。一瞬ですが『標的』を田撃しました。一号機の方に向に向かつた可能性があります。『氣をつけてください』』

通信機が怜次の声を響かせる。

翔也の緊張の糸が一気に張り詰める。その場凌ぎのカモフラー^ジュを信用しそぎ、不意打ちを喰らつてリタイアなんて無様な真似はできない。せめて見つかるより先に相手を見つけなければ。

「はいはーい、ひらり一号機。作戦はどうする？ 待ち伏せ？ 捜み撃ち？」

『できればそこで待機を ちょっと待つてください』

怜次の声が途切れ。通信を切断したのではなく、喋るのを止めたのだ。

数秒ほどの間を置いて、怜次が緊迫した様子で報告を再開した。

『 ターゲットを発見しました。このままの速度と方向なら、二号機の南の林道に出ていくはずです。今すぐ林道に移動すれば挟み

撃ちにできると思ひます』

「だつて。どつする?』

岸田兵長が翔也に話を振つた。聞かなくても分かつてゐるはずなのに、意地が悪い。

「行くに決まつてます」

「よし。令次君、挿撃の予定座標を送つて」

翔也は一号機をゆっくりと立ち上がらせた。カモフラージュに使つていた枯れ木が装甲表面を滑り、乾いた音を立てて地面に落ちた。三号機から、ターゲットの予測進路と林道が交差する地点の座標が送られてくる。

作戦区域の南南西から北北東へ斜めに延びる林道。一号機は林道の北側の森に隠れており、三号機は林道を一号機の方へ向かつて北上中だ。そして『標的』は、三号機の右側の森の中を真っ直ぐ北へ走つてゐるという。

翔也達が林道で待ち伏せておけば、森から出てきた『標的』を三号機と挿み撃ちにことができるかも知れない。

「上手くいくんでしょうか……」

「やつてみないと分からないつて。良くも悪くもね」

「歩く」と遭遇の瞬間が迫つてゐると考へると、心臓の高鳴りを抑えられない。これは緊張ではなく高揚だと自分に言い聞かせながら、翔也は一号機を加速させた。

特機を覆い隠すほどの茂みを突つ切り、林道へと躍り出る。道の奥から三号機が走つてくるのが見えた。

「敵は、どんだ」

？

翔也が一〇号機の頭部を巡らせた瞬間、広葉樹林を突つ切つて『標的』が姿を現した。

三式特機と変わらない背丈。
より強靭に改良された足腰。
細緻かつ剛健な構造の手腕。

『標的』役を担つ一〇式特機が、一機の眼前に躍り出た。

「やっかつ！」

翔也は三五ミリ機関砲を振り向け、即座に連射した。

彼我の距離は、僅かに特機の数歩分。これほどの至近距離ならば外れるはずがない。

だが、砲撃と同時に一〇式特機の姿が搔き消え、砲弾が刃へ空を切る。

「消え……！ 違つ、上か！」

咄嗟に一〇号機の頭部を空へ向ける。

前部座席のディスプレイに、上半身を下にして一〇号機を飛び越える一〇式が映る。

【由返り】 翔也は思わず我が目を疑つた。高張る機関砲と弾倉を装備していないとはいっても、一トン単位の質量がある特機を、ああも軽やかに跳躍させられるものなのか。

一〇式は曲芸のような鮮やかさで機体を回転させ、一〇号機の真後ろに着地する。

「……しまつた！」

巧みな操縦技術に惹きつけられ、今が戦闘中であることが意識か

ら消えてしまっていた。

翔也は慌てて機体を振り向かせた。

それを待っていたかのよう、一〇式の散弾砲が二号機の胸部装甲に密着同然の距離から砲弾を浴びせる。大きな拳に殴りつけられたと錯覚しそうな衝撃と共に、ピンク色の塗料が胸部装甲に撒き散らされた。

「やられた……」

「負けちゃったね、残念」

がくりと肩を落とす翔也の後ろで、岸田兵長が座席に深々と身を預けた。

訓練用のペイント弾　これを胸部に浴びた以上、先にやられた四号機と同じく、問答無用で被撃破判定だ。

「つて、二号機はまだ無事ですよねー。」

翔也が振り返つてそいつ言つと、兵長は手振りで後ろを確認するように示した。

前部座席のディスプレイの表示を操作し、後方のカメラの映像を表示する。

林道に立ち尽くす二号機。その全身は、黄色の塗料でまだら模様に汚れていた。

黄色の塗料は友軍側のペイント弾の色である。つまり……

『長谷川君……後でお話、いいかな』

『お、おい、黒河内？　落ち着けって……』

二号機から、厭に落ち着き払つた月子と動搖した怜次の声が届いた。

友軍誤射による撃破。挾撃において最も気をつけるべき凡ミスだ。
翔也は操縦席の中で頭を抱えた。

第十七話 爭いの林檎

一一〇一一年 十月二十五日 鳥取県鳥取市 津ノ井駐屯地 第
一中隊将校室

「お疲れ様です、中尉殿」

虎彦がデスクに腰掛けるなり、竜馬がいつもの良く通る声を響かせた。

将校室には他の小隊長の姿はない。大方、さつきまでの虎彦と同じく小隊の訓練を指揮しているところなのだろう。

「それにしても容赦がなかつたですね。あんなに強いグレムリンはそうそういなでしよう。まさか単独で女王を倒せるくらいに鍛えるおつもりですか？」

「お前なあ……」

虎彦は椅子を回して竜馬と向き合つた。竜馬は制服をきつちりと着込み、手を腰の後ろに回して、直立不動の体勢で微笑を浮かべている。

先ほどの模擬戦において、虎彦は小隊の特機と交戦する敵役つまりグレムリンの役を務めていた。普通は指揮官たる小隊長が担当する役回りではないが、今回の模擬戦は少々特殊なシチュエーションを想定していたので、あえて虎彦が敵役に回つたのだった。

「俺としては、お前も戦力に加わるものだと思つて動いてたんだが。まさか最初から最後まで傍観してんて想定外もいいとこだ」「そのせいで力加減を誤つたというわけですか」

一対四で戦つているつもりが、実質的には竜馬の特機が外れて一対三。その上、残る三機の乗組員は佐代子を除けば全員新兵だ。竜馬を含めた四機を相手取るつもりで戦えば、やり過ぎてしまつに決まつてゐる。

佐代子も佐代子で、基本的には新兵任せで助言や忠告を殆どしなかつたに違ひない。あの人はそういう性格だ。

「新兵達が決めたことですよ。私は要請を受けて支援を行うという役割でした。支援要請がなければ動けないのが当然でしょう。そもそも今回の模擬戦は、新兵達が自らの判断で戦わざるを得なくなつた状況を想定したものですからね。下手な親心は連中のためになりません」

竜馬に一切の迷いもなく言い切られ、虎彦は押し黙つた。

階級では虎彦が上位だが、軍人としての経歴は竜馬のほうがずっと長い。形式上は下士官が士官に敬意を払うものの、実務的には若い士官が古参下士官の意見を尊重し、その能力と経験を活用する。それが軍隊という組織の性格である。

結局、虎彦は竜馬に言い負かされた形になつてゐた。

「ですが、現在の訓練形式が最良とも言い切れませんな。空軍のアグレッサー部隊のようなものがあればいいんですけど」

「特機部隊の教導隊は計画中らしいけど、流石に敵役専門部隊は厳しいだろうな。そもそも、作ったところで意味があるのかどうか…」

…

アグレッサー部隊とは、演習や訓練において敵部隊の役を専門的に果たす部隊であり、航空自衛軍では新田原基地の飛行教導隊が担当する。敵の戦術を模倣する必要があるため、必然的に技量の高いエリート部隊となつてゐる。

教導隊も　この場合は陸上自衛軍の部隊を指している　訓練と教育に携わる部隊だが、任務内容は飛行教導隊よりも多種多様であり、兵器の使い方を研究したり、他部隊を教育するための部隊という色合いが強い。

どちらも『教導隊』と称される部隊だが、役割は微妙に異なっている。

竜馬は左腕を腰の後ろに回したまま、右手で顎を撫でた。

「万が一、特機専門のアグレッサー部隊が設立されたとしたら、間違いなく中尉殿にも声が掛かるでしょうな。あの手の部隊は腕前のいい兵が集められますから。……いや、もしかしたら設立予定の教導隊に……」

「あー、いきなり気が重くなつた」

「有名になつた自分自身を恨むんだな」

最後の発言は竜馬ではない。虎彦と竜馬は揃つて将校室の入り口を見た。銀縁眼鏡を掛けた佐々木中尉が、にやついた顔で書類の束を抱えている。

「そうそう。昨日、修理工場の冷凍室にグレムリンの死骸が搬入されたのは知ってるよな？　浜辺に打ち上げられてた奴だ」

佐々木はあっさりと話を変えて、自分のデスクに腰を下ろした。卓上に放り出された書類が重い音を立てる。

「ちょっと見てきたんだが、結構凄かつたぞ」「唐突にどうしたんだ」

虎彦は話し相手を佐々木に切り替えた。

今まで会話を交わしていた竜馬は、佐々木が入ってくるなり姿勢

を正して彫像のように黙り込んでしまっていた。士官同士の話を優先できるように気を使つたのだろう。この辺の切り替えの早さは流石である。

「単なる感想だよ。かなり形は崩れてるけど、まさしく海のドリームって感じだ。海軍さんはいつもあんなのと戦つてるのかね」「佐々木は言いたいことを言い切ると、黙り込んで書類を整理し始めた。

虎彦はおもむろに席を立つた。佐々木との付き合いは短くはない。こういう性格の男だということは理解しており、とっくに慣れてしまつていた。

「グレムリンを見に行くのですか？」

「一応な。もしも水陸両用のタイプなら、後で戦うことがあるかもしないだろ」

尤もらしい説明をしてはみたが、好奇心を刺激されたといつも理由の一つだつたことは否定できない。

特機は陸戦用の兵器だ。よほど特殊な状況でもない限り、海中のグレムリンと交戦する機会はない。目にするチャンスが少ない代物なら、とりあえず見ておきたいと思うのが人の情というものである。将校室を出たところで、後からついて来ていた竜馬に問いかける。

「ところで、他の連中は何をしてるんだ？」

「当初の予定通り、模擬戦の反省会をやらせています。監督は岸田兵長に一任しました」

「それなら心配はないな」

佐代子は不真面目で予測不可能な言動とは裏腹に、重要な場面では極めて真つ当な対応をしてくれる。特に新兵達の教育に関しては、

全幅の信頼を置くことができた。

彼女にとつて、第三小隊の新兵は弟や妹のようなものだという。手抜きの教練を施して弟妹を死なせるなんて、佐代子に限つては絶対にありえない。

「中尉殿も臨席しますか」

「いや、止めとくよ。俺がいたら余計なプレッシャーになりかねないからな」

返答の分かりきった誘いだ。確認のために訊いてみただけなのだ

うう。
その証拠に、竜馬は一言「そつだと思いました」と口にしたきり、同じ誘いを持ちかけてはこなかつた。

一一〇一一年十月二十五日 鳥取県鳥取市 津ノ井駐屯地 第
一會議室

ミーティングルームに疲れきつた溜息混じりの声が響く。

怜次はこの場に集まつた面子を眺めた。

向かい合わせにくつつけられた長机の反対側には、色素の薄い髪の頭と黒い短髪の頭が揃つて突つ伏している。そんな玲奈と翔也に挟まれた中央の席で、亜由美が畏まつた態度で姿勢を正していた。机のこぢり側も似たようなものだ。元気なのは右端に座つている岸田兵長くらいで、左端の月子は不服そうな表情で頬杖を突いており、怜次は一人の間で所在無く視線を彷徨わせるしかなかつた。

「それじゃ怜次君、進行よろしくね
「どうして自分なんですか……」

怜次は小声で抗議した。「この場で階級が最も高いのは岸田兵長だ。
反省会の進行役としては一番の適任だろう。

「これも訓練のうちだよ」

岸田兵長は怜次の肩を軽く叩いた。机の向こう側では、書記役の
西田美がノートを広げてこちらをじっと見てくる。早く議論を進め
るよう訴える無言の圧力である。

怜次は観念し、改めて全員を見渡した。

「……猪熊曹長からの課題は、模擬戦の総評と個々の隊員の課題点
を、書面でまとめて提出することだ。まずは担当機体ごとに、今日
の模擬戦における相方の評価できる点と問題だと思つ点を挙げてみ
よつ」

「血口評価じゃないんですね？」

翔也が不思議そうに口を挟む。

「それも後でして貰おうと思つてゐる。でも、その前に他の人の意見
を聞いておいたほうがやり易いだろ」

「己の評価を自分自身で下すのは難しい。

客観的に見れば明白な欠点でも、本人にとつては自然で当たり前の
のことかもしれないし、そもそも欠点の存在に気づいていないこと
すらあり得る。

「こういう場合は、自分の行動を間近で見ていた他人　つまりは
同じ特機の相方に訊くのが一番だ。怜次はそう考えていた。

「まずは『1号機からお願ひします』

「ん、私ね」

岸田兵長が椅子の上で姿勢を整える。

「翔也君は四号機が脱落してすぐにカモフラージュを決断したのが良かつたかな。悪かつたのは、いざつていうときに攻撃を焦つたこと。決断力があるのは長所なんだけど、行動の結果をしつかり想像しておかないと」

淀みなく喋りきるその様は、小柄な体格から受ける印象とは異なり、まるで生徒を指導する教師のようだつた。

もしかしたら、岸田兵長は軍人よりもそちらの方が似合つているのかもしれない。

翔也は机に体重を預けたまま、神妙な面持ちで兵長の指摘を聞いている。

ふと、怜次は学生服姿の翔也を指導しているスーツ姿の岸田兵長を思い浮かべた。一度も見たことがない光景なのに、妙にしつくりきてしまつ。

「次は三号機だな」

さり気なく月子へ視線を向ける。

月子はそれに気付かず、むすつとしたまま頬杖を突きつ放しでいた。

「……え？ あ、私？」

慌てて態度を取り繕う月子だったが、色々ともう遅い。

月子は咳払いを一つして、普段どおりの口調で喋り始めた。

「久我さんは周囲をよく見て作戦を考えていたと思う。だけど、誤射の危険性にまで思い至らなかつたのは詰めが甘かつたんじゃないかな。私も撃たれるまで想像もしてなかつたから、偉そうなことは言えないけど」

「確かに……指示を出すなら、そこまで責任持たないと駄目だな」

一〇式に対する挟撃を構想し、月子と翔也に行動を促したのは、他ならぬ怜次自身だ。

仮に、操縦を担当していた二人の判断や操作に誤りがあったとしても、それは怜次の責任を軽減するものではない。むしろ作戦の危険性を充分に認識せずに行動させた責任があると言えるくらいである。

これを否定するつもりなど毛頭ない。それどころか、誤魔化さずに指摘してくれたことを感謝したいくらいだ。

「次は俺だな。月子はとにかく上手に操縦していたと思う。技術的には、間違いなく俺よりも上じやないかな」

そこまで言って月子に手をやると、何故か月子は怜次から顔を逸らしていた。

知らないうちに機嫌を損ねるようなことをしてしまつたのだろうか。まだ欠点の指摘はしていないのに。

「でも、たまに冷静さを失うのは問題だな」

「自覚はしてる。けど、久我さんならきちんと止めてくれるって、信頼もしてるよ」

月子はちらりとこちらを見ると、口元を柔らかく緩めた。彼女に

しては珍しい表情に、思わず氣を惹き付けられてしまつ。

「……」

「痛つ！」

机の下で、岸田兵長が怜次の足を蹴つた。笑顔のままなのが妙に怖かつた。

「……それつて、直す氣はないってことか？」

氣を取り直すため冗談めかしてそう言つと、円子はわざとひじくへじて、肩を竦めた。

何だよそれ、と翔也が笑つ。

亜由美は真面目な雰囲気が壊されたのが気に入らないらしく、シャーペンの先端でノートを小刻みに叩いている。

向かいの席の一人がいつもと同じリアクションを返す中、玲奈だけは何故か沈んだように表情を変えなかつた。

「…………榊？」

「あ、はい！」

流石に心配になつて呼びかけた途端、玲奈が上擦つた声をあげた。様子がおかしい。単に話を聞いていなかつただけにしては、反応が極端すぎる。

「四号機の話ですよね？ 亜由美ちゃんは私をちゃんとコーデして

くれて……悪いところなんか思いつかないです

「それじゃあ意味がないでしょ」

遠慮がちな玲奈の物言いに、亜由美が白ら反論する。

「私の問題点は、状況把握の甘さと、予想外の事態が起きたときの対応の拙さです。榎さんの長所は咄嗟の判断力と反射神経の良さだと思います。短所は、強いて言つなら自信が足りないところでしょうか」

亜由美は口を差し挟む暇もなく言い切つて、すぐにノートへ書き込んだ。

余りにも自然な流れだったが、怜次は違和感を感じずにはいられなかつた。今は自己評価ではないと言つてあつたはずだ。この手の取り決めを自分から破るなんて、亜由美にしてはかなり珍しい。

「これでいいですか？」

「んー……」

怜次は岸田兵長に横田で助言を求めてみた。
しかし、やはり兵長はにこにこと笑つたままで、助け舟を出してくれる気配がない。

「いいつてことで、いいのかな」

曖昧で滑稽な表現をすると、月子が肘で小突いてきた。
客観的な意見だけではなかつたが、全員分の長所と短所を一通り挙げることはできた。これで目的を達成できたと考えるべきだろうか。
懸念事項があるとすれば、玲奈と亜由美の態度から感じる違和感だ。

「質問、いいですか」

おもむろに翔也が手を擧げる。

怜次は質問の続きをするよう手振りで促した。

「今までの話題とは関係ないんですけど、グレムリンと戦うための訓練なのに、特機と戦つて訓練になるんでしょうか。なんつーか、筋違いな気がするんです」

「おっ！ いい質問だね」

食い付いたのは岸田兵長だった。

兵長は机に身を乗り出し、向かいの席に座る新兵達と見渡した。

「確かに、特機部隊の対グレムリン訓練の敵役を特機が務めるのは、いくらなんでも非効率的じやないかって意見は何度も出てるんだよね。けど、現実には訓練方法が変わるどころか、戦車部隊や歩兵部隊のための敵役も特機に任せようつていう案も出てきてるの」

反省会のために借用したミーティングルームが、いつの間にやら座学の教室に化けていた。やはり、この人は教師に向いているのではないだろうか。怜次は半ば本気にそう思った。

「それを踏まえて、玲奈ちゃん。どうして模擬戦の相手が特機なんか分かるかな？」

急に矛先を向けられて、玲奈は淡色の瞳を瞬かせる。しかし解答を放棄することはなく、口元に手を当てて考え込んだ。

亜由美の欠点を指摘することは避けたのに、こちらの問いには抵抗がないらしい。

玲奈はたつぱり十秒使って考えてから、上田遣いで答えた。

「他に手段がないから、ですか？」

「そのとおり。戦車と戦う訓練なら戦車を使えばいいし、戦闘機と戦う訓練なら戦闘機を使えばいい。だけど、グレムリンと戦う訓練のためにグレムリンを用意することはできないでしょう？だから代わりになるものが必要なわけ」

岸田兵長の説明は、考えてみれば当たり前のことだった。

対戦車なら戦車、対人なら歩兵、対戦闘機なら戦闘機 人間同士の戦争なら、ある意味で『単純』だ。兵器の種類や戦術の分析といつた問題はあるかもしれないが、訓練用のグレムリンなんて夢物語と比べれば簡単な注文だろう。

「人間の兵器でグレムリンに一番近いのは、やっぱり特機でしょ。他に代用品ができるまで、特機を使つた訓練体制は広がる一方だと思つよ」

兵長が椅子に深々と座り直す。どうやら抜き打ち講義は終わつたらしへ。

場の雰囲気はすっかり岸田兵長に呑まれていて、元の路線に戻すには苦笑しそうだが、この場の仕切りを任せられたのだから手を抜くわけにはいかない。

怜次は短く息を吐き、隊員達にミーティングの続行を呼びかけた。

一一〇一一年 十月二十五日 鳥取県境港市 美保飛行場

空港の到着ロビーは喧騒に満ち溢れていた。

運行状況を告げる放送が反響し、スーツケースのキャスターが転

がる鈍い音と混ざり合う。四方八方から飛び交う話し声。決して広大とはいえない飛行場だが、今はまるで都会の大通りのよつな騒がしさである。

だが、場内を行き来する乗客の中に観光客の姿はなかつた。時間帯や時期のせいか、見渡す限り軍服ばかりだ。

濃紺色の空軍の制服やグリーンの作業着、海軍の定番といえる金ボタンの黒スーツなど、デザインや色合にこだわるが、どれも軍服だということに変わりはない。

他にここを利用しているのは、軍相手に商売をしていると思しきビジネスマンや、妙に俗っぽい服装をした報道関係者ぐらのものだろう。

その只中を、余りにも鮮烈な『例外』が通り抜けていく。

「やつぱり南に行くと暖かいのね。海を越えただけなのに」

金髪に限りなく近いライトブラウンの長髪をなびかせ、軍服が持つ機能性からは縁遠い着衣のスカートを翻し、少女は軍人の合間を縫つてキャリーケースを転がし続ける。形のいい唇から零れる呟きは、日本語でも英語でもない言語で綴られていた。

年齢は十代中盤かそれよりも若い程度だろうか。

日本人にとつてはどことなく親しみを感じる、消えきらない幼さを称えた造形。

「ウラジオストクからトヤマ経由で……何時間掛かったのかな」

少女は一旦キャリーケースから手を離し、ぐつと背伸びをした。近くを通る利用客は、珍客の存在に多少なりとも視線を奪われ、僅かに行く足を遅くしている。

しかし、当の本人は周囲の反応を微塵も気にせず、異国の風景に無邪気な関心を向けているようであった。

「……つと。観光より仕事が優先か」

少女は幼い顔を真摯に引き締め、キャリーケースのネットに差してあつた中国地方の詳細地図を手に取ると、通路の真ん中でおもむろに広げて眺め始めた。

「確かに、運び込まれるとしたらオカヤマだけ。シンカンセンの直通便はないのかな」

「ガデット。我々は任務遂行のためにここへ来たのだ。それを忘れるな」

少女の後ろに長身の男が立つ。

スラヴ系の顔立ちに黒いスース。癖のある濃厚な茶色の髪を短く整えたその姿は、軍人が行きかうこの場においてすら、明らかに尋常ならざる雰囲気を湛えている。

「分かつています、レイチヨナント。だけど私達は観光客としてここにいるんですよ?」

少女が男へ振り返る。

そうして男の胸の高さくらいしかない背丈を反らし、間近から男の顔を見上げて微笑む。

「楽しそうにしければ却つて怪しまれます」

「ふむ、確かに今の我々は一介の観光客だ。求めるものは、世にも珍しい『モルスコイ・ズメイ』だがな」

男が納得しているうちに、少女はいつの間にやらガラス張りの壁に近付いて、外の風景に目を輝かせていた。

郊外に設けられた空港の周辺など、観光客の関心を煽るものではないはずだが、この少女にとつては興味深い光景らしい。

男は無邪気な後姿を無感動に眺めながら、感情の薄い目を伏せた。

「あのような子供に頼らざるを得ない日が来ようとは。嘆かわしいものだ」

第十八話 フローズンドラゴン

一〇一一年十月二十五日 鳥取県鳥取市 津ノ井駐屯地 修理工場付属低温倉庫

口から漏れた吐息が一瞬にして白く染まる。

冬の寒さにも迫る冷気が肌を刺し、指先からじわじわと体温を奪っていく。設定温度は零度近くだったか、それとも氷点下だったか。虎彦は記憶の糸を辿るうとして、すぐに止めた。今思い出したところで大した意味はない。

体育館数棟分ほどの面積があるこの倉庫には、窓が一つも存在しないなかつた。

そのため日光は毛筋ほども差し込まず、見上げるほど高い天井の電燈が放つ申し訳程度の淡い光が、この場における唯一の光源となつていた。

虎彦は防寒着代わりに羽織つた丈長のコートの襟を引き寄せながら、倉庫の奥へ大股で歩いていった。

倉庫にはグレムリンの死体やその一部が幾つも並べられている。

頭部を撃ち抜かれた亡骸が床に置かれ、原型不明の残骸がフックで吊り下げられ、同じ形の脚部が六本、太いワイヤーで束ねられ……否応なしに、肉屋の倉庫か猟奇殺人の現場を連想させる光景である。

死体の配列は無秩序なようでいて規則的だ。当然といえば当然だろう。悪趣味の発露として死体を並べているわけではなく、加工を待つ『材料』を保管しているだけなのだから、必要なものを探したり運び出したりしやすい計画的な配置になつてている決まっている。それでも、死体だらけの倉庫の中を歩くのは奇妙な気分がする。

「田向中尉もいらっしゃいましたか」

少しばかり開けた場所に出たところで、防寒着に身を包んだ男がひょっこりと現れた。虎彦の冬用マートとは異なり専用に作られた正真正銘の防寒着だ。

「やつぱり皆さん興味があるんですねえ」

男は何やら勝手に納得して、頗りに頷きながら白い息を吐いている。

言わんとすることはよく分かる。虎彦と同じように、噂のグレムリンを見に来た者が大勢いたのだろう。

「白兎海岸に漂着したグレムリンはこいつです。……あ、私は特機資材管理班の松永三等軍曹といいます」

じちらから何か訪ねたわけではないのに、松永という三等軍曹は饒舌に喋り続ける。その異様に明るい振る舞いは、冷凍死体だらけの薄暗い倉庫の中では悪目立ちしている。

虎彦はコートのポケットに両手を突っ込み、無言のまま松永の後について行つた。

相槌の一つも打たないのは、別に松永の騒々しさが煩わしかったからではない。ただ単に、寒くて喋るのが億劫になつてているだけだ。

「こちらが例の死体です。あんな状態の死体は私も初めて見ました。誰かが言つていたんですけど、まあしへ海竜のゾンビですね」

「……へえ」

口元で白い息が靄になる。

倉庫の最奥に横たわるその亡骸は、まさに海竜と呼ぶに相応しい姿だった。

かつて地球上に生息していた首長竜には、首が長く頭が小さいものと、首が短く頭が大きいものという二つのタイプが存在したとされている。このグレムリンはそれらを足して二で割ったような容貌だ。

全身を強固な鱗が覆い、その下には形の崩れた筋肉が詰まっている。六枚の鱗のうち、前の一対が最も幅広で、先端に生えている爪もとりわけ太い。

「筋組織の有機物が劣化しているので、特機の筋肉としては使えませんね。サイズが凄いので動力液はたくさん搾り取れそうです。他に使い道があるとすれば、研究のために解剖するくらいでしょうが。案外、海軍さんからしたら珍しくないタイプなのかもしれませんけど」

松永の注釈を適当に聞きながら、虎彦はグレムリンの周囲をぐるりと回つてみた。

歩幅と比較してみた感覚では、胴体部分だけで十メートル前後はある。そこに胴体の半分に匹敵する首と尻尾が付いているので、全体としては二十メートルほどになるだろうか。

巨大だ。身体が長いだけではない。隅々までが強靭で、大きいのだ。

兵器に喻えるなら、縦に並べた戦車一輛に匹敵する。陸上自衛軍最大のトランスポーター、特大型運搬車ですら全身を荷台に納めきれなかつたというほどだから、そのサイズがどれほど規格外か知れようものだ。

「いや、わざわざ岡山の総合研究所に運ぼうとしてたくらいだし、研究材料としての価値は充分あるってことなのかな……」

松永は虎彦が話を聞いているのがどうか、全く気にしていないらしい。

技本の空木も話好きだったが、彼女の場合は自らの知識を相手に聞かせ、理解を得ることを楽しむ性格であった。それに対し、松永はその場で頭に浮かんだことを喋つてはいるだけに過ぎない。

「松永三曹。岡山に運ぶつもりだったグレムリンが、どうしてここに転がってるんだ」

岡山異星生物総合研究所といえば、西日本におけるグレムリン研究の中心である。

この海竜について調べるつもりなら、こんな駐屯地の倉庫の片隅に放置せず、さっせと持ち込んでしまうべきだわつ。

「今はあちらさんには余裕がないんですよ」

松永が虎彦の疑問にあっせんと答える。

「ここの前の一戦で『女王』の死体が手に入つたでしょう？ 今はそいつの調査に掛かりつきりらしいんですよ。そのくせ普段と変わらず調査依頼が来るもんだから、倉庫もスケジュールも一杯なんだそうですね」

そういうことか、と虎彦は納得した。

十日ほど前、獄山周辺で第三小隊が撃破した『女王』は、頭部が粉々に吹き飛んでいたものの、首から下は原形を留めていた。研究畠の人間からすればめったに手に入らない貴重なサンプルだったに違いない。

「しかし、こんな巨体でどうやって戦ってるんだろうな」

「水中では浮力がありますから。いくら金属とはいって泳ぐくらいはできるでしょう。私は専門家じゃないので想像に過ぎないんですが、このグレムリンは大型船舶を標的とした強襲を担当しているんじゃないでしょうか」

ようやく、松永が軍人らしい話題を口にする。

「上顎も下顎もがつり開く構造になつてますから、鰓を振つて海面まで上昇しながら、顎を百八十度開いて船底にがぶり」とですね。やけに鋭い爪は、船体にしがみ付くために使うんだと思います

松永の表現は妙に生々しく、虎彦は鋼の海竜が海中を泳ぎ回り艦艇を襲う様を克明に想像してしまつ。地球外からやって来た生命体とは思えないほど、海という環境に適した個体であると言わざるを得ない。

「……海に、適応……」

虎彦は自分の考えに何か引っかかるのを感じた。

グレムリンは地球外に起源を持つ生命体だ。それには疑いを差し挟む余地などない。

ならば、これはいつ『海に適した身体構造』を獲得したのだろうか。

宇宙のどこかにも海に似た環境があり、このグレムリンはそちらに適応した肉体を持つていたため、地球の海で暴れることができた……そう仮定すれば説明はつぶが、いささか偶然に頼り過ぎていて、異星生物が地球に降つてくるだけでも天文学的確率なのに、その発生地にも地球と同じ海があるなんて、天文学的確率の掛け算だ。

地球に来襲してから獲得したと考えれば、確率的な問題は多少マ

シになる。

しかし代わりに別の　或いはもつと深刻な　問題が生じてしまつ。

「まさか、たつたの三十年で海に適応する身体に進化したつてことか……？」

だとすれば、なんて規格外の適応力なのだろう。

懸念はそれだけではない。これから先、虎彦達が戦うことになるグレムリンが更なる進化を遂げ、未知の能力を備えるようになるかもしれないのだ。

もしかしたら研究者レベルでは周知の事実なのかもしれない。だが、少なくとも戦場で戦う兵士の教育課程には、そのような理屈は含まれていない。

「ん……これは……？」

虎彦は海竜の頭部に顔を寄せ、表面を間近から観察した。額にこびり付いた霜をコートの袖で削り落とし、頭部中央の鱗を露わにさせる。

「IJのグレムリンの調査は着手されているのか？」
「いいえ、まだ手付かずだと思います」

予想どおりの答えが返ってきた。もしきちんと調査されていな
ら、こんな分かりやすい違和感を見逃すはずがない。

「中隊長に、いや、天野大佐に直接報告すべきだな」
「えつ？ そんなヤバいことでもあつたんですか？」

虎彦は何も言わず、額の鱗を指先で撫でた。氷のように冷たい触感が神経を逆流し、痛みにも似た刺激を脳髄に送り込んでくる。

額の中央に位置する鱗 海竜型グレムリンの全身を覆う無数の鱗の中で、それだけが極小のボルトによって螺子止めされていた。こんなグレムリンが自然に発生するなんて聞いたことがない。誰が何のために手を加えたのか分からぬが、人為的な加工が施されていることは疑いようがなかつた。

虎彦は誰に聞かせるでもなく吐き捨てる。

「……つたく。何が『まさしく海竜のゾンビ』だ。これじゃまるでフランケンシュタインの怪物じゃないか」

一一〇一一年十月二十五日 鳥取県鳥取市 津ノ井駐屯地

「何だか、妙に疲れた……」

怜次はよく分からぬ疲労感を引きずつたまま、独り廊下を歩いていた。

反省会という名のミーティングは、少し進んでは横道に逸れ、また進んでは前の話題に戻りを繰り返して、先ほどよりやく終わりを迎えた。

結局、後片付けを済ませた頃には予定を三十分ほど超過していただろうか。

「まあ……意見はまとまつたからよしとするか」

怜次が小脇に抱えたノートには、今回のミーティングの議事録と結果が丁寧に書き込まれている。その几帳面な筆跡の文字を読めば、誰であつても、これを書いた人物の性格を理解できるだろう。

ふと、窓の外に目をやる。

西の空に赤銅色の太陽が熔けている。

どりりとした液体の太陽が、青空に染み込んで空と地表の境界線を燃えるように鮮やかな赤で染め抜いていく。

そんな大袈裟な表現がしたくなるほど濃厚な夕焼けだ。

「怜次君、ちょっといい？」

後ろから呼び止められ、振り返る。

怜次のことをこうやって呼ぶ知り合いは一人しかいない。

「岸田兵長。どうかしたんですか」

ミーティングルームで別れたはずの岸田兵長が、廊下の真ん中にちょこんと佇んでいる。

決して長身とはいえない背丈の怜次でも、兵長と視線を合わせると、どうしても俯き気味になってしまつ。

物理的に止むを得ないとはい、上官を見下ろすというのはやはり不思議な感覚だ。

「今日の仕切り、結構良かつたよ」

岸田兵長は前振りもなく切り出した。

夕日に照らされた笑顔は陰影のコントラストが深く、普段とは異なる雰囲気を放っている。

怜次は自分のことを疑い深い性格だとは思っていない。けれど今、兵長が浮かべている笑顔の裏には、純粋な賞賛以外の意味を感じ

ずにはいられなかつた。

ミーティングの前にも同じことを思つたが、一等兵に過ぎない自分に仕切りを任せたこと事態が不可解だ。ああいう議題の進行は、同じ階級の者ではなく上官が担当したほうが角も立たないはずである。

「どうして自分に仕切りを任せたんだ そんな顔してるね」

怜次は思わず息を呑んだ。心を見透かされたとしか思えない一言だつた。

まさか考えていることが顔に出ていたのだろうか。怜次は制服の袖で顔を拭つた。すると、兵長は愉快そうに笑つて踵を返した。背中を向けて数秒。岸田兵長は声のトーンを落として会話を再開する。

「もしも小隊長に何かあつたら、小隊の指揮権は次に階級が高い人に委ねられる。それは知つてゐでしょ」

「はい。うちの小隊の場合は猪熊軍曹ですよね」

当たり前すぎて、逆に何が言いたいのか分からぬ。この前の獄山における戦闘でも、小隊長不在の第三小隊を猪熊軍曹が指揮した。改めて確認するような事項ではないはずだ。

「それで、猪熊軍曹も隊の指揮ができない状態になつたら、今度は私に指揮権が回つてくることになるわけ。だつたら……」

岸田兵長がくるりと振り返る。

焼け爛れた空の色に顔の半分を染め、目を細めながら口の端を少しだけ綻ばせる。

この表情の変化に如何なる感情が込められていたのか、怜次はつ

いに理解できなかつた。

「今まで力になれなくなつたら、誰が小隊を率いることになると思つ?」

「 縁起でもないと言わないでください」

怜次は首を左右に振つた。日向中尉に不慮の事態が起つて、猪熊軍曹は隊を指揮することができなくなり、岸田兵長が戦力から外れてしまつ。もしもそんな状況になつたら、第三小隊は壊滅したも当然である。

けれど、壊滅したからそこで終わるわけではない。誰かが残存兵力をまとめ、戦場からの撤退や他部隊との合流、或いは戦闘の続行を指揮する必要があるのだ。

「俺は二等兵だから他の連中と同じ階級です。指揮権だなんて……」「違つよ」

強い口調で断言される。

岸田兵長はもはや笑みの欠片も浮かべていない。

「君は他の子とは違う。君だけが陸軍の正規兵で、他の子はみんな年少兵なんだから。階級は同じでも扱い今まで同じことはならないの」

この小さな身体のどこに、これだけの胆力があつたのだろうか。怜次は岸田兵長の真つ直ぐで真剣な眼差しに気圧されて、余計な口を差し挟むことができずにいた。

「だから、万が一私達に何かがあつたら、君があの子達を率いることになる。それだけは肝に銘じておいて」

きつとそれこそが、わざわざ仕切りを負かされた理由。久我怜次は彼らを率いる立場なのだと自覚させるための遠回しな下準備。最後に、岸田兵長はほんの少しだけ表情を緩めた。

「余計な重荷に感じるかもしれない。だけど、君にはあの子達の拠り所になつて欲しいの」

軽い口調の、重い要請。

怜次はすぐに返事をすることができなかつた。

第十九話 謎めぐ者との遭遇

一一〇一一年 十月二十六日 岡山県岡山市 岡山異星生物総合
研究所近辺

その施設は郊外の開けた土地に設けられていた。

使われていなかつた余剰の土地を区画整理して拓いた場所らしく、大型の輸送車輛が余裕を持つてすれ違える道幅の道路が一帯に交差し、そこに種々多様な研究施設が点在している。まさに研究地区と呼ぶに相応しい風景だ。

住宅地を始め、生活に必要な施設は殆ど見当たらない。職員は外部から通勤しているのだろうか。それとも研究施設に見える建物のいずれかが宿舎になつてているのか。

見栄えや自然環境に配慮してか、余つた土地には芝生や広葉樹が植えられ、ちょっとした緑化地帯の相をも呈している。

その中でも一際大きな広葉樹の木陰で、少女は幹にもたれて座り込んでいた。

「ああ、いい気持ち……」

梢から柔らかな陽光が注ぎ、涼やかな風が色素の薄い前髪を揺らす。グレムリン関連の研究といつ剣呑なことをしている場所とは思えない長閑さである。

少女から十数メートルほど離れたところでは、制服姿の警備兵が小銃を担いで歩き回っている。不審な外国人観光客の片割れの監視を命ぜられているのだろう。少女が笑顔でひらひらと手を振ると、警備兵は帽子を深く被つて目線を逸らした。

研究施設といえども、民間人の立ち入りが完全に禁止されているわけではない。正規の手続きさえパスすれば、ある程度のところま

では見学することが可能である。

無論、あの警備兵のよつた監視が常に付いてくる上、重要な研究施設があると思しき地区には接近すら許されないといつ制約はあるのだが。

「渡り鳥が南に飛んでいくのも分かるわ。こんなに過ごしやすいんだから」

そんな大人の事情などお構いなしに、少女はぐつと背伸びをした。木漏れ日を見上げながら、眠たそうに目を細める。このまま放つておいたら寝入ってしまうのではと思われたとき、黒スーツの男が少女に近付いて声を掛けた。

「カーテット。寝るなら置いていくぞ」

「まさか、そんな。眠りそうに見えました?」

少女は広葉樹の根元から立ち上がり、服に付いた砂を払った。黒スーツの男は表情の薄い顔を気難しそうにしかめている。苛立つているのは誰の目にも明らかだ。

「どうしたんですか、レイチェナント」

「！」は空振りだった。追跡は振り出しだ

苦虫を噛み潰したような返答に、少女は首を傾げる。

「一昨日から、外部からのグレムリンの搬入を受け付けていなかつたらしい。故に『モルスコイ・ズメイ』は代替となる機関に持ち込まれたのだと考えられるが……」

「どこに運ばれたのかは分からないんですね」

「警戒心を抱かれずに聞き出すのは不可能だと判断した。本職の諜

報部ならもつと上手くやれるだろ？が……じつは、何をしていろ

黒スーツの男は怪訝そうに眉をひそめた。

少女は話が終わるのも待たず、足元のキャリーケースを漁り始めたかと思つと、中国地方の大判地図を取り出した。

そして、地方の北東を男に提示する。

「発見地点の海岸からこの研究所へ向かう途中に、陸軍の基地があります。きっとここに運び込まれたんだと思います」

男は少女から地図を奪い取ると、穴が開かんばかりに凝視した。

「確かに可能性は考えられる。だが、いくら移動経路の途中にあるからといつても、そんな小規模な基地に運び込む意味があるのか？ もう少し南下すれば大きな基地もあるだろ？」

「根拠はあります」

そう言つて、少女は微笑むように唇を緩める。

しかし、そのくりくりとした瞳だけは、どこか遠くに焦点を合わせていくように見えた。

「あの基地には『特機』が配備されているんですね」

「そうか！ 日本の『特機』はグレムリンの肉体を材料としていたな。その基地なら、グレムリンを保管しておく施設くらいはあるはずだ」

声のトーンが一段階上がつていた。一見すると無表情で無感動に思えるが、口の端をしつかりと上げている辺り、手掛けかりを掴めたことを喜んでいるのは明らかだ。

「それさえ分かればこんな場所に用はない。その基地へ向かうぞ……
「えー…… オカヤマのブドウが美味しい季節だつて、姉さんが……」

少女は黒スーツの男に急かされながら、研究所の敷地を後にして、駐車場に停めておいた黒塗りのレンタカーに乗り込む。

黒スーツの男は少女が後部座席に座つたのを確認して、ゆっくりとアクセルを踏んだ。

一人を乗せた車は、郊外から市街地へ向かう交通の本流に逆行するように、中国山脈へ北上していく。

岡山異星生物総合研究所から中部方面隊津ノ井駐屯地まで、直線距離にしておよそ百キロ余り。自動車ならば一時間ほどで辿り付く距離だろう。

「それにもしても、あの基地に特機部隊が駐留しているとよく知ついたな。他国の小規模な基地の駐留部隊など、いちいち覚えていられるものではないだろ？」

周囲の風景から住宅地が消え、縁豊かな山々が近付いてくる。少女は車窓に顔を貼り付けるようにして、流れ行く異国の風景を楽しんでいたが、運転席の男から話しかけられたことに気付いて座席に座り直した。

「姉さんが教えてくれたんです

「……スヴェトラーナか」

「はい。もしオカヤマの研究所に行つていなかつたら、近くの特機部隊の基地に運ばれているだろ？……あと、ブドウの果樹園の所在地も教わりました」

運転席で黒スーツの男が口を噤む。

車はいつしか山道に入り、岡山と鳥取の県境付近へ差しかかる。

としていた。少女は再び顔を窓外に向け、紅葉した山々に視線を奪われている。この姿だけ見れば海外旅行中の観光客としか思えないだろう。

「お前の姉とは何度か顔を合わせた程度だが、どうにも掴みどころがないというか……何を考えているのか分からぬ娘だな」

突如、周囲が暗闇に包まれる。

規則的に並んだオレンジ色の電燈が、後方へ流れながらトンネルの内壁を照らし上げる。

平日ゆえか対向車とは殆どすれ違わない。トンネルに入つてから、対向車のヘッドライトが現れたのは一度きりだ。

黒スーツの男はバックミラー越しに後部座席を見た。後部座席の窓は、トンネルの暗闇を背景に車内の風景をうつすらと映している。鏡ほどはつきり反射しているわけではないが、窓を見れば自分と目が合う程度の像は結んでいることだろう。

少女は窓に映る自分と向かい合うようにして、窓ガラスに顔を寄せたまま、楽しそうに微笑んでいた。

窓の外には暗闇と電燈とコンクリートの内壁しか存在しない。

それなのに、少女はトンネルに入る以前の風景を眺めたのと同じ表情で、無機質かつ人工的な光景に見入っているのだ。

「……こんなものすら珍しいのか……」

「どうかしました？」

やがて車はトンネルを抜け、陽光が目を眩ませる。
天頂付近に輝く太陽を歪な影が遮つた。

「 ッ！」

男は反射的にハンドルを切つた。急激なハンドリングが後部座席の少女を揺さぶり、シートの上を転がした。

「えつ？ わ、わっ！」

黒塗りの車をガードレールに接触させたまま、塗装が削れるのも構わず、道路の中央から車体を引き離す。

直後、車の真横に鈍色の巨体が落下。その重量が路面のアスファルトを粉碎する。

「グレムリン……！」

アスファルトの破片が車体に降りかかる。

男はアクセルを踏み込んだ。グレムリンと自動車の距離は僅かに数メートル。背を向けている隙に逃げ切るしかない。

だが、グレムリンの行動は逃走よりも遙かに速い。

鞭のようにしなる『尾』が車輌後部を打ち据え、トランクと左後輪を吹き飛ばす。

鉄製の車体が紙細工の如く潰され、路面との摩擦で火花を上げながら停止した。

「リュボーフィ！」

男は運転席を飛び出して後部座席の扉をこじ開けた。

幸いにして車体の損壊は車内にまで及んでおらず、少女は座席の上で目を回しているだけであつた。

「あの……今のは？」

「グレムリンだ！ くそつ、こんなところで……！」

トンネルの入り口を塞ぐように、巨大な背中が立ち上がる。

甲羅状の平たい装甲を背負い、短く太い一本の脚で砕けたアスファルトを踏み荒らす様は、一本足で立つ陸龜を思わせる。

前脚も後脚と同様の形状をしているが、下方へ向かつて生えた三本の杭状の爪は尋常の生物に見られる器官ではない。あの巨体の重量を乗せて前脚を振り下ろせば、戦車の上面装甲程度ならば容易く打ち破られることだろう。

グレムリンならば当然具えているはずの三対目の脚は、自動車を破損させた鞭のような一本の『尾』として発達したらしく、不気味なまでの自由度で動き回っている。

「逃げるぞ！」

しかし男の焦りとは裏腹に、少女の反応は穏健そのものであった。

「無理でしょう。全力で走つても逃げられません」

「だがな！ 私にはお前を護衛するという任務がある……」

甲殻のグレムリンが破損した車のほうへ向き直る。一歩足を動かすごとに、アスファルトが軋みを上げてひび割れた。

白濁した眼球が男と少女を捉える。

次の瞬間、迷彩色の鋼鉄の巨人がグレムリンの背に飛び降りつた。

『離れて！』

拡声器を通した少女の声が峠に響き渡る。

迷彩色の巨人はグレムリンの甲殻の縁を掴み、平たい表面に膝を押し付けてしがみつきながら、機関砲に覆われた右腕を振り回す。

グレムリンが体躯に似合わぬ金切り声を上げた。

巨人は機関砲の砲口をグレムリンに向けようとしているらしかつ

たが、グレムリンの抵抗があまりに激しく、振り落とされないでいるのが精一杯であるように見えた。

『何をしている！ 早く逃げろ！』

今度は力強い青年の声が響く。

男は我に返り、後部座席から少女とキャリーケースを引っ張り出して、破損した自動車から距離を取つた。

もがき続けるグレムリンの尾 に見える後脚の先端が自動車に引っかかり、トン単位の重さがあるはずの車体を軽々と転覆させた。

『ひのひ……！』

巨人が甲羅を蹴つて後方へ飛び退く。

着地と同時に右腕の機関砲が轟音を上げて火を噴き、体勢を崩したグレムリンに無数の砲弾を浴びせかけた。

「きやあつ！」

男の陰で少女が耳を押さえて悲鳴を上げる。

グレムリンと遭遇しても顔色一つ変えなかつた彼女を叫ばせたのは、多量の炸薬が絶え間なく爆発する音の物理的な衝撃であつた。機関砲の発射音はそれほどまでに凄まじく、トンネル周辺の杉林を重厚な爆音で瞬く間に包み込んでいく。

砲弾が堅牢な甲殻にぶつかつては炸裂し、炎と破片を撒き散らす。グレムリンはその威力に押されるようにして杉林に飛び込み、幹を圧し折りながら山中へと消えていった。

グレムリンの姿が見えなくなるのと前後して、巨人は砲撃を止めた。

「……助かった、のか？」

静寂が辺りを包み込む。

迷彩色の巨人が機関砲を下げる、首を動かす。人間のそれとはかけ離れた無機質な頭部に見据えられて、男は思わず息を呑んだ。

巨人の姿はありとあらゆる意味で常軌を逸していた。筋肉に固められた四肢。腕を覆う形で取り付けられた火氣。前方へ大きく張り出した胸部。胴体と比べて格段に小さな頭部。兵器としてもヒトガタとしても歪で不完全な形状でありながら、その動きは不気味なほどに滑らかで人間的だった。

無論、人間の動きそのものというわけではない。それでも見る者の不安感を煽るには充分すぎる。

「わあ！ 特機？ 本物？ 初めて見た……」

少女が無邪気に騒ぎ始める傍ら、男は睨むような眼差しで異形の巨人を見上げていた。

その姿はさながら人型のグレムリンのようであり

第一十話 冷たい時代

一一〇一一年 十月二十六日 鳥取県八頭郡智頭町 黒尾トンネル北口近辺

『一いちら一号機。逃走中のグレムリンは第一小隊が撃破したみたい。とりあえず任務終了つてことになると思うけど、念のため二号機が確認に向かってるところだからから、暫くそのまま待機しておいて』

通信機から岸田兵長の声がした。

怜次は開け放たれた胸部装甲の内側に座つたまま、外へ引っ張り出した有線ハンドマイクを口元に添えて返答する。

「二いちら二号機。了解しました」

『そろそろ。一般車輛が通るかもしれないから、念のために機体は車道から避けておいてね。停車中の特機にぶつかって追突事故なんて前代未聞よ?』

「大丈夫です。機体はもうドライブインに入れてあります」

黒尾トンネルの北口を出てすぐ右手には、ちょっととしたドライブインが設けられている。二号機 未だに従来型の三式のままである は乗降ハッチを兼ねた胸部装甲を開いたまま、その駐車場の片隅に屈み込んでいた。

すぐ、という表現は誇張は決してではない。このドライブインは、文字通りトンネルの目と鼻の先に位置しているのだ。

つい先程の戦闘で、三号機がグレムリンをわざわざ山中へ追い立てたのもこここの存在が大きい。こんな場所で本格的な戦闘を始めたら、流れ弾やらグレムリンの抵抗やらで、周辺に多大な迷惑をかけていたことだろう。

『もしかして、いつ見えてる?』

「はっきり見えてますよ。一号機も岸田兵長も」

ドライブインの駐車場の反対側では、迷彩塗装の一〇式が二号機よりも深く身を屈めてしゃがんでいた。

装甲が三式と同じオリーブ色の迷彩で塗装されているので、素人には三式との区別がつきにくいかもしれないが、特機兵ならば見間違えるはずなどない。あれは間違いなく一〇式の体型だ。

一号機の足元で小さな人影が手を振った。ドライブインには大勢の兵士が集まっていたが、誰が手を振っているのかはすぐに分かる。それこそ第三小隊の隊員ならば三式と一〇式の区別よりも簡単である。

『ひとまず今日は』苦労様。撤収命令が出るまで休憩していいよ』
「了解しました」

怜次はハンドマイクを通信機の本体に戻し、開きつ放しになつていた三号機の胸部装甲から降りた。

可愛らしい名称のドライブインには、無骨な形状と迷彩塗装の軍用車輌が何輌も停車しており、ある種の異様な雰囲気を湛えていた。近隣でのグレムリンの出現を受け、ドライブイン自体の営業は一時的に停止している。そのスペースに目をつけた自衛軍が、本作戦の行動拠点の一つとして借用したのだ。

無論、部隊の撤収が完了すれば、ドライブインの営業も再開される。

それを考慮してか、キャタピラやタイヤの形に残される泥汚れを落とすための清掃車が、店舗のすぐ隣で待機していた。

『うううところが自衛軍らしい』怜次はそう思った。

前身が自衛隊という微妙な立ち位置の組織だったせいが、周辺住

民に氣を使つ癖が染み付いているらじこのだ。

「話は終わったのか？」

背後から月子が声をかけてきた。

怜次は振り返つて返事をしようとして、眉を傾ける。

「どうしたんだ、その紙袋」

何故か月子は皮手袋を嵌めた右腕に茶色の紙袋を抱えていた。黒尾崎に来る前はそんなものなど持つていなかつたはずだ。

月子は平然とした様子で袋の中身を取り出した。

「たい焼きだけど？」

「……いや、だからなんでそんなの持つてるんだよ」

「向こうの屋台で売つてたよ。今日は肌寒いから丁度いいかと思つて」

月子が示す方向を見ると、道路を挟んだ反対側で小さな屋台が店を構えていた。それどころか、軍服姿の軍人達が軒先に列を成していぐらしかつた。

「昔からあそこで店を開いているそうだよ」

「田の前で戦闘が起きたばかりだつてのに、元気なもんだな」

日本という国は国土の大半を山と森に覆われており、平坦な土地は田畠や居住地として利用され、大陸のような『何もない平地』が殆ど存在していない。例外といえば、広大な平地を擁する北海道くらいだろう。

そのため、人の住む土地の周辺から追い立てられたグレムリンは、

必然的に山地へ逃れていくことになる。

特機のような兵器が実戦投入されている理由の一つもそれだ。キヤタピラやタイヤで走行する車輌では対応しづらい地形に、歩兵では扱いにくい火力を持ち込み、従来兵器では補えない要求を補完すること。裏を返せば、山中に高火力を求める一ーゾが存在していることの証左もある。

グレムリンの上陸地点となる沿岸に次いで危険なのは、餌の多い市街地などではない。

潜伏場所となり得るならかな山地や森林なのだ。

「別にいいじゃない。お陰で暖かくて甘いものにありつけるんだから」

月子は取り出したたい焼きを咥えると、そのまま怜次の傍にやつてきた。そして、もごもごと何事か言いながら紙袋を差し出す。

怜次は少しだけ考え込んでから、紙袋のたい焼きを一匹貰つた。一口齧ると、餡の程よい甘みと香りが口腔を満たし、緩やかに鼻腔へと抜けていく。疲労した身体には丁度良い等分補給だ。

「さつきの戦い、少し懐かしかつたな」

不意に月子が呟く。最初、怜次はその意図を測りかねて首を傾げたが、すぐに月子の言わんとする理解した。

「初めて会つたときの戦闘か。あのときは黒河内が一人で三号機に乗つていて、俺がグレムリンに襲われていたんだな」

「結果的にはそうなるのかな」

九月三十日。第三小隊の制式発足の前日にして、怜次と月子は今回の戦闘と似た状況で出会つていた。

山間の道路に出現したグレムリン。

それに襲われる生身の人間と、窮地に駆けつける三式特機。類似点が多すぎて、自然とあの日のことが頭に浮かんでしまう。不意に冷たい風が駐車場を吹き抜ける。否が応でも冬が近付いていることを思い出させる、乾いた風だった。

月子は戦闘服の袖越しに二の腕をさすつた。

「う……寒い……」

「そうか？」

確かに肌寒い風ではあるが、月子の反応は少々大袈裟なよつて思えた。

すると、月子は耳を貸すよつて手振りで示し、怜次に小声で囁いた。

「右腕はすぐに冷たくなるんだ」

「あ……」

そういうことか。間抜けなことに、本人の口から説明されてようやく理解が及ぶ。

月子の右腕は、肩口から指先に至るまで、全て特機の腕と同じ素材の義肢によつて代替されている。筋肉以外の素材は金属やプラスティック、セラミックの類であり、生身と比べて温度が低下しやすいのだ。

そんな代物を常時身に付けているのだから、寒さに敏感になるのも仕方がない。

「大丈夫か？ ここら辺は雪が多いっていっけど」

秋風すら身に沁みるなら、本格的な冬が到来すれば余計に辛いは

すだ。

月子は苦笑気味に肩を竦めた。

「うーん……雪には慣れてるつもりなんだけどね。一時期、新潟に住んでた頃があるから」

鳥取県は、豪雪地帯対策特別措置法によつて県全域が豪雪地帯の指定を受けた県の中では、最南端に位置している。それでも、より高緯度にある豪雪地帯と比べれば幾分かはマシなのだろう。

「新潟のどいら辺だ?」

「佐渡島。本土の方と比べれば雪は少ないけど、関東よりはずっと積もるよ」

月子は左手に息を吹きかけながら答えた。

国が指定する豪雪地帯は、通常の『豪雪地帯』と『特別豪雪地帯』に分かれている。新潟の場合は山側の一帯が特別豪雪地帯で、佐渡島や県庁所在地のある越後平野は豪雪地帯に相当するらしい。

文字通り、近所よりは少ないが他所から見れば雪ばかりといつ気候なのだろう。

「へえ、佐渡島か。……ん?」

怜次は妙な引っかかりを覚えて軽く首を傾げた。月子の発言におかしな点があつたわけではない。佐渡島といつ土地の名前になになく感じるところがあつたのだが、その理由すらよく分からなかつた。本人にすら分からぬ感情が他人に伝わるはずもなく、月子は黙々とたい焼きを食べ終え、紙袋の口を折り畳んで三号機の爪先に置いた。

「そりゃ、あの車に乗つてた人はどこに行つたんだろうね」
「さあ？ 車が使えないなら、山を下りてるとは思えないけど……」

月子のさり気ない疑問に返事をしながら、怜次はトンネルの入り口付近を見やつた。

グレムリンに破壊された自動車は、交通の妨げにならないように路肩へ移動させていたが、運転手の姿は見当たらない。

「いないみたいだな」

視線を戻そうとした瞬間、視界の隅に少女の姿が入り込んだ。偶然、近くを通りかかった人が視野を横切つた。ただそれだけなのに、少女の姿は不思議なくらいに怜次の意識を惹きつけた。華奢な体躯に色素の薄い髪。色白の肌。軍人だけの空間に不釣合いな可愛らしい服。

怜次は何も考えず、頭に浮かんだ名前を口にした。

「……玲奈？」

「えつ？」

月子も少女のいる方へ振り返る。しかし、そこにいたのは第三正体の榎玲奈などではなく、グレムリンに襲われた自動車に乗つていた少女だった。

「見間違いか……」

怜次は気まずさを隠すために頬を搔いた。

「なんだ、そそかしいにも程があるぞ」

月子が呆れた様子でそう言つた。返す言葉もなかつた。

巣原目に見れば似ていなわけではないが、あの少女と玲奈は明らかに別人である。

そもそもあの少女は日本人でさらないらしい。今となつては、どうして誤解したのか分からないくらいだ。

怜次達の視線に気付いたのか、少女がこちらに振り返り、ひらひらと手を振ってきた。

戸惑う怜次に代わつて、月子が軽く手を振り返す。

「元気そうだね。あんな危ない目に遭つたばかりだつていうのに」

何気なく月子が呟く。

本人としては少女の気丈さを褒めたつもりだつたのかもしれない。だが、その一言は怜次の思考の片隅に引っかかり、なかなか離れてくれなかつた。

—〇一一年十月二十六日 鳥取県八頭郡智頭町 ドライブイン店内

営業を一時的に中断しているはずの店内は、休息を求める軍人達で溢れ返つていた。本来ならレストランのために設置されたテーブルと椅子も、今は迷彩服の男達のための休憩スペースと化している。虎彦は六人掛けのテーブルに腰を下ろし、向かいに座る黒スーツの男と向かい合つた。

「助けて頂き感謝します、日向中尉。私はコーリー・ルスラノヴィ

チ・ディアギレフと申します。同行者はリュボーフィ・アレクサン
ドロヴナ・ドラグノヴァ。姓は違いますが、私の姪にあたります。
日本へは観光で訪れていたのですが……」

コーリーと名乗る男は、訛りの少ない流暢な日本語で事情を説明
した。

名前の様子から察するにスラヴ系、恐らくはロシアの人間だろう。
日本人にとってロシア人の名前はややこしい。苗字と個人名の間に
父親の名前を変形させた父称を挟む上に、父称と苗字の語尾が性
別に応じて変形するのだ。つまり同じ父親を持つ兄妹であつても、
微妙に異なる父称と苗字を名乗ることになる。

「礼ならうひちの部下に言ひつてやつてください。見つけたのも間に合
わせたのも彼らです」

「はい、飲み物買つてきましたよ」

人の波を縫つて佐代子が現れ、テーブルにミネラルウォーターを
一本置いた。

ドライブインの商店はまだ営業を再開していない。きっと屋外の
自動販売機で購入してきたのだろう。緑茶やジュースの類ではなく
ミネラルウォーターを選んだのは、外国人であるコーリーの好みを
判断しかねたためか。佐代子らしい気遣いである。

「ありがとうございます」

コーリーは佐代子に向かつて頭を下げた。言葉の流暢さといい、
日本に対する造詣がかなり深いようだ。

佐代子が立ち去つた後で、コーリーが重々しく口を開く。

「「」の国でも少年兵の運用が始まったと聞きましたが、実際に会つ

と衝撃が大きいです

あまりに真剣な表情だったので、虎彦はうつかりそれを聞き流しかけてしまった。

少年兵というのが月子達のことを指しているなら間違つてはいな。しかし、話の流れからすると、コーリーの認識に大いなる誤謬があるとしか思えなかつた。

「さつきの兵士は何年も前に成人していますよ

「……本当ですか？」

「本当です」

自分よりも年上だとは付け加えなかつた。そんなことを言えば、余計に混乱させてしまつに決まつてゐる。

「年少兵なのは、あなたを助けた特機の操縦士の方です。厳密にはそのうちの一人ですが」

「そうだったのか……」

コーリーは聞き取れるかどうか危ういほどの小声で呟いた。佐代子に対する反応から察するに、この男は年少兵 より一般的な表現をするなら、少年兵に関して良い印象を持っていならしい。

もつとも、そんな制度を素直に喜ぶ人間などいるとは思えない。どんな国でも、背に腹は変えられないという状況だからこそ、子供を戦場に送る愚行に及んだに決まつてゐる。

「私の国でも少年兵に近い制度があります。身寄りのない子供を集め、士官候補生の地位を与えた上で長期的な教育を施し、適正な年齢になつたところで士官として編入するのです

「ロシアの早期士官教育制度か。どちらがマシなんだろうな

コーリーは虎彦の溢した言葉に答えなかつた。

無言のまま、窓ガラスの向こうに広がる駐車場へ視線を送る。規則正しく並んだ軍用車輛の奥で、薄い髪色の少女……リュボーフィ・アレクサンドローヴナ・ドラグノヴァが跪いた三号機を興味深そうに見上げてゐる。

どうやら、怜次と円子は彼女にどう接するべきか判断しかねているらしく、三号機の足元でリュボーフィの行動を眺めているだけだつた。

「あのままでいられたら幸せなのかもしませんね」

コーリーの独り言に、虎彦は無言の肯定を返した。

第一十一話 新旧の境界面

一一〇一一年 十月二十六日 津ノ井駐屯地 特機整備工場

秋の日没は早い。怜次は薄暗くなつた空に背を向けて、眩い明かりの灯つた整備工場に足を踏み入れた。

甲高く耳障りな工具の音が怜次を出迎える。

幾つもの電燈によつて隅々まで照らし出された工場の中では、黒尾崎の戦闘で破損した特機の修理が行われていた。

今回の作戦は単純な山狩りであつた。獄山の『女王』が遺したグレムリンを搜索し、迅速に撃破するといつ、ある意味でありがちな内容である。交戦したターゲットも一体のみだつたので、大破させられた機体こそなかつたが、何機かは軽微な損傷を負つて工場へと送られた。怜次達の三号機もその一機だ。

「やつぱつ三式は脆いのかな」

修理用の台に立つ三号機を見やりながら、怜次はぱつりと呟いた。作戦全体を通して、三号機は一度も攻撃を受けていなかつた。それなのに修理が必要なほどの損壊を受け、修理工場に送られることがになつたのだ。

一等軍曹の階級章を付けた班長が怜次の肩を豪快に叩く。

「痛つ！」

「よお、久我一等兵」

班長はわざわざ階級をつけて怜次の名を呼んだ。こういつ場合は大抵からかいの意味が込められている。恐らく今回は、今被弾もしていなきに機体を壊したことを揶揄するつもりなのだろう。

「特機の引渡しはもう少し待つてくれ。新人に練習がてら任せてるんだ」「

班長が親指で指し示した方に目をやると、三号機の左腕の傍で若い整備兵が機材を奮つて悪戦苦闘しているところだった。

左手の装甲と保護カバーを外し、金属質の筋肉を小型のジャッキのような機械で押し広げ、露出させたフレームと関節に何やら手を加えている。怜次は修理に関する知識をあまり持っていないなかつたが、関節を修理していることは理解できた。

「それにもしても、今日は面白い壊し方だつたな。片手の関節だけ壊すなんて器用にも程があるぞ。どんな奴と戦つたんだ？」

「一本足の陸龜みたいな奴でしたよ。途中でそいつの甲羅にしがみ付いてたんですけど、後になつて確かめてみたら、左手の指や手首が動かなくなつてたんです」

怜次は思わず苦笑した。無傷で戦いを終え、些細な後始末のために三号機の左手を使おうとしたところ、指や手首が全く動かなくなつていたのだ。

そのときの用子のきょとんとした顔はちょっとした見ものだった。

今思い出しても、よく分からぬ感情で口の端が緩んでしまう。本人としては一つのミスもなく作戦を終わらせたつもりだったのに、蓋を開けてみれば原因不明の損傷を受けていたわけだから、相当驚いたに違いない。

「背中にしがみ付いて、ロデオみたいに暴れたわけか。そりや関節も壊れるわな」

班長は愉快そうに顎鬚を撫でた。暴れるグレムリンにしがみ付く

特機の姿を想像したのだろうか。確かに滑稽な想像だが、今日はそれに近いことが起こってしまった。世の中、何が起こるか分からないといついい例だ。

「三式って指が壊れやすいんでしょうか」

「新型と比べればな。今回のケースだと、機体と火器の質量から生じる遠心力を指先だけで支えたわけだから、生半可な造りだと三号機みたく関節が壊れちまう。三式の設計は古いところが多いから、多少の強度不足は放置されてたりするんだよ」

これでも初期型よりは改良されてるんだけどな、と班長は付け加えた。

一般に、一〇〇二年に制式採用された時点の三式の仕様を初期型と呼称し、それから数年後に全国配備が始まった頃の仕様を後期型と呼ぶ。尤も、初期型は黎明期の実験用という色合いが強く、実質的に無意味な区別となっている。

現在では、実戦部隊の三式といえば無条件で後期型を指すと考えて差し支えない。

「白川！ 神経ケーブルの連結箇所も確認しとけって言つただろ！ 何さつさと終わろうとしてんだ」

不意に班長が怒鳴り声を上げた。白川という名前らしい新人整備兵はびっくりと肩を震わせ、塞ごうとしていた筋肉を再び開き直した。

「す、すいません」
「氣いつけるよ。ケーブルの配線が切れたらそつから先は動かなくなるんだからな」

まるで巨人の手術をする研修医と、その指導医のような様相だ。

特機の四肢、特に手首から先はあからさまに人体を参考にしているので、一層その雰囲気が強くなる。

「すまん、まだ時間が掛かりそうだ」

「適当に時間を潰してきます。……それにしても、何だか手術でもしてゐみたいですね」

「人間の手をモデルに設計されたんだから、そりゃ似てくるぞ。原材料も曲がりなりにも生物なんだしな」

聞いたところによると、世の中には、特機を人間に似せることを不気味だとか、非効率的だとか評する自称識者も多いらしい。しかし怜次は、いや怜次に限らず、実際に特機を動かす人間の殆どは、そんなことを考えていなかつた。

神経系インターフェースで機体を動かす場合、当然ながら人体に近い形状とした方が圧倒的に扱いやすい。これよりも効果的な制御方法が開発されない限り、わざわざ人類から掛け離れた形状で造るメリットがないというのが現実なのだろう。

何より人体をモデルに開発したからこそ、特機の技術をフィードバックした義肢を開発することができたのだ。

「白川！ そこはそうじやねえつて……」

班長が白川に駆け寄つて指導を始める。

怜次は三号機の前を離れ、工場の出口へ歩いていった。

開け放たれたままの出入り口は、工場内部の明るさと屋外の薄暗さの境界面となつており、その強烈なコントラストに目が眩みそうになる。

視覚が照明の光に慣れていたせいか、外の風景は殆ど真つ暗にしか見えなかつた。

「久我さん」

出入り口横手の暗がりから怜次を呼ぶ声がした。

姿は暗くてよく見えないが、誰なのかくらいは声だけでも分かる。

「黒河内か。そんなところで何してるんだ？ 中に入ればいいだろ」

怜次は月子の方へ向き直つた。月子は左手で右腕を抱き寄せた恰好で、出入り口の横の壁にもたれ掛かっていた。

「遠慮しておくれよ」

困つたように笑いながら、月子は怜次の傍に近付いてきた。

出入り口から漏れる光に照らし出されて、ようやく姿と顔がはっきり見えるようになる。

怜次は何気なく首を傾げた。工場に入ることを遠慮する意図が掴めない。修理が終わった特機を受け取りに行くだけなのだから、遠慮なんかする必要はないはずだ。

そこまで考えて、班長が三号機の損傷を話題に出していたことを思い出す。

三号機の操縦を主に月子が担当していることは、整備班の隊員も知っている。つまり、左手だけを器用に壊した操縦士も月子だと気が付かれているということだ。

要するに、それを揶揄されるのが恥ずかしいのだろう。

「……君、変なこと考えてないか？」

月子が手を細めて怜次の顔を覗き込む。

言い訳のしようもないほどの中星だったので、怜次は適当に笑つて誤魔化すことにした。

「そんなことより。修理はまだ終わらないらしいぞ」

「本当に？ 手首以外にも故障があつたとか？」

「いや、新人の整備員の訓練も兼ねてるから、その分時間が掛かってるらしい」

怜次は整備工場の中へ視線を移した。それに釣られるように、月子も工場を覗く。

三号機の修理は先ほどよりも進んでおり、白川が左手を弄つてゐる間に、脚立に乗つた班長が肘を調べてゐるところだつた。

指や手首の関節が破損するほどの負荷が掛かつたのだから、他の部位……具体的には肘関節や肩関節にダメージがあつても不思議ではない。

「久我さん。あれは何をやつてるんだ？」

「何つて、修理だろ。手首と指、あと肘の辺りをだな……」

「そうじやなくて。その向こうだよ」

ほら、と月子は修理工場の奥を指差した。

怜次はその方向に目を凝らした。土台に横たわる特機の周りに、ちょっとした人ばかりができていた。集まつてゐるのは作業着姿の整備兵ばかりだ。特機を修理しているといふよりは、少しづつ分解しているといつた様子に見える。

備え付けのクレーンで、特機の頭部がゆっくりと吊り上げられていく。それは紛れもなく、無塗装の一〇式の頭であった。

「一〇式を解体してるのが……」

「せつかくの新型機を壊すなんておかしいだろ？ 何を考えているのや？」

怜次と用子は折り重なるようにして工場を覗いた。

整備兵達は一人の視線に気付くことなく、修理と解体に集中し続けている。直す行為と壊す行為が同じ場所で同時進行しているのは、何とも言いがたい不可思議な雰囲気である。

「新型だからこそ色々弄ってるのよ」

すぐ後ろで岸田兵長の声がした。下になつていた用子が不意打ちに反応して振り返る。怜次はその後頭部に押し退けられながら、少し遅れて岸田兵長の存在に気がついた。

岸田兵長は一人のリアクションを一頻り眺めてから続きを口にする。

「三式と比べて、一〇式は殆ど別物なくらいに改良されてる上に、新しいシステムもたくさん搭載されてるからね。ああやつて機体構造をくまなく勉強して、整備のコツを身に付けないといけないんだつてさ」

言われてみれば当たり前のことだ。

三式の制式採用から九年。途中で後期型へのアップデートを挟んだとはいって、九年間で更に高められた既存技術や、制式採用移行に開発された新技术の数々の大部分は、未だ三式に反映されていない。厳密には、そもそも反映することができないのだ。三式特機の構造を維持したまま改良を加え続けるには限界がある。その限度を無理に超えるくらいなら、いっそ全く新しい機体を設計した方が、効率的で効果的な結果を得ることができる。

その理屈で生み出されたのが、他ならぬ一〇式特機なのだ。

「操縦するときの感覚はあまり変わらないから、私達にはあまり関係ないんだけどね」

岸田兵長はそう言って説明を締め括った。

「要するに、一〇式の解体は整備の訓練の一環ということですね」
月子は納得して頷きながら、右腕を抱き寄せて怜次に寄りかかつた。

柔らかな質感の黒い短髪が口元に触れ、洗髪剤の香りを仄かに漂わせる。

「お、おい」
「……？ わあつ！」

上擦つた声が辺りに響く。本人としては壁にもたれたつもりだったのだろう。月子は飛び退かんばかりの勢いで怜次から離れた。

怜次は咄嗟に表情を取り繕つた。怜次から見て月子は三つも年下の少女だ。こんなことで過剰な反応をするのは、子供相手に取り乱すのと変わらないよう思えて気が引けてしまう。

岸田兵長はそんな一人の慌て様を心底楽しそうに眺めてから、怜次に視線を移した。

「そうやつ、怜次君。明日の十時に第一会議室に来てくれないかな
「会議室……ですか？」

意図を掴み切れず問い合わせる。

用事があるならここで言えばいい。月子に聞かせたくない話だとしても、席を外せるなりすればいい。わざわざ田と場所を改めるということは、まだ本題に入る準備が整っていないのか、それとも岸田兵長だけの用件ではないのか。

「日向中尉がね、直接話したいことがあるつてこの
「小隊長が……？」

予想外の返答であった。小隊長に呼び出されるような理由に心当たりはない。怜次は暫く考え込んでから、諦めて問い返した。

「……どうして隊長が

「私は怜次君を呼び出すように頼まれただけだから。理由までは聞いてないけど、多分、怜次君に頼みたいことでもあるんじゃないかな」

岸田兵長は『命令された』ではなく『頼まれた』と表現した。両者の階級の違いを考えると違和感のある言い回しだが、単に兵長が遊びのある表現を選んだだけだろう。

「頼みたいこと……ですか」

兵長は嘘を吐いている　怜次はそう直感した。嘘といつのは、日向中尉が怜次を呼び出す理由を知らないということだ。中尉の用件を把握した上で、それについてこの場で　つまり月子の前で言及することを避けたのだ。

そう考えれば、中尉の用件も白ずと想像することができる。きっと、月子を含む年少兵の訓練に関することに違いない。怜次も特機兵としてのキャリア自体は彼らと大して変わらないのだが、そこはやはり正規兵と年少兵、更に言えば十八歳と十五歳の違いなのだろう。

「……分かりました。明日の十時に第一会議室ですね
「よろしくね、怜次君」

岸田兵長は嘘が下手だ。そんな哀しげな表情をされたら、隠すものも隠せなくなる。

怜次は夜の暗闇に感謝した。これほど薄暗ければ、怜次以外に兵長の顔は見えていないだろう。これなら月子が要らぬ心配をするともないはずだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9714v/>

鋼鉄のネフィリム

2011年10月9日20時27分発行